

靈界物語 第四八卷 舍身活躍 亥の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第四八卷』愛善世界社

2003(平成15)年11月02日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onidodo.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 變現亂癡 へんげんらんち

第一章 聖言 せいげん（一―二五五）

第二章 武亂泥 ぶらんてい（一―二五六）

第三章 觀音經くわんのんきやう（一二五七）

第四章 雪雜寢ゆきざしね（一二五八）

第五章 鞘當さやあて（一二五九）

第六章 狂轉きやうてん（一二六〇）

第二篇 幽冥摸索いづめいもさく

第七章 六道の辻ろくだう つじ（一二六一）

第八章 亡者苦雜も さく さ（一二六二）

第九章 罪人橋ざいにんばし（一二六三）

第三篇 愛善信眞あいぜんしんしん

第一〇章 天國の富てんこく とみ（一二六四）

第一一章	靈陽山 <small>れいやうざん</small>	〔一二六五〕
第一二章	西王母 <small>せいわうぼ</small>	〔一二六六〕
第一三章	月照山 <small>げつせうざん</small>	〔一二六七〕
第一四章	至愛 <small>しあい</small>	〔一二六八〕

第四篇 福音輝陣ふくいんきぢん

第一五章	金玉の辻 <small>きんたま つじ</small>	〔一二六九〕
第一六章	途上の變 <small>とじやう へん</small>	〔一二七〇〕
第一七章	甦生 <small>かうせい</small>	〔一二七一〕
第一八章	冥歌 <small>めいか</small>	〔一二七二〕
第一九章	兵舍の囁 <small>へいしや ちやせ</small>	〔一二七三〕
第二〇章	心の鬼 <small>こころのおに</small>	〔一二七四〕

〔 〕

序文

社會の一般的傾向が、漸く民衆的になりつつあると共に、宗教的信仰も強ち寺院や教會に依頼せず、各自の精神に最も適合する所を求めて其粗弱なる精靈の満足を圖らむとするの趨勢となりつつあるやうだ。宣傳使や僧侶の説く處を聽きつつ己れ自ら神靈の世界を想像し之を語りて、所謂自由宗教の殿堂を各自に精神内に建設せむとする時代である。既成宗教の經典に何事が書いてあらうが、自ら認めて合理的とし、詩的とする處を讀み、世界の何處かに眞の宗教を見出さむものとして居る、今日廣く藝術趣味の擴まりつつあるのは宗教趣味の薄らいだ所を補ふやうになつてゐる。従前の宗教は政治的であり專制的なりしに引替へ、現今は藝術的であり民衆的となつて來たのも、天運循環の神律に由つて仁慈出現の前提と謂つても良いのである。

この靈界物語も亦極めて民衆的に且つ藝術的に、惟神の時機を得て大神より直接間接の方法を以て現代並に末代の人生に對し、深遠なる神理を宣示し且つ之を

傳達せしめ給うたのであります。惟神靈幸倍坐世。

大正十二年一月十二日 王仁識

總説

現時歐米諸國に於ける靈魂學に關する研究は漸く盛んになり、哲學界、文學界、實業界等に於て學識人格共に世界的定評ある知名の士即ちロツヂ、ジエームス、ロムブロー、マーテルリンク、フラマリオン、ヒスロツプ、コナン・ドイル、ヘーア、バアレツト、クロフォード、チエリス、クルツクス、ヘンスロー、メー才等の研鑽によりて發表される言論文章を以て唯一の研究材料となし、心靈の情態を探らむとするもの、吾國學者有識者の間に其萌芽を見るに至つたのは、靈界のために實に欣喜の至りである。併し日本人の通弊は何事も外來品を尊重し、自國品を輕視するを以て文明人士の採るべき態度となし、如何なる哲理と雖も、外人の口と手を通したものでなければ信じられないのだから、實に困つたものであ

る。この靈界物語も右に列擧せる歐米學者の口より出で手に成りしものならむに
は、輕薄な日本人には或は尊重され歡喜を以て迎へらるであらうが、惜しむ可
し、純粹なる日本人の口より出でたるを以て邦人には顧みられないのである。
本卷は三日間にして口述筆記せり。

大正十二年一月十二日

於湯ヶ島

王仁識

第一篇 變現亂癡

第一章 聖言「一二五五」

宇宙には靈界と現界との二つの區界がある。而して靈界には又高天原と根底の國との兩方面があり、此兩方面の中間に介在する一つの界があつて、これを中有界又は精靈界と云ふのである。又現界一名自然界には晝夜の區別があり寒暑の區別があるのは、恰も靈界に天界と地獄界とあるに比すべきものである。人間は靈界の直接又は間接内流を受け、自然界の物質即ち剛柔流の三大元質によつて、肉體なるものを造られ、此肉體を宿として、精靈之に宿るものである。其精靈は即ち人間自身なのである。要するに人間の軀殻は精靈の居宅に過ぎないのである。此原理を靈主體従といふのである。靈なるものは神の神格なる愛の善と信の眞より形成されたる一個體である。而して人間には一方に愛信の想念あると共に、一

方には身體を發育し現實界に生き働くべき體欲がある。此體欲は所謂愛より來るのである。併し體に對する愛は之を自愛といふ。神より直接に來る所の愛は之を神愛といひ、神を愛し萬物を愛する、所謂普遍愛である。又自愛は自己を愛し、自己に必要なる社會的利益を愛するものであつて、之を自利心といふのである。人間は肉體のある限り、自愛も又必要缺くべからざるものであると共に、人は其本源に遡り、どこ迄も眞の神愛に歸正しなくてはならぬのである。要するに人間は靈界より見れば即ち精靈であつて、此精靈なるものは善惡兩方面を抱持してゐる。故に人間は靈的動物なると共に又體的動物である。精靈は或は向上して天人となり、或は墮落して地獄の邪鬼となる、善惡正邪の分水嶺に立つてゐるものである。而して大抵の人間は神界より見れば、人間の肉體を宿として精靈界に彷徨してゐるものである。而して精靈の善なるものを正守護神といひ、惡なるものを副守護神と云ふ。正守護神は神格の直接内流を受け、人身を機關として天國の目的即ち御用に奉仕すべく神より造られたもので、此正守護神は副守護神なる惡靈に犯されず、よく之を統制し得るに至れば、一躍して本守護神となり天人の列に

加はるものである。又惡靈即ち副守護神に壓倒され、彼が願使に甘んずる如き卑怯なる精靈となる時は、精靈自らも地獄界へ共々におとされて了ふのである。此時は殆ど善の精靈は惡靈に併合され、副守護神のみ我物顔に跋扈跳梁するに至るものである。そして此惡靈は自然界に於ける自愛の最も強きもの即ち外部より入り來る諸々の惡と虚偽に依つて、形作られるものである。かくの如き惡靈に心身を占領された者を稱して、體主靈從の人間といふのである。又善靈も惡靈も皆之を一括して精靈といふ。現代の人間は百人が殆ど百人迄、本守護神たる天人の情態なく、何れも精靈界に籍をおき、そして精靈界の中でも外分のみ開けてゐる、地獄界に籍をおく者、大多數を占めてゐるのである。又今日のすべての學者は宇宙の一切を解釋せむとして非常に頭腦をなやませ、研究に研究を重ねてゐるが、彼等は靈的事物の何物たるを知らず、又靈界の存在をも覺知せない癡狂癡呆的態度を以て、宇宙の真相を究めむとしてゐる。之を稱して體主靈從的研究といふ。甚だしきは體主體從的研究に墮して居るものが多い。何れも『大本神諭』にある通り、暗がりの世、夜の守護の副守護神ばかりである。途中の鼻高と書いてある

のは、所謂天國地獄の中途にある精靈界に迷うてゐる盲共のことである。

すべて宇宙には靈界、現界の區別ある以上は、到底一方のみにて其真相を知ることは出来ない。自然界の理法に基く所謂科學的知識を以て、無限絶體無始無終、不可知不可測の靈界の真相を探らむとするは、實に迂愚癡狂も甚しといはねばならぬ。先づ現代の學者はその頭腦の改造をなし、靈的事物の存在を少しなりとも認め、神の直接内流に依つて眞の善を知り、眞の眞を覺るべき絲口を捕捉せなく

ては、黄河百年の河清をまつやうなものである。今日の如き學者の態度にては、假令幾百萬年努力するとも、到底其目的は達することを得ないのである。夏の蟲が冬の雪を信ぜない如く、今日の學者は其智暗く其識淺く、且驕慢にして自尊心強く、何事も自己の知識を以て、宇宙一切の解決がつくやうに、否殆どついたもの様に思つてゐるから、實にお目出度いといはねばならぬのである。天體の運行や大地の自轉運動や、月の循行、寒熱の原理等に就いても、未だ一として其眞を得たものは見當らない。徹頭徹尾、矛盾と撞着と、昏迷惑亂とに充たされ、暗黒無明の域に彷徨し、太陽の光明に反き、僅かに陰府の鬼火の影を認めて、大發

明でもしたやうに騒ぎまはつてゐるその淺ましき、少しでも證覺の開けたもの
目より見る時は、實に妖怪變化の夜行する如き状態である。現實界の尺度はすべ
て計算的知識によつて其或程度までは考察し得られるであらう。併し何程數學の
大博士と雖も、其究極する所は、到底割り切れないのである。例へば十を三分し、
順を追うて、追々細分し行く時は、其究極する所は、ヤハリ細微なる一といふも
のが残る。此一は何程鯨矛盾になつて研究しても到底能はざる所である。自然界
にあつて自然的事物即ち科學的研究をどこ迄進めても、解決がつかないやうな愚
鈍な暗冥な知識を以て、焉んぞ靈界の消息門内に一歩たりとも踏み入ることが出
來ようか。口述者が靈界より大神の愛善と信眞より成れる神格の直接内流や其他
諸天使の間接内流に仍つて、暗迷愚昧なる現界人に對し、靈界の消息を洩らすの
は、何だか豚に眞珠を與ふる様な心持がする。かく言へば瑞月は癡狂者或は誇大
妄想狂として、一笑に附するであらう。併し乍ら自分の目より見れば、現代の學
者位始末の悪い、分らずやはないと思ふ。プラス、マイナスを唯一の武器として、
緋や金米糖を描き、現界の研究さへも未だ其門戸に達してゐない自稱學者が、靈

界のことに嘴を容れて審神者をしようとするのだから、實に滑稽である。故に此

「靈界物語」も之を讀む人々の智慧證覺の度合の如何によつて、其神靈の感應に應ずる程度に、幾多の差等が生ずるのは已むを得ないのである。

宇宙の眞理は開闢の始めより、億兆萬年の末に至るも、決して微塵の變化もな
いものである。併し乍ら之に相對する人間の智慧證覺の賢愚の度によつて、種々
雑多に映るのであつて、つまり其變化は眞理そのものにあらずして、人間の知
識そのものにあることを知らねばならぬのである。もし現代の人間が大神の直接
統治し給ふ天界の團體に籍をおき、天人の列に加はることを得たならば、現代の
學者の如く無性矢鱈に頭腦を悩まし、心臓を痛め肺臓を破り、神經衰弱を來さな
くても、容易に明瞭に宇宙の組織紋理が判知さるのである。

憎まれ口はここらでお預かりとして、改めて本題に移ることとする。茲に靈界
に通ずる唯一の方法として、鎮魂歸神なる神術がある。而して人間の精靈が直接
大元神即ち主の神（又は大神といふ）に向つて神格の内流を受け、大神と和合す
る状態を歸神といふのである。歸神とは、我精靈の本源なる大神の御神格に歸一

和合するの謂である。故に歸神は大神の直接内流を受くるに依つて、豫言者として最も必要なる靈界真相の傳達者である。

次に大神の御神格に照らされ、智慧證覺を得、靈國に在つてエンゼルの地位に進んだ天人が、人間の精靈に降り來り、神界の消息を人間界に傳達するのを神懸といふ。又之を神格の間接内流とも云ふ。之も亦豫言者を求めて其精靈を充たし、神界の消息を或程度まで人間界に傳達するものである。

次に、外部より人間の肉體に侵入し、罪惡と虚偽を行ふ所の邪靈がある。之を惡靈又は副守護神といふ。此情態を稱して神憑といふ。

すべての偽豫言者、贖救世主などは、此副守の囁きを人間の精靈自ら深く信じ、且憑靈自身も貴き神と信じ、其説き教へる所も亦神の言葉と、自ら自らを信じてゐるものである。すべてかくの如き神憑は自愛と世間愛より來る凶靈であつて、世人を迷はし且つ大神の神格を毀損すること最も甚しきものである。斯の如き神憑はすべて地獄の團體に籍をおき、現界の人間をして、其善靈を亡ぼし且肉體をも亡ぼさむことを謀るものである。近來天眼通とか千里眼とか、或は交靈術の達

人とか稱する者は、何れも此地獄界に籍をおける副守護神の所爲である。泰西諸國に於ては今日漸く、現界以外に靈界の在ることを、靈媒を通じて稍覺り始めたやうであるが、併し此研究は餘程進んだ者でも、精靈界へ一步踏み入れた位な程度のもので、到底天國の消息は夢想だにも窺ひ得ざる所である。偶には最下層天國の一部の光明を遠方の方から眺めて、臆測を下した靈媒者も少しは現はれてゐる様である。靈界の真相を充分とは行かずとも、相當に究めた上でなくては、妄りに之を人間界に傳達するのは却て頑迷無智なる人間をして、益々疑惑の念を増さしむる様なものである。故に靈界の研究者は最も靈媒の平素の人格に就てよく研究をめぐらし、其心性を十二分に探査した上でなくては、好奇心にかられて、不眞面目な研究をするやうな事では、學者自身が中有界は愚か、地獄道に陥落するに至ることは想念の情動上已むを得ない所である。

さて歸神も神懸も神憑も概括して神がかりと稱へてゐるが、其間に非常の尊卑の徑庭ある事を覺らねばならぬのである。大本開祖の歸神情態を口述者は前後二十年間、側に在つて伺ひ奉つたことがある。開祖は何時も神様が前額より肉體に

お這入りになると云はれて、いつも前額部を右手の拇指で撫でてみられたことがある。前額部は高天原の最高部に相應する至聖所であつて、大神の御神格の直接内流は必ず前額より始まり、遂に顔面全部に及ぶものである。而して人の前額は愛善に相應し、顔面は神格の内分一切に相應するものである。畏多くも口述者が開祖を審神者として永年間に、茲に注目し、遂に大神の聖靈に充たされ給ふ地上唯一の大豫言者たることを覺り得たのである。

それから又高天原には靈國、天國の二大區別があつて、靈國に住める天人は之を説明の便宜上靈的天人といひ、天國に住める天人を天的天人といふことにして説明を加へようと思ふ。乃ち靈的天人より來る内流（間接内流）は人間肉體の各方面より感じ來り、遂に其頭腦の中に流入するものである。即ち前額及び顛顚より大腦の所在全部に至る迄を集合點とする。此局部は靈國の智慧に相應するが故である。又天的天人よりの内流（間接内流）は頭中小腦の所在なる後脳といふ局部即ち耳より始まつて頸部全體にまで至る所より流入するものである、即ち此局部は證覺に相應するが故である。

以上の天人が人間と言葉を交へる時に當り、其言ふ所は斯の如くにして、人間の想念中に入り來るものである。すべて天人と語り合ふ者は、又高天原の光によつて其處にある事物を見ることを得るものである。そは其人の内分（靈覺）は此光の中に包まれてゐるからである。而して天人は此人の内分を通じて、又地上の事物を見ることを得るのである。即ち天人は人間の内分によつて、現實界を見、人間は天界の光に包まれて、天界に在るすべての事物を見ること出来る。天界の天人は人間の内分によつて世間の事物と和合し、世間は又天界と和合するに至るものである。之を現幽一致、靈肉不二、明暗一體といふのである。

大神が豫言者と物語り給ふ時は、太古即ち神代の人間に於けるが如く、其内分に流入してこれと語り給ふことはない。大神は先づおのが化相を以て精靈を充たし、此充たされた精靈を豫言者の體に遣はし給ふのである。故に此精靈は大神の靈德に充ちて其言葉を豫言者に傳ふるものである。斯の如き場合は、神格の流入ではなくて傳達といふべきものである。傳達とは靈界の消息や大神の意思を現界人に對して告示する所爲を云ふのである。

而して此等の言葉は大神より直接に出で來れる聖言なるを以て、一々萬々確乎
不易にして、神格にて充たされてゐるものである。而して其聖言の裡には何れも
皆内義なるものを含んでゐる。而して天界に在る天人は此内義を知悉するには靈
的及び天的意義を以てするが故に、直に其神意を了解し得れども、人間は何事も
自然的、科學的意義に従つて其聖言を解釋せむとするが故に、懷疑心を増すばか
りで到底満足な解決は付け得ないのである。茲に於てか大神は、天界と世界即ち
現幽一致の目的を達成し、神人和合の境に立到らしめむとして、瑞靈を世に降し、
直接の豫言者が傳達したる聖言を詳細に解説せしめ、現界人を教へ導かむとなし
給うたのである。

精靈は如何にして化相によつて大神より來る神格の充たす所となるかは、今述
べた所を見て、明かに知らるるであらう。大神の御神格に充たされたる精靈は、
自分が大神なることを信じ、又其所言の神格より出づることを知るのみにして、
其他は一切知らない。而して其精靈は言ふべき所を言ひ盡す迄は、自分は大神で
あり、自分の言ふことは大神の言であるとして固く信じ切つてゐるけれども、一旦其

使命を果すに至れば、大神は天に復り給ふが故に俄に其神格は劣り、其所言は餘程明晰を缺くが故に、そこに至つて、自分はヤツパリ精靈であつたこと、又自分の所言は大神より言はしめ給うた事を知覺し、承認するに至るものである。大開祖の如きは始めより大神の直接内流によつて、神の意思を傳へ居ること及び自分の精靈が神格に充たされて、萬民の爲に傳達の役を勤めてゐたことを能く承認してゐられたのである。其證據は『大本神諭』の各所に明確に記されてある。今更ここに引用するの煩を省いておくから、開祖の『神諭』に就いて研究さるれば此間の消息は明かになることと信ずる。

開祖に直接歸神し給うたのは大元神大國治立尊様で、其精靈は、稚姫君命と國武彦命であつた。故に『神諭』の各所に……此世の先祖の大神が國武彦命と現はれて……とか又は……稚姫君の身魂と一つになりて、三千世界（現幽神三界）の一切の事を、世界の人民に知らすぞよ……と現はれてゐるのは、所謂精靈界なる國武彦命、稚姫君命の精靈を充たして、豫言者の身魂即ち天界に籍をおかせられた、地上の天人なる開祖に來つて、聖言を垂れさせ給うことを覺り得るのである。

前巻ぜんくわんにもいつた通りとほ、天人てんにんは現界人げんかいじんの數百言すうひやくげんを費つひやさねば其意味そのいみを通つうずることの出來できない言葉ことばをも、僅わづかに一二言いちにげんにて其意味そのいみを通つう達たつし得うるものである。故ゆゑに開祖かいそ即すなはち豫言者よげんしゃによつて示しめされたる聖言せいげんは、天人てんにんには直ただちに其意味そのいみが通つうずるものなれども、中有ちゆうに迷まよへる現界人げんかいじんの暗くらき知識ちしきや、うとき眼まなこや、半なかば塞ふさがれる耳みみには容易よういに通つうじ得えない。それ故ゆゑに其聖言そのせいげんを細こまかく説といて世人せいじんに諭さとす傳達者でんたつしゃとして、瑞みづの御靈みたまの大神おほかみの神格しんかくに充みたされたる精靈せいれいが、相應さうおうの理りによつて變性女子へんじやうによしの肉體にくたいに來きたり、其手そのてを通つうじ、其口そのくちを通つうじて、一二言いちにげんの言葉ことばを數千言すうせんげんに碎くだき、一頁いつぺいの文章ぶんしやうを數百頁すうひやくぺいに微細びさいに分割ぶんかつして、世人せいじんの耳目じもくを通つうじて、其内分そのないぶんに流入りうにふせしめむ爲ために、地上ちじやうの天人てんにんとして、神業しんげふに參加さんかせしめられたのである。故ゆゑに開祖かいその『神諭しんゆ』を其儘眞解そのまましんかいし得えらるる者は、已すでに天人てんにんの團體だんたいに籍せきをおける精靈せいれいであり、又また中有界ちゆうかいに迷まよへる精靈せいれいは、瑞みづの御靈みたまの詳細しやうさいなる説明せつめいに依よつて、間接諒解かんせつりやうかいを得えなくてはならぬのである。而しかして此詳細このしやうさいなる説明せつめいさへも首肯しゆけんし得えず、疑念ぎねんを差挾さしはさみ、研究けんきう的態度たいどに出いでむとする者は、所謂暗愚無智いはゆるあんぐむちの徒とにして、學がくで知慧ちゑの出來できた途中とちゆうの鼻高はなだか、似而非學えせがくしや者の徒とである。斯かくの如ごとき人間にんげんは已すでに已すでに地獄界ぢごくかいに籍せきをおいてゐる者ものなることは、相さう

應の理によつて明かである、斯の如き人は容易に濟度し難きものである。何故ならば、其人間の内分は全く閉塞して、上方に向つて閉ぢ、外分のみ開け、その想念は神を背にし、脚底の地獄にのみ向つてあるからである。而して其知識はくらみ靈的聽覺は鈍り、靈的視覺は眩み、如何なる光明も如何なる音響も容易に其内分に到達せないからである。されど神は至仁至愛にましませば、斯の如き難物をも、種々に身を變じ給ひて、其地獄的精靈を救はむと、晝夜御心を惱ませ給ひつあるのである。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・一・一二 舊一一・一一・二六 松村眞澄録)

第二章 武亂泥(一一二五六)

浮木の館の陣營に於ける幕僚室には、例のアーク、タールの兩人が火鉢を眞中にして、茶を飲みながら、雑談に耽つてゐる。タールは切りに土瓶の茶を注ぎな

がら、

「オイ、アーク、最前から大分、天の沼矛を虐使したので、喉がかわき、口角の泡も非常に粘着性を帯びて来たぢやないか。マア茶なつと一杯やり給へ。茶は鬱を散じ、心氣を養ひ、且又心魂をして安静せしむるものだからなア」

「茶には色がある。色は即ち能くうつらふものだ……花の色はうつりにけりな徒に、わが身世にふる眺めせしまに……とか未來のナイスが言つたさうだ。俺は茶は嫌ひだ、それよりも少しも色なき水晶の様な清水が好きだ。其透徹振は正に自足他に求むるなき君子の坦懐、道交を表するものだ。かく一杯の水にも、神の恵のこもらせ給ふ以上は、ポートワインの美酒も、遂に及び難き道味の淡然として、掬して尚盡くるなきものがある。仁者は山を樂み、智者は水を樂むとか云つてな、吾々には水晶の水が靈相應だよ。而して山をも水をも併せ樂む此アークさまは、所謂智者仁者の典型だ」

「智仁兼備の聖人君子の名を盗まうとする白晝の野盜、一言天下を掩有せむとする曲漢、そこ動くな……と一刀を引抜き、切つてすつべき所なれども、今日は

ランチ將軍の帷幕に參ずる顯要な地位に上つた祝として忘れて遣はす」

「アツハ、唐變木だなア。茶の好きな人間の精神はヤツパリ滅茶苦茶だ。茶目

小僧的人格者だ。そんなことでランチ將軍の帷幕に參ずるなどとは、サツパリ茶

目だ、否駄目だよ」

「吾々は殊更に山に入つて山を樂み、水に近付いて水を樂まなくても、人生の一

切を客觀して冷然として之に對することが出来るのだから、紅塵萬丈の裡、恩愛

重絆の境域尚其處に、山中の靜寂と清水の道味を樂む事が出来るのだ」

「隨分小理窟がうまくなつたねえ」

「きまつた事だ。治國別さまのお仕込みだもの、今までの狂亂癡呆兼備の勇者た

る亂癡將軍の教とは、天地霄壤の差があるのだからなア」

「コリヤそんな大きな聲で言ふと、耳へ這入るぞ、チツとたしなまないか」

「ナー二何程大きな聲でいつた所で、神格の内流を受けたる證覺者の聖言が耳へ

通る氣遣ひがあるかい。ランチ將軍の耳へ通ずる言葉は、虚偽と計略と惡欲と女

色位なものだ。さういふ地獄的言葉は、何程小さい聲で囁いてを つても直に聞え

るものだ。要するに其内分が塞がり外分のみが開けて居るのだからなア。世間的罪惡に充ちたバラモン軍の統率者に、吾々の聖言が聞える道理はない、先づ安心し給へ。それよりも、あの蠨蛸別を見よ、本當に馬鹿にしてゐるぢやないか。如何に世間の交際は黄金多からざれば交り深からずと云つても、實に呆れたものぢやないか。今日の交際は水臭いと云ふよりも寧ろ銅臭いものだ。僅かに五千兩の軍用金を獻納しよつて、エキスの野郎に駕で送られ、腐つたやうな女を伴つて堂々とランチ將軍に面會を申込み、將軍も亦顔の相好を崩して、抱擁キツスはどうか知らぬが、固き握手を交換したぢやないか。俺やモウ本當に厭になつて了つた」

「本當にさうだねえ。黄金萬能の世の中とは能く言つたものだ。併しながら治國別様は根つからお顔が見えぬぢやないか、何うしたのだる」

「俺の觀察する所に依れば、何とはなしに餘り目出度い御境遇に居られる様に思はれないがなア」

「タール、お前もさう思ふか、俺は何だか氣がかりになつて仕方がないワ。ヒヨ

ツとしたら、あの、それ、秘密牢へでも計略を以て放り込んで了つたのぢやあるまいかな。今まで俺達が、伺つても、喧しい言葉はなかつた奥座敷を、吾々の幕僚にさへ見せない様にしてゐるのだから怪しいものだぞ。もし治國別様が危難にお遇ひなさる様な事があつたら、お前は何うする考へだ」

「一旦心の中に於て師匠と仰いだ以上は、死を以て之を守る考へだ。假令治國別様の爲に死んでも、敢て厭ふ所ではない。士は己れを知る者の爲に死すといふからな」

「ランチ將軍だつて、片彦將軍だつて、ヤツパリ吾々の主人であり師ぢやないか。師といふ段になつては、少しも變りはない筈だ。そして諺にも忠臣二君に仕へずといふ以上は、何うしても前の主人たるランチ將軍に忠義を盡さねばなるまい……ぢやないか」

「そりや、どちらも主人だ。併しながらランチ將軍に今迄仕へて居つたのは、彼が有する暴力と權威に恐れたが爲だ。つまり言へば表面上の主従であつて、精神上から言へば仇敵も同様だ。どうして馬鹿らしい、精神的仇敵の爲に貴重な生命

が捨てられようか」

「さうだな、俺も同感だ。併しタール、まさかの時になつたら、親の爲に或は主の爲に師匠の爲に、死ぬこたア出来まい。俺だつてさうだ、併しながら子孫の爲には死んでみせてやる、それも靈體脱離の時期が来たら……だ。アハ、ハ、ハ、ハ」

「オツホ、ハ、ハ、何を吐しやがるのだい。人を馬鹿にして居やがる。チツと眞面目にならないか。エ、ー」

「此様な化物の横行する世の中に、何うして眞面目に着實にして居れようかい。眞面目な正直な仁義に篤い人間は、現代に於ては却て悪人と見做されるからなア。天下の爲、社會の爲、人の爲だと、うまい標語を語つて、何奴も此奴も自己の欲望を達せむことのみを望んでゐる世の中だ。俺達はさういふ贗物は嫌ひだ。清明無垢の小兒の如き、赤裸々の言葉と行ひが好きなのだ」

かかる所へ一人の従卒現はれ來り、

「モシモシ、只今ランチ將軍様の御命令でムいますが、珍客が見えましたので、御接待に來て貰ひ度いとの事でムいます。どうぞ速にお居間へお越し下さいませ」

アーク「ヨシヨシ、只今参りますと言つてくれ。併し、珍客といふのは、どこからお出でになつたのだ」

「ハイ、私にはどこの方だか分りませぬが、随分綺麗な女神さまのやうな方が二人、ズンズンと奥へお通りになりました。大方其方の事でムいませう」

「ウン、ヨシ、直様参ると申上げてくれ」

「ハイ」

と答へて従卒は此場を立去つた。後に二人は顔見合せ、

「オイ、タール、どう思ふか、此陣屋は何だか變挺になつて来たぢやないか。蝶別がお民をつれてやつて来るかと思へば、又二人の美人が来たとは、益々合點が行かぬぢやないか」

「ウン、さうだなア、大方化物だらうよ。これ程殺風景な陣營へ、そんな美人が二人も、大膽不敵にも侵入して来るとは、何うしても解せない。併しながら將軍の命令、反く譯にも行くまい、行つたら何うだ」

「無論行く積だが、併し大體の様子を考へた上でなくちや、取返しのならぬ失敗

を演ずるかも知れないぞ」

「ナ―二刹那心だ、構ふものかい」

斯く話す所へ、酒にズブ六に酔うて、ヒヨロリヒヨロリと千鳥をふみながらやつて来たのは蝶螭別であつた。蝶螭別は狐と兔と猫との目をつき交ぜた様な妙な目付をしながら、臭い息を吹きつつ、

「ヤア、お歴々、何ぞ面白い話がゐるかな。一つ私にも聞かして下さい」

アーク「コレハコレハ、蝶螭別の御大將、大變な上機嫌と見えなア、お話し承はりたいなり、又ししみと御懇談も申上げたいのだが、只今將軍よりお呼び出しになりましたので、生憎ゆつくり話の交換も出来ませぬ。失禮ながら御免を蒙りませう」

「ヤア、實の所はランチ將軍様の使で来たのだ。今三五教の清照姫、初稚姫といふ頗る付のシヤンが、突然降つて来たので、兩將軍の恐悦斜ならず、從卒を以て、アーク、タールの幕僚をお呼よせになつた所、今來られちや、肝腎の性念場が臺なしになるといふので……蝶螭別殿、彼奴等兩人は中々口の達者な理窟つぽい奴

だから、そなた行つて、うまく喰ひとめて来て下され……とのお頼みだ。それ故
實の所は一時ばかり暇取らせ、其間に兩將軍がシツポリと要領を得ようといふ段
取だ。アハ、ハ、ハ、ハ、

「ヤア、そりや勿怪の幸ひだ。なア、タール、一つここで蠓蠓別のローマンスで
も聞かして貰はうかい」

「所望だ所望だ」

「ナニ、俺のローマンスを聞きたいといふのかア。聞きたくば聞かしてやらう。
併しながら餘り口數が多いので、どの方面から絲口をたぐつたらいいか分らない。

「アア、困つた注文を受けたものだ。エへ、ハ、ハ、ハ、」

「アーク、モシモシ、涎がおちますよ」

「蠓蠓別、エへ、ハ、ハ、ハ、イツヒツヒ」

「タール、大分に嬉しかつたと見えますね。智者は對者の一言を聞いて、其生涯を
知るとか云ひましてなア、このタールは蠓蠓別さまの其顔面筋肉の動き方と、エ
へ、ハ、イヒ、ハ、ハ、の言靈によつて、貴方の歡喜生活の生涯をほぼ悟る事を得ました」

アーク「ナ、何を吐しよるのだ。よう囀る奴だな。貴様がそれ程分つてゐるなら、蠓蠓別さまに代つて、ここで俺に聞かしたら何うだ」

タール「御本人の前で、御本人の講談は如何なる名人でも行りにくいからなア。

講談師見て来た様な嘘をつき……と何程眞實を語つても、頭から相場をきめられ

ちや、折角の骨折が無駄になる。それよりも直接御本人から承はつた方が、愚昧

な貴様の頭には、餘程有難く感ずるだらう。」

蠓蠓別「實の所は、ウーン、今伴れて来たお民といふ女、随分別嬪でせう。エ

へ、貴方も御覽になりましたか」

アーク「一寸横顔を拜まして貰ひましたが、随分稀體の尤物らしいですなア。併

しそんなお惚氣話を聞かして貰ふのは、實ア、有難迷惑だ。一杯奢つて貰はなく

ちや約らないですからなア」

「眞面目に聞いて貰へるなら、此ブランドを進ぜる」

と云ひながら、懷からガラガラ言はせながら、峻烈な酒を盛つた二個の瓶を取り出

し、二人に一個づつ渡した。二人は話はそつちのけにして、グビリグビリと喉を

ならして呑み始めた。蝶鰯別は一生懸命に惚氣話を虚實交々相交へて喋り立てる。二人は馬耳東風と聞き流し、ブランデーに氣を取られて、

「アア、よう利く酒だ、エ、何と甘いぢやないか」

「あゝ甘い甘い、何と気分がいいなア」

と酒ばかりほめてゐる。蝶鰯別は一生懸命にお民との情交關係を喋り立ててゐる。

そして二人の聲を耳に挟み、

「本當にお前の言ふ通り、ウマイものだらう。聞いても気分がいいだらう」

アークは額を切りに叩きながら、

「あゝ酔うた酔うた、實に感謝の至りだ」

「本當に完全な戀のロマンスを聞いて、酔うただらう。頭を叩いて感心せなく

ちや居られまい、本當にこんな取つとき話を拜聴して、お前も嬉しかる、感謝す

ると云つたねえ」

「アール、エ、俺も一本欲しいものだなア、本當に気分がいいものだ。蝶鰯

別さま、モ一つ下さいな」

蠓蠓別はうつつになり、

「本當に氣分のいい女だらう、一目見ても恍惚として酔うたらう。併し下さいと云つても、お民ばかりはやる事は出来ないよ。それ丈は御免だ。蠓蠓別の命の親だからなア」

「本當に百藥の長だ、命の親だ、それだから欲しいといふのだ。なア、アーク、エーエン、本當に心持がよくなつたぢやないか。こりや何うしても此儘でしまふこたア出来ない、お民さまにでもついで貰つて、二次會でもやらうかなア」

「お民を何うするといふのだ。酒をつがさうと云つても、お民の手は、さう易々と貴様の酒ア、つがないぞ、エ、ン、此蠓蠓別様一人に限つて、お酒をつぐ爲に製造してある雪の様なお手々だ。身の程知らぬもキリがあるぞよツ」

と唼鳴りながら、ブランデーの空瓶で、アークの前頭部をカツンとやった。アーク、タールの兩人はヒヨロヒヨロになつた儘、蠓蠓別に向つて又もやブランデーの空瓶をふり上げ、打つてかかる。されど三人が三人共キツい酒に足を取られ、彼方へヒヨロヒヨロ此方へヒヨロヒヨロとヒヨロつきまはつた途端に、三つの頭

が一所に機械的に集まり、烈しき衝突を來し、パチン、ピカピカピカと目から靈光を發射し、ウンとばかり其場に倒れて了つた。此時お民は、蠓蠓別の所在を尋ねて、現はれ來り、此態を見て打驚き、

「アレ、マア蠓蠓別さま」

と云ひながら、抱起さうとする。蠓蠓別は眼眩み、アークをお民と間違へ、

「コレお民、すまなかつた、お前の何時もの言葉を輕んじ、内證でブランデーをやつたものだから、足腰が立たぬやうになつた。こんな所を將軍さまに見られちゃ大變だから、どつかへ隠してくれないか。チツト酔ひが醒めるまで……」

お民は蠓蠓別の顔の疵を見て、

「アツ」

と驚き、殆ど失心状態になつてゐたので、蠓蠓別がアークをお民と間違へてる事に氣がつかかなかつた。タールは目まひが來て、お民の傍にリの字形になつて倒れてゐる。アークは蠓蠓別が自分をお民と間違へてゐるなア……と早くも悟り、舌のまはらぬ口から女の作り聲をして、

「コレ、蝶鰩別さま、お前さまは、本當にヒドイ人だよ、いつもいつも私にこれ丈心配かけて、それ程私が憎いの、サアもうお暇を下さい、今日限りモウ私はアカの他人ですよ。エ、憎らしい」

「といつては耳を引掻き、横面をピシヤピシヤとなぐり、鼻をつまもうとすれど、アークも餘り酔ひつぶれてゐるので、手が何うしても命令を聞かず、蝶鰩別の鼻をこすつたり、頬べたを撫でたり、耳を引張つてゐる。蝶鰩別は餘りアークの手がキツクさはらないので、ますますお民の手と信じ、

「ア、お民、すまなかつた、どつかへ一つ酔の醒める迄かくしてくれ」と叫ぶ。アークは又作り聲で、

「サ、蝶鰩別さま、次の間の押入の中へかくして上げませう。酔のさめる迄靜かにお休みなさいませ」

「流石はお民だ、親切な女だなア。是だから蝶鰩別が命迄投込むのも無理もない。お前になら假令どんな所へ連込まれても満足だ。ゲーガラガラ ウツプー、あゝ苦しい苦しい」

アークはニタニタしながら、蠓蠓別を肩にかけ、水門壺の前まで行つて、

「蠓蠓別さま、ここが押入だよ」

と言ふより早く、水門壺へ蠓蠓別を突きおとさうとした。蠓蠓別は一生懸命に腕を握つてはなさない。押した勢に二人はヒヨロヒヨロとヨロめいて、水門壺の中へドボンと一緒におち込んで了つた。此物音に驚いて、外面の見廻りをしてゐた二三の番卒は駆けより、二人を水門壺より救ひ上げ、火を焚きなどして二人の氣をつけた。そして蠓蠓別は依然としてお民と一緒に落込んだものと信じてゐた。アークもタールも、蠓蠓別もお民も一度に正氣を失つて了つたのだから、番卒共の介抱は少しも知らず、氣がついたのは何れも同時であつた爲に、知らぬ神に崇りなしで、アーク、蠓蠓別の間に、此事に關しては少しの紛擾も起らなかつた。茲に四人はスツカリ酔がさめ、正氣になる迄一日ばかり寝た上、其翌日になつて、晝狐を追出したやうな顔をして、ランチ將軍の前に又ツクリと顔を出した。

(大正一二・一・一二 舊一一・一一・二六 松村眞澄録)

第三章 観音經〔一二五七〕

神が表に現はれて 善と惡とを立別ける

三五教の宣傳使 治國別の一行は

怪しの森を通過して 浮木の森に屯せる

ランチ、片彦將軍の 陣營を守る番卒に

其入口に出會し 種々様々の問答を

なせる折しも敵軍の 企みの奔におとされて

命危く見えけるが 神の守りし神司

危き奔に落ちながら 卯の毛の露の怪我もなく

治國別と龍公は 早速の頓智番卒の

アーク、タールを説き伏せて 危難を逃れ這ひ上り

尊き神の御教を いとも細かに説きつれば

もとより神の御魂をば うけたる二人の番卒は

忽ち心機一轉し 悔悟の花も咲き満ちて

心の底より歸順しつ 治國別を伴ひて

ランチの陣營をさして行く ランチ、片彦將軍は

治國別の一行が 思はぬここに來りしを

眺めて笑壺に入りながら 表面を飾る柔言葉

和睦の酒と云ひながら 二人を酔はせ奥の間の

秘密の場所へ誘ひて 燕返しの計略に

千尋の深き暗窟へ 落とし込みしぞ忌々しけれ

治國別や龍公は 忽ち正氣を失ひて

其靈魂は宙に飛び 精靈界に踏み迷ひ

一人の守衛に教へられ 狭き谷道攀ぢのぼり

漸う此處に八衢の 關所の前にと着きにけり

善と惡との精靈が 集まり來り八衢の

審判を受くる有様を
心こころをひそめて眺めつつ

現幽二界の眞諦を
おぼろげながら感得かんとくし

伊吹戸主の御館に
暫しばらく息を休めつつ

外面の景色を眺め居る
時ときしもあれや中天を

照らして来る大火團
二人ふたりが前に顛落てんらくし

火花を四方に散亂し
暫しばらく雲くもに包まれて

四邊あたりも見えずなりにけり
二人ふたりは益々ますます怪しみて

きつと目をすゑ眺め入る
忽たちまち一柱ひとりの神人しんじんが

容貌ようぼう衣服いふくを輝かがやかし
治國はるくにわけ別に打向うちむかひ

我は言依別の神
不思議ふしぎな處ところで會あひました

皇大神の御言もて
今は媒介ばい天人てんにんと

重おもき使命しめいを任せられぬ
いざ之これよりは天國てんごくを

巡覽じゆんらん召めされ吾われは今いま
汝なれが命みことを案内あないせむ

又龍公またたつこうは證覺しやうかくの
まだ開ひらけざる身みなれども

特にお供を許すべし 之を被れと云ひながら

懷中探り被面布を とり出し龍公にかけ給ふ

此處に二人は勇み立ち 最下天國の其一部

巡覽し終へ中間の 天國さして昇り行く

木花姫の現はれて 種々雑多と兩人が

心を戒め給ひつつ 珍彦館に導きて

尊き神の經綸の 其大略を示すべく

此處に言靈別の神 治國別の徒弟なる

五三公さまと現はれて 又もや尊き教訓を

授け給ひし尊さよ 之より二人は五三公の

案内につれて天國の 各團體を巡歴し

最高一の天國や 靈國までも巡拜し

月の御神や日の御神 其他百のエンゼルに

清き教を傳へられ 智慧證覺を拜受して

再びもとの肉體にかへり來りてバラモンの

醜の司を悉く言向和す物語

語るにつけて面白く益々深く眞に入り

其妙奥に達すべく守らせ給へ惟神

神の御前に願ぎ奉る。

蝶蝟別、お民、アーク、タールの四人は一日の間酔をさまし、何喰はぬ顔して

ランチ將軍の前に又ツと顔を突き出した。ランチ將軍は常にないニコニコとした

笑顔を見せ、

「ヤア四人の御歴々、御壯健で御目出度う。何か御用でゐるかな」

と脱線振を發揮してゐる。察するにランチは珍客に餘程同情ある待遇をされ、精

神の一部に狂ひを生じて居たと見える。蝶蝟別は亦平素から少しく精神上に缺陷

のある男だが、今ランチ將軍の顔を見てニコニコ笑ひながら、

「モシ將軍殿、昨夜は嘸御疲れでしただらう。お察し申します。何と云つても世

の中は異性が居らなくては威勢の悪いものですよ。空を飛ぶ小雀だつて、蝶々だつて、蜻蛉だつて、蝉だつて、土窠蜂だつて、矢張り男女同棲して天與の眞樂を樂しんで居るのですからな。昔の世間に暗い軍人は、陣中に女は一切無用だなどと云つて我慢をしたものですが、最早今日となつては軍人も一種の商賣ですから、女がなくちややりきれませぬわい。ウツフ、フ、フ、モシ將軍さま、大變な爽快な面持でムりますな」

「ハイ、何と云つても雙方から速射砲的に襲撃を受けたものですから、耳はひツかかれる、頬は抓られる、腕は左右からぬける程引つ張られるものだから、イヤもう【きつい】迷惑を致しました。エツへ、へ、へ、其爲め全身の細胞や纖維が稍倦怠気分となり、各部に同盟罷工をやつたと見えて、思ふ様に足が動かなくなりました」

「足ばかりぢやありませんまい。腰部は如何です、腰部は天國に於ける夫婦の愛と相應する最要部でムりますからな」

「成程、夜前はあまり亂癡氣將軍をやつたものだから、少々ばかり今日は二日酔

ひの氣味で△る。それに就いても可憐さうなのは片彦將軍だ」

「あの二人の美人は一人づつ貴方等のお相手になさつたのぢやありませんか」

「イヤ、それがさうぢやて、……困つた事には二人ながらランチ ランチと云ひ

やがつて……エへ、へ、へ、此一人の男を雙方から襲撃し、氣の毒千萬にも片彦將

軍には目もくれないのだ。そこで此ランチが聊か同情の念を以て片彦に靡かせむ

と、種々雑多と心を揉んだでもないし、揉まぬでもなかつたが、矢張戀愛と云ふ

ものは合縁奇縁で仕方のないものだ。凡て戀愛は一方に偏重する性質のものだか

ら、大變に都合の悪い事もあるが、然しそこが男子に取つて非常に妙味のある所

だ。イツヒ、へ、へ、」

「さうして片彦さまは如何なつたのですか」

「ウン、片彦は齒ぎしりを嚙んで怒り出し、齒をガタガタ云はせ、ガタガタ慄ひ

をして到頭ガタ彦となつて了つた。何うも斯うガタピシヤになつては陣中の平和

が保たれないので、聊か困つてるのですよ。斯うなつて來ると、此ランチを女に

チヤホヤされる男らしい男に生んでくれた親が怨めしい様に、根っから△らぬわ

い、エツへへへ。そこで一つひと 蝶いもり 蛸わけ 別どの 殿さうだん に相さうだん 談だん がある。聞き いては下くだ されます まいかな」

「其御相談とは何事なにごと でムい ますか」

「外ほか でもござらぬ、其方そなた の最さい 愛あい のお民たみ さまを暫しばら く此この ランチに自じ 由いう にさし て頂いた きたいのだ」

お民は、

「アレ、マア」

と袖そで に顔かほ を隠かく す。

「コリヤお民、何なん だ其その スタイルは……細ほそ い目め をしやがつて……「アレ、マア」
等など とランチ将軍しやうぐん に秋波しゅうは を送おく つてゐるのか」

と呶ど 鳴な りつけた。お民は泣な 聲こゑ になり、

「コレ、モシ蝶いもり 蛸わけ 別わけ さま、お情なさけ ない事こと を云い つて下くだ さいますな。貴方あなた はまだ私わたし の心こころ が分わか らないのでですか」

「ウン、分わか らぬでもない、が然しか しあまり妙めう な素振そぶり をすると、俺おれ も聊いささ か氣き にならな

「い事はないからなあ」

「實は蝶螭別さま、其お民さまを貸して頂きたいと云ふのは、片彦將軍に綺麗サツパリとやつて貰ひたいのだ。それでなければ軍規の統一が保たれないので、此ランチが折入つてお願ひ申すのだ」

「これは怪しからぬ。何事かと思へば吾々の女房を片彦將軍に與へよなどとは以ての外のお言葉でムる。さう蕪か大根の様にチヤクチヤクと人に與る事が出来ますか。拙者は命がけの藝當をやつて、漸くお民を此處まで連れ出した所、左様なお言葉を聞くとはい意外千萬だ。斯様な處に長居は恐れだ。オイ、お民、一時も早うここを歸らう」

「ハイ、有難うムんす。それなら何卒こんな恐ろしい處は嫌になりましたから、貴方の好きな處へ連れて行つて下さい。然し蝶螭別さま、ここを立ち去るとなれば忽ち困るのはお金でせう。貴方がエキスさまの手を通してランチさまにお渡しなされた五千兩の金をスツカリ返して貰つて下さい。それを路銀にして二人が睦じう暮らさうぢやありませんか」

「ウン、然し男が一旦出したものを返してくれなんて、そんな卑怯未練な事が云はれようか」

「エーエ、お前さまはそれだからいつも駄目だと云ふのよ。此先ここを立ち出て乞食でもする積りで御座んすかい」

「成行なら仕方がないぢやないか。あの金だつて俺が働いて造つた金ぢやなし、お寅婆が信者をチヨロまかして貯めた金を何々して來たのだから、そんな執着心は持つものぢやない。サア行かう」

とお民の手をとり引き立てようとする。お民は首を左右にふり、金切り聲を出して、

「イエイエ此陣營に置いて貰ふのならばお金は必要はありませんが、忽ち今日から乞食をせねばなりません。なんぼ私だつて、貴方と一緒に乞食する位なら片彦將軍のお妾にでもなりますわ。ほんに氣の利かぬ人だな。エー口惜しい、オーン

オーン オーン

「あゝ、それなら仕方がない。ランチさま、何卒私をここに置いて下さい。其代

りにお民を片彦將軍に渡す事だけはお斷りを申します」

「實の所はウライナイ教の教主蝶蝮別さまは、千變萬化の妖術を使ひ、神素盞鳴尊でさへも、ウライナイ教に一指をも染得ざるは蝶蝮別の教主あるためだと聞いて居つた所、此間より様子を考へて居れば、見かけ倒しの藝なし猿、女に目を細うして朝から晩まで酒を喰ふばかりが藝當で、何一つ取柄がムらぬ。もはや此陣中に於てはお前さまの如き偽豪傑はチツトも必要はムらぬ。然しながら其方の連れ添うてゐるお民は比較的氣の利いた女、加ふるに十人竝優れた美人と云ひ、片彦將軍の女房には最も適當と認めるによつて、お民をここに殘し、「とつと」と歸つて下され」

「これは怪しからぬ。一旦貴方の幕僚と任命をされた以上は、其様な理由によつて立去る事は出来ませぬ。萬一たつて立去れと仰有るならば、之から拙者の法力を以て此陣營をメチャメチャに破壊し、其方の生命を刃を用ゐずして奪つて見ませう」

「アハ、ハ、ハ、ハ、何とえらい勢でムるな。見ると聞くとは大違ひ、今迄ならば其

嚇しは利くだらうが、もはや今日となつては内兜を見透した此方、そんな嚇し文句は、いつかな　いつかな喰ひませぬぞや。何なつと業力を出してランチ將軍の息の根をとめて御覽、それが出来れば拙者の役目をお譲り申す約束を今からしてもよろしい。マサカ其神力はふるまい。現在お民に秋風を吹かされて居る様な今の體裁、これお民殿、今其方は蠓蠓別と乞食する位なら片彦將軍のお妾になると云つたな。ウツフ、出来た出来た天晴天晴、女丈夫の龜鑑、貞女の鑑、名を末代に傳ふであらう」

と脱線だらけの業託を吐いてゐる。

蠓蠓別は躍氣となり、

「然らば此方の法力によつて此陣中をたたき破り、先づ第一に氣の毒ながらランチ將軍の息の根をとめてくれむ。後で後悔召さるな」

と云ひ放ち、次の間へ行つて大自在天の前に數珠をもみながらキチンと端坐し、先づバラモン大自在天を念じ、次に惟神靈幸倍坐世を奏上し、大廣木正宗殿、義理天上日の出神と稱へ終り、ソロソロ得意の觀音經を誦じ初めた。

眞觀清淨觀 しんくわんじやうじやうくわん	廣大智慧觀 くわうだいぢゑくわん
悲觀及慈觀 ひくわんぎうじくわん	常願常瞻仰 じやうくわんじやうせんじやう
無垢清淨光 むくしやうじやうくわう	慧日破諸闇 ゑにぢはせうあん
能伏災風火 のうぶくさいふうくわ	普明照世間 ふみやうせうせけん
悲體戒雷震 ひたいがいらいしん	慈意妙大雲 じいめうだいうん
樹甘露法雨 じゆかんろほふう	滅除煩惱炎 めつぢよぼんなうえん
諍證經官處 せうじやうぎやうくわんじよ	怖畏軍陣中 ふゐぐんぢんぢう
念彼觀音力 ねんびくわんのりき	衆怨悉退散 しうをんしつたいさん
妙音觀世音 めうおんくわんぜおん	梵音海潮音 ぼんおんかいてうおん
勝彼世間音 しようひせけんおん	是故須常念 ぜこしゆじやうねん
念々勿生疑 ねんねんもつしやうぎ	觀世音淨聖 くわんぜおんじやうじやう
於苦惱死厄 おくなうしやく	能爲作依怙 のうゐさえこ

かく一生懸命に汗をタラタラ流しながら觀音を念じてゐる。されど觀音の感應

はありさうもなく、佛が法とも尻喰へ観音とも佛が云はぬので、蝶螭別は業を煮やし、

「エー、佛と云ふ奴は、立派な能書きばかり竝べよつて、マサカの時はずつとも間に合はぬものぢやな。もう之から貴様の様な奴は拜んでやらぬわい。之からはこつちから尻喰へ観音ぢや」
とブツブツ呟いて居る其可笑しさ。猫が折角くはへた松魚節を犬にふんだくられた時の様な不足さうな面をして涙をすすつてゐる。

（大正一二・一・一一 舊一一・一一・二五 北村隆光録）

第四章 雪雜寢（一二五八）

蝶螭別は次の神殿の間に進んで一生懸命に祈願を凝らしてゐる。後にはランチ將軍、お民、アーク、タールの四人が冷やかな笑を泛べて、暫く沈黙の幕を下ろ

してゐた。アークは口を開いて鼻柱の兩方を右の手でクレリ、クレリと擦り上げながら、

「モシ將軍様、今承はれば實に御愉快な事でござつたさうですな。何處ともなしに御雄壯なる………否歡喜に充たされた御尊顔を拜し奉り、アーク身にとり恐悦至極に存じ承ります。古より英雄色を好むとか傳へ聞いて居ります、之にて將軍様も初めて英雄の英雄たる器量を發揮遊ばしたと云ふもの、いかでか之を祝せず
に居れませう。然しお祝には酒がつきものです。酒がつかなければあまり縁起がよくないものです。將軍様の此お祝をして永遠無窮に益々幸あらしめむために、
お酒を一杯頂戴する譯には行きませぬか。幸ひお民殿がここに居られますれば、
お酌は合うたり叶うたり、萬事惟神的に出來て居ります。如何でござりませう」
「アーク、其方は氣の利いた奴だ。やはり俺が幕僚に榮轉させて使つたのは、要するに先見の明ありと云ふべしだ。よし、其方の言葉が氣に入つた、何程なりと
酒は飲み放題、然しながら軍規紊亂の恐れあれば、あまり部下の者には知らさぬ
様に幕僚のみ私かに酒宴を催すであらう」

「早速の御承知、流石は明智の大將、吾意を得たりと云ふべしだ。エヘン、おいたる、如何だ、俺の言靈は其功力忽ちだ、恐れ入ったか」
「うん、斯ふ云ふ時にや貴様は最適任だ。その代り敵陣に向つちや一番がけに逃げる奴だからな。弱い敵と見りや無性矢鱈に追驅けて行きよるが、少し許り敵が強いと見たら尻に帆かけてスタコラ、ヨイヤサと一目散だから大したものだよ。アハ、ハ、ハ、」

「コリヤコリヤ兩人、此目出度い時に、左様な争ひは不吉だ。七六かしい戦なんかの話はやめてくれ。それよりも話は止めてお民に酌をさせ、二人の珍客に舞ひつ踊りつ、お慰みに供するのだな。エヘ、ハ、ハ、ハ、サア早く將軍の命令だ、用意！
一、二、三！」

アーク、タールは早速此場を外し、酒の用意を整ふべく出て行つた。あとにラシチ將軍とお民は差向ひとなつて、一つの火鉢を隔て小さい聲で何事か囁いて居る。

「將軍様、貴方は軍人が好きでムリですか、但は理想の女と民間に下つて楽しんで

くお暮し遊ばすが好きですか、承はりたいものですか」

「ウン、俺はもとはお前の知つてる通りバラモン教の大宣傳使兼大將軍だ。右の手に劍を持ち、左の手にコーランを携へて臨み、教を聞くものは之を善人と見做し、教を聞かないものは之を魔物と見做して斬り捨つるのが將軍の役だ。是位愉快な事があらうか。將軍の權威を以てすれば、何事も意の如くならぬ事はないのだから、何處迄もバラモン教の宣傳將軍は止められないのだ。實に吾々の威勢は空に輝く日月の如きものだ。其方も吾前に近く侍り、實に光榮だらう」

「ハイ、光榮に存じます。然し軍人と云ふものは天下泰平の時には必要がないものですな、斯ふ云ふ亂世になれば無くては叶ひますまい。其點になれば軍人さまは國家の柱石、平和の守り神様でゝります。併しながら貴方等の神力と武力によつて世界が平定され、眞善美の平和が建設されたならば、軍人はおやめになりませうな、否必要がありませんまいな」

「ウン、それもさうだ。併しそれは云ふべくして行ふべからざるものだ。徒に高遠な理想世界を夢みた所で、所詮此世の中は戦ひの世の中だ。弱い者は到底頭の

あが
上らない娼婆世界だ。さうして不幸にして世界が平和に治まり善人ばかりになつたら、俺達軍人はサツパリ商賣が出来ない。敵が現はれて各所に動亂が起ればこそ俺達の威勢も出るなり、又安樂に生活が出来るのだ。世の中は善惡混淆だよ、芝居だよ。虚偽と罪惡とを擅にする世の中だ。よく考へて見よ、瀬戸物屋は瀬戸物の割れる事を好み、坊主は死者の多からむ事を願ひ、醫者は病人の多からむ事を望み、スパイは小盗人の多からむ事を欲し、役人は罪人の最も多きを以て自分の商賣の繁榮として喜ぶのだ。何程三五教とやらが此世の中を水晶にするよつても五六七の世を建設すると云つても、それは口先ばかりだ。要するに商賣の能書だ、廣告手段だ。お前もチツと時代に目を醒し社會の潮流に遅れない様にしがよからうぞ。之が人世の徑路だ。さうして惡を喜ぶのは人間の本能だ。己を安全にし己の幸福を得むとすれば、必ずや他を亡し他を壓迫し他の利益を掠奪せなぐちや、到底世に時めき渡り、貴人となり富豪となり紳士紳商となることは出来ない。お前のくはへて來た蠚蠟別も餘程薄野呂だな。あれ見よ、泡沫に等しき經文を楯に、此ランチ將軍の命を祈りによつてとらう等と、アハ、、、、…刎ても

扱さても「うぶ」な考かんがへだ。殆ほとんど今日こんにちの時代じだいより一萬年いちまんねんばかりおくれて居ゐる。チツと脳味なうみそ噌つめかへの詰替つめかへをしてやらなくちや此陣中このぢんちゆうでも使つかひ様やうがないわ」

と調子てうしに乗のつて體主靈たいしゆれいじゆうしゆぎ從主義じゆうしゆぎをお民たみに向むかつてまくし立ててゐる。お民たみは善惡ぜんあくに迷まよひ、只俯向ただうつむいて考かんがへ込こんでゐる。

「もしランチ將軍様しやうくんさま、夜前やぜんのお二人ふたりの美うつくしいお方かたは何方どちらへ行ゆかれました。一度拜いちどはい顔がんを願ねがひ度たいものでムりますな」

「ウン、あまり話はなしに實みが入いつて、肝腎かんじんのナイスを念頭ねんとうより遺失あしつして居ゐた。オー、さうだ、斯こんな事ことしてゐる時ときぢやない、ヒヨツと片彦かたひこにでも占領せんりやうされちや大變たいへんだ。

「いやお民殿たみどの、其方そなたは蝶螈いもりわけ別に對たいし某それがしが今申いままをした言葉ことば、トツクリと云いひ聞きかしたが大變たいへんだ。よからう、それが合點がてんが行いつたら、お前まへと二人ふたり此陣中このぢんちゆうに大切たいせつにしておいて上げよ

う」

「ハイ有難ありがたうムります。御存ごぞんじの通とほりの男をこしでムりますから、お氣きに障さはる事ことをチヨイチヨイ申まをしませうが、何卒なにとぞ大目おほめに見みてやつて下さい。蝶螈いもりわけ別わけは少々せうせうばかり精神せいしん

上やうに缺陷けつかんがムりますから」

「ウン、ヨシヨシ、精神病者ならば又その積りで、つき合つて上げよう、随分氣をつけてやつたが宜からう」

「ハイ、お情深いお言葉、お民の肝に銘じて、何時の世にかは忘れませう。將軍さま、有難うムります」

と手を組んで涙を流し感謝してゐる。

アーク、タールの兩人は酒房へ振舞酒をとり出すべく欣々として進みやつて來た。見れば一人の男が壺に杓を突つ込みグビリグビリと飲んでゐる。よくよく見れば同僚のエキスであつた。アークはエキスの後から足音を忍ばせながら近く進み寄り、

「オイ」

と一聲唳鳴ると共に背中を三つ四つ喰はした。エキスは不意を打たれて杓をパツと放し、呂律も廻らぬ舌で、

「ダ、誰ぢやい、エーン、人が折角いい氣分になつてるのに、後から來やつて脅かしやつたな。マア待て、今に將軍様に訴へてやらう」

「コリヤ、貴様はエキスぢやないか、エーン、俺の方から訴へてやらう。酒泥棒奴、誰の許しを得て此處に來たのだ」

「エーン、八釜しう云ふない。同じ穴の狐ぢやないか。貴様だつて今酒を盗んで喰はうと思つて來やがつたのだらう。俺が一足先に來たばかりだ。やはり酒を盗む心は同じだ。俺の事を云ふと貴様の事を素破抜くぞ」

「馬鹿云ふな。俺は將軍様の命令によつて今日お祝があるのでお酒をとり來たのだ、なあタール、さうだらう。それにエキスの奴、俺達迄自分の卑しき心に比べて盗人呼ばはりをするとは怪しからぬ奴だ。こりやエキス、違ふと思ふなら將軍様に聞いて見よ」

「酒の上でした事は罪はないわい。そんな野暮な事を云ふものぢやない。マア貴様も一杯やつたら如何だ」

「アハ、、、、到頭折れて來よつたな。それでは御酒宴に先立つて毒味をして見よう。もし味が悪けりや直して置かんならぬからな」

「アハ、、、、到頭地金を出しよつたな。オイ、鍍金先生、偉さうに云つても、

塗つた金箔は剥げるから仕方がないわ。エー」

「オイ、アーク、ここで飲んぢやいけない、樽にドツと詰め込んで將軍様の前に持つて行かう。そしてエキスの事をスツパぬいてやらう。さうぢやないと、成上り者の癖に威張りよつて仕方がないからな」

「ヘン、貴様も成上がり者ぢやないか、俺ばつかりぢやないぞ。人の事を云はうと思へば自分の蜂から拂うてかかれ。人を呪はば穴二つだ、本當に馬鹿だな」

「エー、何だか喉の蟲が頻りに汽笛を吹き出した。飲みたい事はないけど、機關に油を注すと思つて、ホンの三升ばかり喉を潤はして見ようかい。オイ、タール、そんな七六かしい顔せずに、つきあうたら如何だ。なあエキス、さうだらう」

「ウン、さうだ。氣に入つた。人間はさうなくちやいけない、タールの様な唐變木は社會の落伍者だ。可憐さうなものだな」

「ヘン、馬鹿にすな」

と腹立ち紛れに杓をグツと取り、酒壺にグツと突つ込み鯨飲をはじめた。

エキス「アハ、ハ、ハ、到頭、俺の舌に捲き込まれよつたな。然し吾黨の士だ。え

らいえらい」

と凡ての紛紜はケロリと忘れ、三人は交る交る杓に口をつけてガブガブと飲みさがし、前後不覺になつて其場に倒れて了つた。蠓螋別、お民はヒヨロリヒヨロリと何氣なう此場に現はれ來り、三人の打ち倒れてゐる姿を見て打驚き、

「マアマア、此方はアークさま、タールさま、エキスさまぢやありませんか。マア何うしてこんな處に倒れてゐるのだらう。家がないものかなんぞの様に土の上に倒れて、みつともない處を丸出しにして、エーマアいやな事」

「此奴ア盗み酒に喰ひ酔うて倒れてゐるのだ。何と酒の酔と云ふものは見つともないものだな」

「貴方だつて何時もお酒にお酔ひになると、もつともつと見つともないですよ。」

そんな時の姿を見ると三年の戀もゾツとして醒ましますよ。私なりやこそ、貴方を今迄愛して來たのですよ。本當に男と云ふものは卑しいものだな。吾身の正念がなくなくなる處まで意地汚い、本當に嫌になつて了ふわ。蠓螋別さま、之を見て酒をこれつきり止めて下さい」

「ウン、側から見て居りや見つともないが、酔うて居る本人になつたら愉快だよ。俺や如何しても止められない。死んだら如何か知らぬが、息のある間は止められないよ」

「それなら、貴方は酒と私と、どちらか止めなならぬと云つたら、何方をお止めになりますか」

「ウン、さうだな、小豆餅食たか、島田と寝るか、小豆餅食て島田と寝ると云ふ事があるだらう。酒も好きだ、お前も好きだ。何方と云ふ事は出来ないね」

「米を潰して拵へた植物の液汁と神様の生宮たる人間と同様に見られちや堪りませぬわ。そんな水臭いお方なら今日限りお暇を下さい。さうして貴方は腸の腐る所までお酒をお上りなさいませ」

「アア、酒は飲みたし、女には別れともなし、えらいチレンマに罹つたものだ。ア、もう堪らぬ。此香を嗅いぢや立つても居ても居れない」

と云ひながら鏡のぬいた酒を見ながら、両手で樽を抱へながらグウグウと鯨飲し初めた。忽ち蠓蠓別は其場に酔ひ倒れ、此處に四人の泥酔者の雑魚寝が初まつた。

お民は逸早く此場を立去り、奥の間さして進み行く。

困が持て来る雪しばきは遺憾なく四人が地上に倒れた上に降り注ぎ、次第々々に雪はこまかくなり来り、ザアザアと砂を撒く様な聲を出して、四邊雪襖を立てた様になつて来た。忽ち四人の身體は積雪に包まれて了つた。

(大正一二・一・一二 舊一一・一一・二六 北村隆光録)

第五章 鞘當(一・二五九)

ランチ將軍は慌しく奥の吾居間に歸つて見ると、清照姫、初稚姫及び片彦將軍がニコニコとして、火鉢を真中に三つ巴形となつて喋々喃々と笑ひ聲を洩らして居る。ランチ將軍は之を見てやけて耐らず、忽ち一刀を引き抜き、片彦將軍をめぐらして梨割にする所だが、遠二人の女にはしたない男と思はれてはとの考へから、腹立をグツと壓へ、態と素知らぬ顔して其場に進み入つた。されど其唇と云ひ手

と云ひ足の先迄激しき震動を感じて居た。怒りの頂上に達した時は全身が激しく動くものである。片彦はランチ將軍の入り來りしを見て、皆を下げ、
「ヤア是は是は將軍殿、何處におはせられた。いやもう二人のナイスに手を引かれ、甘酒にもりつぶされ、いかい酩酊を致してゐる、御無禮の段は平にお赦し下さいませ」

「別に尖めも致さぬが、苟くも將軍の身をもつて、即ち三軍を指揮する尊き職權を有しながら、作法を辨へず、拙者の不在中に女に現をぬかし、何の態でゐる。些とおたしなみなさい」

「ヤアお説一應御尤も、拙者も部下に對して模範を示さねばならない重要な地位に立てるもの、女なんか心に蕩かすやうな柔弱なものではゐらぬ。併し此等兩人、某に熱烈なる戀愛を注ぎ申すにより、無下に捨つるも男の情ならじと、迷惑ながら女に導かれ此處に參つた處でゐる。イヤ如何に固造の「かた」彦も、女の魔力には敵し得ず、骨も節もゆるみ、さつぱりガタ彦となつて了ひました。先程迄は此ナイス、貴方に熱烈なる愛を捧げて居たやうですが、もはや此通り、屋外

に冷^{つめ}たき雪^{ゆき}が降^ふつて居^をりますれば、貴^き下に對^{たい}する兩^{りやうにん}人の戀^{れんじやう}情^{じやう}も冷^{ひや}やかになつたと見^みえますわい。どうかして此^{この}中^{うち}の一人^{ひとり}を貴^{あなた}方の御^ご用^{よう}をさせたいと思^{おも}ひますが、どうしたものか、兩^{りやうにん}人^{ともくび}共^{とも}首^{くび}を左^さ右^うに振^ふり、ランチキ將^{しやうぐん}軍^{ぐん}のお世^せ話^わにならうとも又^{また}お世^せ話^わをしようとも申^{まを}しませぬ、イヤもう此^{この}片^{かた}彦^{ひこ}も【かた】がたもつて迷^{めい}惑^{わく}でも何^{なん}でもムらぬ。アハ、ハ、ハ、

清^{きよ}照^{てゐる}「モシ、ランチ將^{しやうぐん}軍^{ぐん}様^{さま}、どこへ往^いつてゐやしたの、妾^{あたい}、どんなに探^{たづ}ねて居^ゐたか知^しれませぬよ」

ランチは此^{この}聲^{こゑ}に生^{いき}返^{かへ}つたやうな心^{こころ}持^{もち}になり、顔^{かほ}の色^{いろ}まで勇^{いさ}ましく、頓^{にはか}に元^{げん}氣^きづき、

「ヤア清^{きよ}照^{てゐる}姫^{ひめ}殿^{どの}、誠^{まこと}に濟^すみませなんだ、實^{じつ}は軍^{ぐん}務^{むじやう}上^{じやう}の件^{けん}につき調^{てう}査^さすべき事^{こと}があり、暫^{しば}く席^{せき}を外^はして居^をりました」

「將^{しやうぐん}軍^{ぐん}様^{さま}、そりや嘘^{うそ}でせう。妾^{あたい}がイヤになつたものだから、何^{どこ}處^こかへ隠^{かく}れて居^ゐやしやつたのでせう、妾^{あたい}殘^{ざん}念^{ねん}ですわ、アーンアーン、オンオンオン」

「エへ、へ、へ、オイ片^{かた}彦^{ひこ}殿^{どの}、如^ど何^うでムる、可^か愛^{あい}いものでムらうがな」

「コレコレ清照姫殿、貴女は又變心をしましたか」

「ランチ將軍さまが、あの大きな目をむいて私に電波、イヤ電信を送つて下さつたから、どうしても返信（變心）をすべき義務があるぢやありませんか、

ホ、ホ、ホ、」

「ア、どうも仕方がない。どうせ片彦が二人の美女を左右に侍らせ、ナイスを一人で獨占して居ても仕方がない。清照姫が變心したのも天の配劑だらう、イヤ清照姫、拙者は寛大なる勇猛心を發揮して、ランチ將軍にお任せ申す。唯今限り片彦の事は思ひ切り、ランチ將軍に貞節を盡したがよからう」

「オホ、ホ、ホ、あの片彦さまの蟲のよい事、自惚もよい加減にして置かんせいなア。思ひもかけぬものに思ひ切れとは、マア何と云ふ自惚者だらう。好かぬたらしい。男と云ふものは、ほんとに自惚の強いものだよ」

「ランチ殿、嘸御満足でムらうのう、エーン、エーン、拙者は大に讓歩致して、年の若い初稚姫で満足致す、どうか拙者の雅量を認めて下さい」

「何なりと勝手に仰有い、兩人共拙者の女でムるぞ。ヘン馬鹿々々しい、拙者が

黙言つて居るかと思つてよい氣になり、圖々しいにも程がある」

「仰せられなランチ殿、拙者が何う致したのでもない、女の方から秋波を送り、女に頼まれて約束致せし迄の事、其女を拙者が貴下にお任せしようと云ふのだから、吾々は感謝をこそ受くべけれ、そのやうな、榎で鼻をこすつたやうな御挨拶は承はりたくない、コレ初稚姫殿、こんな分らない將軍の所に居らうよりも、私の居間に参りませう、貴女は永久に愛します」

「エ、すかぬたらしい、私がいづ貴方を好きました。私は姉さまが好きな人が好きなので、御免下さいませ」

「何だか外の陽氣が變つたと思へば、初稚姫様の鼻息までが變つて來たわい、ハ、ウン、分つた、恥かしいのだな、人前を作つて居るのだな。ウンウンヨシヨシ可愛なものだな」

と口の奥で呟いて居る。初稚姫は鋭敏な耳に此聲を聞き知り、
「モシ、片彦さま、「可愛なものだ」など云うて下さいませ、妾、胸が悪くなりなりました」

「アハ、、、、片彦殿、如何でムる、色は年増が良刺すと云ふ事を御存じかな。

アハ、、、、」

「チヨツ、エーエイ」

「片彦殿、チヨツ、エーエイとは御無禮ではムらぬか、上官の命令だ、この場を退却めされ」

片彦は鶴の一聲、已むを得ず、

「へーエ」

と嫌さうな返事をしながら二人の女に心を残し、次の間に飛び出し、襖の外から上下の齒を喰ひ締めたまま唇をパツと開き、

「イーン」

と云ひながら、拳骨で二つ三つ空を打ち、

「チヨツ、上官の命令だなんて、チヨツ、馬鹿にして居る、併し仕方がない、俺も上爛で一杯やる事にしよう、お民でも相手にして」

と云ひながら、すごすごと歸り往く。

ランチは片彦を室外に突き出し、二人の美人の中央に色男氣取りで胡床をかき、目を細くしながら、

「これは清照姫殿、其方は此ランチの眼をよけて、いつの間にか片彦と以心傳心とやらをやつて居たのぢやないか」

「ハイ別に左様な事はありません。併しながら貴方も好きですが、片彦さまの抱持さるる思想が氣に入りましたから、それで私は片彦さまは何うでも宜敷いが、新しい思想だと思つて、其思想に惚れ込んで居ます。貴方が、私の思想と同じ思想をもつて下さらば、此位嬉しい事はありません。實は貴方に對しては肉體美を愛し、片彦さまに對しては其思想を愛して居るのですよ」

「片彦の新思想とはどんな思想だ、俺だつて思想については、先繰り新しい書物をあさつて居るから、片彦には負けない積りだ、一體どんな事を云うて居るのだな」

「ハイ、片彦さまの思想はどうかと存じまして探つて見ました所、本當に惚れ惚れするやうな思想でムいますよ。かいつまんで申せば、軍備不必要論者です、武

備撤廢論者ですよ、そして平和な耽美生活を送りたいと云ふ、ほんとに新しい思想ですよ」

「片彦身軍籍にありながら左様な事を申したかな、それは中々もつて不都合千萬……ぢやない、吾意を得たる、マ、マ、思想だ。ウン、さうして武術の事については、何う云うて居たな」

「武術家は臆病者だと云つて居られました。臆病者なるが故に世の中が恐ろしくなり、疑心暗鬼を生じ、敵なきに敵を作り、何人か自分を害するものはなきかと、心中戦々競々として安らかならず、常に自己保護の迷夢に襲はれ、武術を練り、柔術などを稽古するのだと云うて居られました。ほんとに世の中に愛善の徳さへあれば、虎狼でも悦服して、決して其人に敵するものではありません。況して人間に於てをやです、私はこの思想が大に氣に入りました。心に邪惡分子を含んで居るものは、徒に人を怖がり人を恐るるものです。かかる人間が身を護るために劍術柔術を學ぶものです。地獄界に籍を有し、八衢に彷徨つて居るものが武術を志すものです、低脳兒や殺人狂の徒が喜んで人命を奪ひ財産を奪ひ、或は人の國

士を奪ひ或は人の子女を辱かしめ、惡逆無道の限を盡して英雄豪傑と誇り、其驕慢券とも云ふべき窘笑を、胸にブラブラ下げて居るのは、本當に時代後れだと片彦さまが仰有いましたよ」

「それだと言つて、世界に國家として存在する以上は軍備は必要だ。假令ミロクの世となつても軍備の撤廢は出來ない、さう新思想にかぶれて仕舞つては駄目だ。一方に偏せず片寄らず、其中庸を往くのが最も安全の道だらうよ」

「姉さま、ランチ將軍さまのお言葉は、本當に間然する所ありませんが、併しながら三五教の治國別さまとやらを、深い陷穽へ突つ込み遊ばしたと云ふ事をチラリと聞きました、それを聞くと、本當にゾツと致しますね」

「さう、さうなの、ア、いやらしい、何とランチさまも甚い事をなさいます、私それを聞いて俄にこの人がどことはなしに嫌になつて來ましたよ。矢張片彦さまがお優しく、仰有る事が新しうて、胸の琴線に觸れるやうですわ」

ランチは慌てて、

「イヤイヤ決して私がしたのではない、片彦の計らひで致したのだ。彼奴は偽善

者だから、其方達の前でそんな事を云うて居るのだ。彼奴は武斷派の隊長、軍國主義の張本だ。併しながらあの治國別及び龍公と云ふ奴は、どうしても許す事の出來ない奴だ。これを許さうものなら、バラモン軍は根底より破壊せられなくてはならない、大黒主の大棟梁様に申譯ない、又龍公とやら、吾軍の祕書役を勤めながら敵に裏返つたのだから、陷穽に陥つて斃るのも自業自得だ、假令愛する汝のためなればとて、是ばかりは赦す事は出來ない」

妾この館に左様の人が九死一生の苦みをしてゐらしやるかと思へば、恐ろしくて仕方がムいませぬ。どうか何處かへ雪見にでも連れて往つて下さいな」

「アハ、、、、遠は女だな。氣の弱い事を云ふものだ。併し其弱いのが女の特色だ、女の可愛い所なのだ。さらば、これより早速雪見の宴を催すため、入口の風景の佳き物見へ往つて、酒汲み交しながら楽しむ事と致さう」

「ハイ、早速の御承知、有難うムります。サア初稚姫さま、將軍の後について、少し遠うはムいますが、物見櫓までお供を致しませう」

「この積雪に、女の足では行歩になやむだらう。幸ひ駕籠があるから、從卒に昇

がしてやる」

「姉さま、さう願ひませうかな」

「此丈の雪の中、どうせ駕籠で送つて貰はねば、とても歩けませぬわ」

ランチはポンポンと手を拍つた。次の間に控へて居た二人の副官は慌しく出て来り、

「將軍様、何か御用でムいますか」

「ウン、今日は稀なる大雪だ。四方は一面の銀世界、雪見の宴を催すから、お前達も供をせい。そして駕籠を五六挺持つて来いと云うて呉れ」

二人の副官は、

「ハイ」

と云つたきり早々に此場を立つて出でて往く。

ランチは、アーク、タール、エクス、蠓蠓別等の所在を從卒に命じ探さしめ、雪見に伴ひ往かむとしたが、折柄の積雪に埋もつて居たため發見する事が出来なかつた。此時お民は片彦將軍の居間に招かれて、いろいろと片彦の意味ありげな

話に、膝をモチモチさせながら苦しさに時を移して居た。ランチ將軍は四人の姿の見えざるに、どこか雪見でもする積りで郊外に往つたのだらうと思ひ、二人の副官と二人の美人を伴ひ、五人連れ駕籠に揺られながら物見櫓をさして進み往く。地上二尺許りの積雪に、駕籠舁の足音はザク、ザク、ザクと馬丁が押切りにて馬糧を切るやうな音をさせ、綺麗な雪道にスバル星を數多印しながら、漸くして物見櫓に安着した。此處に炭火を拵へ、酒の爛をなし、雪見の酒宴を催す事となつた。

一方片彦はランチ將軍が二人の女を伴ひ、物見櫓に雪見の宴を張つて居ると云ふ事を、從卒の内報によつて聞き知り、大方蠨螋別其他も同伴せしならむと、二挺の駕籠を命じ、お民と共に宙を飛んで物見櫓をさして進み往く。

(大正一二・一・一二 舊一一・一一・二六 加藤明子録)

雪見櫓の可なり広い最高部の一室には、ランチ將軍をはじめ清照姫、初稚姫及びガリヤ、ケースの副官と共に、鐘や太鼓や拍子木などを叩いて、底抜け散財が始まつて居る。ランチは二人の美人に交る交る酒を盛り漬され、上機嫌になつて、そろそろ法螺を吹き出した。

「オイ姫、イヤ清さま、何うだ、この綺麗な雪の色とランチの顔の色とは、どつちが美しいか、エーン」

「それより私の方からお尋ね致しますが、この雪の色と私の顔の色と、どつちが白うムいますか、言つて下さいねえ」

「ウンさうだ。どちらが雪か、どちらが花か、また月か判別し難い三國一のナイズだ。この広い五天竺も、清さまのやうなシヤンは又とあるまい、初ちやまだとて其通りだ。それだからこのランチが重要な任務を忘れ、千金の身を顧みず、此處へお交際に來たのだよ、随分親切なものであらう、これでも矢張片彦の思想が氣に入るのかな」

「ハイ片彦さまは平和論者ですからねえ、何だか其思想が氣に入りましたよ。武

術修業は臆病者のする事だと仰有つた點が天來の妙音、金言玉辭と本當に嬉しく思ひましたわ、武者修業だとか云つて、武術修業に歩くやうな、乞食的生涯を送る男はつまりませぬからねえ」

「さうだ、俺もそれは同感だ。武者修業と云へば、お面、お籠手、お胴と云ふ様に竹刀を矢鱈に振り廻す様な武術家は俺も大嫌ひだ。あれは武者修業でなく無駄修業だ。俺の云ふ武者修業は聊か選を異にして居る。眞の武術修業はそんなものぢやない。或は敵城を攻め、又防城と云つて押寄せた敵を防禦せむ事を考へたり、そして諸國を遍歴し、堀の深淺や、又山城なれば何れの方面より攻めたら落ちるか、落ちないか、又城の要害を調べ、又平地にある城なれば谷を塞いで水攻にするとか、又は市街を焼いて火攻にするとか、水源の所在及糧道を絶つとか、さう云ふ事を調べる修業をするのだ。一人對一人のお面、お籠手では詰らないからな、俺達の云ふ武術と云ふものはマアこんなものだ、エーン。片彦の云ふ武術と俺の云ふ武術が何れ丈異ふかな、器が大きければ矢張云ふ事が大きいからな。何だ猪口才な、武備撤廢とか軍備廢止とか何とか云うても、最後の解決は矢張武術でな

くは納まらないのだ」

「もしランチさま、もうそんな武張った話はよして下さい、私何だか恐ろしくなつて耐りませぬわ」

「アハ、ハ、ハ、遠は女だ、角張った話はお氣に召さぬと見えるわい、それぢや何か些と「はんなり」とした歌でも歌つては何うだ」

「將軍様から一つ歌つて下さいな」

「ヨシヨシ、それぢや一つ歌つてやらう、太鼓や拍子木で力一杯囃して呉れ、囃が悪いと歌ひ憎いからな」

「ハイ承知致しました、サア初稚姫さま、貴女太鼓を打つて下さい、私拍子木を打ちますから」

茲にランチは酔が廻るにつれ、銅羅聲を張り上げて歌ひ出す。二人の女は拍子木や太鼓で歌に合す。二人の副官は耐りかね立ち上り、兩手を前後左右に振り廻し、腰付をかく踊り狂つた。

ハルナの都で名も高き 天人のやうな石生能姫さま

衆人羨望の的となり 清きお顔を一目でも

拜みたいものだとやつて来る それ故ハルナの都は

いつも花咲く春のよだ こんなナイスはまたと世に

二人とあるまいと思ふたに こりや又どうした事ぢやいな

殺風景なる陣中へ 遠の石生能姫さまも

尻端折りてスタスタと 逃げ出すやうなこのナイス

一人ばかりか二人まで ランチ將軍さまのお手に入り

酒汲み交してどんちやんと 騒ぎ廻るのはこれは又

どうした拍子の瓢箪か 遠の大黒主さまも

こんな所を見て居たら 嘸やお氣をば揉まれるだらう

ほんに俺程仕合せ者が 三千世界にあるものか

ヨイトセノ、ヨイトセ コレヤイノ、ドツコイシヨ

エーエーエ ハーレ、ヤーレ、ヨイヤサ

ヨイヤサ、ヨイヤサ、ドッコイサ 二人のナイスに取り巻かれ

天國淨土の樂しみを 今目のあたり見る俺は

如何なる前世の因縁か 昔々の其昔

も一つ昔のまだ昔 ずっと遠き神代から

此世の爲によい事を して來た報いでこんな目に

遇ふのであらう有難い 運は天にあり福は寢て待てと

これまで度々聞いたけど こんな結構とは知らなんだ

俺に引きかへ片彦は 噯今頃は吾居間に

雙手を組んで吐息吐き ポロリポロリと涙をば

流してふさいで居るだらう 是を思へば些とばかり

俺も同情の涙をば 落してやらねばなるまいが

何だか知らぬが氣味がよい ア、ドッコイシヨ、ドッコイツヨ

ヨイヨイヨイのヨイトサ エーエーエ

ハーレ、ヤーレ、コレハノサ ドッコイセエ、ドッコイセ。

ア、苦しい、ア、もう是で御免蒙らう、サアこれからが清さまの番だよ。歌つたり歌つたり」

「ランチ様、私は歌は不調法でムいます、どうぞ貴方歌つて下さいな」

「エ、人に歌はして置いて自分が歌はないと云ふ事があるか、それなら初ちやま、お前歌つたらどうだ」

「それでも私恥かしいわ、ナア姉さま、歌なんか知りまへんもの」

「アハ、ハ、ハ、今日はまるで、このランチ將軍が、藝者兼幫間のやうなものだ。女王様の御機嫌を取るのには竝大抵のものぢやない、唯一言で三軍を指揮するこのランチ將軍も、清照姫さまにかかつては弱いものぢや」

かかる所へ片彦將軍は宙を切つて走り來り、案内もなく物見櫓にかけ上り、酒宴の席に現はれて、

「ランチ將軍殿、貴方は三軍を指揮する身分をもつて、纖弱き女に現を抜かし、軍職をお忘れなさるとは以ての外の御振舞、拙者は是より部下に命じ急使を立て、ハルナの都の大黒主様へ將軍の不行跡を報告仕る、覺悟なさいませ」

と氣色けしきばんで仁王立にわうだちとなつた儘まま吠鳴どなり立てて居ゐる。

ランチ將軍しやうぐんも、片彦將軍かたひこしやうぐんは吾部下わがぶかとは云いへ、斯樣かやうの事ことを大黒主おほくろぬしに報告はうこくされようものなら首くびは胴どつについて居ゐない、こりや困こまつた事ことになつたと、俄にはかに酒さけの醉よひも醒さめ、眞青まつさをの顔かほをして、やや狼狽うろたへ氣味きみになつて、

『イヤ片彦殿かたひこの、物ものには表裏へうりがムる。サウ貴殿きでんのやうに几帳面きちやうめんに致いたされてはやりきれない、まづ一獻いっこん召上めしあがれ』

と杯さかづきを突き出だす。片彦かたひこは腹立はらだちまぎ紛まれにビリビリ慄ふるひながら、

『魂たましひ迄までも腐くさり切きつた將軍しやうぐんの杯さかづきは眞平まつびら御免ごめん蒙かうむる、汚けがらはしうムる』

と、ランチの差出さしたした杯さかづきを無殘むざんにも叩たたき落おとした。杯さかづきは金火鉢かなひばちの上うへに落おち、パツと三みつつに割われて仕舞しまつた。

『ママアさう云いつたものぢやない、まづ氣きを落おち着つけられよ、御所望ごしよまうとあらば

初稚姫はつわかひめをお譲ゆづり申まをす』

『魚心うしこころあらば水心みづこころありでムる。然しからば初稚姫はつわかひめを拙者せつしやに綺麗きれい薩張さつぱりとお渡わたし下くださるか』

『武士ぶしの言葉ことばに二言にごんはムらぬ』

「エ、好かぬたらしい、あんな、カツクイのやうな男、妾死んでも嫌だわ、エ、気分が悪い、トツトと歸つて下さい。姉さま、鹽でも撒つて歸なして下さい。私はランチさまが好きだわ。片彦なんて、名を聞いてもガタガタして、體中がガタガタ彦になり、嫌になりますわ。マアあの貧相な顔わいのう。ホ、ホ、ホ、」

「コレコレ初稚姫、左様な氣儘を云ふものぢやない、なぜ將軍の命を承知ないのでか」

「ホ、ホ、仕様もない、將軍の命をきくものは殺人器同様の低脳兒の雑兵ですよ。私は獨立した一個の女、軍籍に身は置いて居りませぬ、將軍さまだつて私に命令する權利はありますまい、嫌と云うたら嫌ですよ」

「エ、恥の上には恥をかかされ、何うして片彦將軍の顔が立つか。エ、もう仕方がない、斯うなれば大黒主様へ御注進だ。ランチ殿、御切腹なさるか、但しは兜をぬいで、支配權を片彦にお譲りなさるか、返答如何でムる」

と劍の柄に手をかけ、チクリチクリとつめ寄つた。ランチ將軍はセツパ詰り、しようこと無き儘に、二人の副官に何事かを目をもつて命じた。二人の副官は、矢

庭に片彦の左右につつと寄り、両手を手早く縛り、三階の高殿から、眼下の谷川の青淵目蒐けて、ドボンと許り投げ込んだ。

「アハ、、、、、ても心地よく斃つたものだ。ヤア兩人、出かした出かした。是より其方は副官の職を解き、片彦將軍及び久米彦將軍の後任者に命ずる」

「ハイ、有難うムいます」

「ガーター勳章を與ふべき所だが、これは後日又大黒主様に奏上して與へらるるやう手続きを致してやらう」

「ハイ、有難うムいます、何分宜敷くお願い致します」

両手を縛られて高殿から谷川へ投げ込まれた片彦將軍は、ブカリブカリと浮きながら早瀬を流れゆく。ランチ及び外二人は此光景を眺め、手を打つてウロウウロウと歡聲をあげてゐる。清照姫、初稚姫は吃驚したやうな顔をして、

「アレマア、妾恐いわ、姉さま、何うしまひよう、逃げて歸りませうか」

「さうね、こんな怖い人ばかり、妾、もうよう居りませぬわ」

「アハ、、、、清照姫殿、初稚姫殿、何も怖い事はない。決してお前達に危害

を加へようと云ふのではない、お前達を可愛がつてやり度いばかりに片彦將軍をなきものにしたのだ。凡て軍人は百人や二百人殺した位で、氣を弱らして居つては軍職が勤まらない。大根の葉についた害虫を草鞋で踏みにじるやうな心持だ。一日の内に二萬三萬と云ふ人間を殺さなくては、何うしても國家を守る事は出来ぬのだからな」

「ランチ様、もうそんな怖い話はよして、この勾欄の傍で三人様手を繋いで、面白可笑しく踊つて下さいな。私怖くて體が慄へて來ましたよ」

「姉さま、私も怖くなつてよ。一遍ランチさまの品の好い體で踊つて欲しいわ」

「ヨシヨシ踊つてやらう、併しお前も一緒に手を繋いで踊らうぢやないか」

「姉さま、一緒に踊りませうよ」

「それなら五人輪になつて面白う踊つて見ませう、初稚姫さま、貴女、將軍さまの右のお手を取つてお上げ、私左の手を取つて上げます」

「ヤアこれは面白い」

と顔の紐を解き、副官と五人輪になつて踊り初めた。餘り踊つたためか、二人の

美人が頭に被つて居た鬘はポタリと落ちて、テカテカの青坊主……ランチと二人はアツと驚く途端に、二人の美人はさも恐ろしい鬼とも蛇とも妖怪とも分らぬ顔になり、大口をあけてワツと迫つて来る。三人は驚いた途端にヒヨロヒヨロと蹣跚、一度にドツと勾欄に尻餅をついた。勾欄は、メキメキと音をたて、三人は片彦將軍の落ちた青淵にドボンと音を立て、石を投げ込んだやうに水中に沈んで仕舞つた。下に待つて居たお民は、片彦將軍の、三階へ上つた儘下りて來ないのに不審をおこし、段梯子を上つて見れば、大きな白狐が二匹、お民の顔を目を瞋らして白眼みつけて居る。お民はアツと云つて反身になつた儘、段梯子の上からドスン、ガタガタガタ、ウンといったきり氣絶して仕舞つた。

遙か向ふの方より涼しき聲の宣傳歌が聞えて來た。果して何人の宣傳歌であらうか。

(大正一二・一・一二 舊一一・一一・二六 加藤明子録)

第二篇 幽冥摸索

第七章 六道の辻（一一二六一）

精靈界は善靈惡靈の集合する天界地獄の中間的境域にして、之を天の八衢といふ事は既に述べた所である。さて八衢は佛敎者の云ふ六道の辻の様なものである。又人の死後此八衢の中心なる關所に来るには、いろいろの道を辿るものである。東西南北乾坤巽艮と、各精靈は八方より此關所を中間として集まり来るものである。東から来る者は大抵は精靈の中でも良い方の部分であり、さうして三途の川が流れてゐる。どうしても此關所を通らなければならぬのである。又西から来る者は稍魂の曇つたものが出て来る所であつて、針を立てたやうな、所謂劍の山を涉つて来る者である。ここを渉るのは僅に足を容るるだけの細い道がまばらに足型丈残つて居つて、一寸油斷をすればすぐに足を破り、躓いてこけでもしよう

ものなら、體一面に、針に刺されて苦しむのである。又北から来る者は冷たい氷の橋を渡つて来る。少しく油断をすれば幾千丈とも知れぬ深い泥水の流れへ落ち込み、そして其橋の下には何とも云へぬ厭らしい怪物が、鰐の様な口をあけて、落ちくる人を呑まむと待つてゐる。そして其上骨を刻む如き寒い風が吹きまくり、手足が凍えて、殆ど生死の程も分らぬやうな苦しい思ひに充されるのである。又南の方から来る精霊は、山一面に火の燃えてゐる中を、焰と煙をくぐつて來なくてはならない。之も少しく油断をすれば煙にまかれ、衣類を焼かれ、大火傷をなして苦しまなくてはならぬ。併しながら十分に注意をすれば、火傷の難を免れて八衢の中心地へ來る事を得るのである。又東北方より來る者は寒氷道と云つて、雪は身を没するばかり寒い冷たい所を、野分に吹かれながら、こけつまるびつ、死物狂ひになつて數十里の長い道を涉り、漸くにして八衢の中心地へつくのである。又東南より來る精霊は、満目蕭然たる枯野ヶ原を只一人トボトボとやつて來る。そして泥田やシクシク原や怪しき蟲の居る中を、辛うじて中心地へ向ふのである。又西南より來る精霊は、崎嶇たる山坂や岩の上をあちらへ飛び此方へ飛び、

種々の怪物に時々襲はれながら、手足を傷つけ、飛んだり轉げたりしながら、
漸く八衢の中心地に出て来るものである。又西北より来る精靈は、赤跣足になり、
尖つた小石の路を足を痛めながら、漸くにして命カラガラ八衢へ来るものである。
併しながら斯の如き苦しみを經て各方面より之に集まり来る精靈は、何れも地獄
へ行くべき暗黒なる副守護神の精靈ばかりである。而して各方面が違ひ苦痛の度
が違ふのは、其精靈の惡と虚偽との度合の如何に依るものである。又善靈即ち正
守護神の精靈は、何れの方面より来るも、餘り苦しからず、恰も春秋の野を心地
よげに旅行する様なものである。これは生前に盡した愛善の徳と信眞の徳によつ
て、精靈界を易々と跋涉する事を得るのである。善の精靈が八衢へ指して行く時
は、殆ど風景よき現世界の原野を行く如く、或は美はしき川を渡り、海邊を傳ひ、
若くは美はしき花咲く山を越え、或は大河を舟にて易々と渡り、又は風景よき谷
道を登りなどして漸く八衢に着くものである。正守護神の通過する此八衢街道は、
殆ど最下層天國の状態に相似してゐるのである。而して八衢の關所は正守護神も
副守護神も、凡てのものの會合する所であつて、此處にて善惡眞偽を査べられ、

且かつ修練しうれんをさせられ、いよいよ悪あくの改善かいぜんをする見込みこみのなきものは、或ある一定いつていの期間きかんを経て地獄界ぢごくかいに落ち、善靈ぜんれいは其徳そのとくの度どに應おうじて、各段かくだんの天國てんごくへそれぞれ昇のぼり得うるものである。

針はりの山やまを越こえて漸やうやく此處ここに息いきも絶たえ絶だえにやつて來たのは、バラモン教けうの先鋒せんぼう隊片彦將軍たいかたひこしやうくんであつた。片彦かたひこは赤門あかもんの前に意氣揚々いきやうやうと、ヤレ樂らくだといふやうな氣きになつてやつて來ると、赤白あかしろの守衛しゆゑいは、

暫しばらく待まてツ

と呼よびとめた。片彦かたひこは物見櫓ものみやぐらの上うへから谷底たにそこへ眞逆まつさかさま様に投なげ込まれ、肉體にくたいの死しんだことは少しも氣きがつかず、依然いぜんとして現界げんかいに居をるものの如ごとく信しんじてゐた。それ故ゆゑ守衛しゆゑいの一喝いつかつに會あひ、少しも騷さわがず、

拙者せつしやは自在だいじざい天大國彦神てんおほくにひこのかみの教をしへを奉ほうじ、且かつ數多あまたの軍勢ぐんぜいを率ひきめて齋苑さいえんの館やかたへ進軍しんぐんの途中とちゆう、浮木うきぎヶ原がはらへ陣營ぢんゑいをかまへて、戰備せんびをととのへみる、宣傳せんでん使兼しけん征討せいたう將軍しやうくん片彦かたひこでゐる。某それがしは酩酊めいていの餘あまり、道みちにふみ迷まよひ、實じつに烈はげしき針はりの如ごとき草木さうもくの茂しげれる霜しもの山やまを通とほり、漸やうやく此處ここまでやつて來たものでゐる。此處ここは何なんといふ所ところでゐるか、

少時休息を致すによつて、腹も餘程減つたなり、體も疲れたから、酒でもふれま
つてくれまいか、あついで茶があれば、一杯戴きたいものだ」

赤の守衛は目をギロリと剥き、

「當關所は靈界の八衢にて、伊吹戸主神の御關所だ。其方は浮木の森の陣營に於
て、ランチ將軍の副官に後手に縛られ、谷川へほり込まれ、絶命致して此處へ迷
うて來た精靈だ。精靈の中でも最も憎むべき、汝は惡靈だ。サア此處に於て、其
方の罪の輕重を調べてやらう」

「へ、ー、何を吐しよるのだ。馬鹿にするな。俺は酒にこそチツとばかり酔うた
が、死んだ覺はない。一體ここは何處だ。本當の事を申さぬと、此儘にはすま
ないぞ。大方其方は往來の路人をかすめる泥棒だらう」

「馬鹿だなア、確り致さぬか、そこらの光景を見よ。これでも氣がつかないか」
「別にどこも變つた所がないぢやないか、世間並に樹木もあれば、道路もある。
小さい池もあれば川も流れてゐる。人間も道々澤山に出會つて來た。左様な事を
申して、吾々を脅迫しようと致しても、いつかないつかな誑されるやうな片彦

將軍ではないぞ。左様な不都合な事を申すと、ふん縛つて陣營につれ歸り、火灸りの刑に處してやらうか、エエーン」
赤は片彦の手をグツと後へ廻し、鐵の紐にてクルクルとまきつけ、伊吹戸主の審判廷へ引き立てた。

「ヤア此處は何だか妙な處だ。俺をかやうな所へ、縛つてつれて來るとは何事だ」
「先づ待つてゐる、これから地獄行の言渡しがあるから……」

と云ひすて、青色の守衛に片彦を任せおき、慌しく表へ驅け出した。少時あつて、青赤の衣類をつけたる、いかめしき守衛や獄卒の如き者ドカドカと入り來り、片彦の身邊を取巻き、どこへもやらじと嚴重に警戒してゐる。片彦は金剛力を出して、鐵の綱を引きちぎり、片方の腰掛をグツと手に取るより早く、前後左右にふりまはし、館の戸を無理に押開け、八衢の赤門前へ驀地に走り來り、門の敷居に躓きパタリと倒れ、暫しは人事不省に陥つて了つた。

暫くするとランチ將軍及びガリヤ、ケースの三人は、東の方からスタスタと足早に走り來り、

ランチ「オイ兩人、此處はどこだ、そこに門番が居る。一寸尋ねて来い」

ガリヤ「ハイ、承知しました。何だか、四邊の情況が怪しうムいます。どうぞ、

貴方はケースと共に少時ここにお待ちを願ひます」

と云ひ棄て、門口近く進み寄つた。見れば一人の男が倒れてゐる。何人ならむと

近寄つて顔をのぞき見れば、豈計らむや片彦將軍であつた。ガリヤは驚いて、ツ

カツカと元來し道へ引返し、

「モシ、將軍様、不思議な事があるものです。物見臺から谷底へ投込んで殺して

やつた片彦將軍が、あの門の中べらに倒れて居ります。片彦將軍はいつの間にこ

んな所へ逃げて來たのでせうか」

「成程、ここから見ても、よく似てゐる様だ。ハ、ー、誰かに助けられ、此處ま

で逃げて來よつたのだなア。大方酒にでも酔うてゐるのだらう。何はともあれ、

近づいて調べてみよう」

といひながらランチは進みよつた。そしてよくよく見れば、疑もなき片彦將軍で

ある。ランチは肩を切りにゆすり、

「オイオイ片彦、貴様は命冥加のある奴だ。早く起きぬかい、かやうな所でイビキをかいて寝て居るといふ事があるか」

片彦は此聲にハツと氣がつき、ムクムクと起き上り、

「ヤア、其方はランチ將軍、ガリヤ、ケースの三人だなア。ヤア良い所で會つた。此方を高殿から突落しよつたのを覚えて居るか。斯くなる上は最早了簡相成らぬ。サア尋常に勝負致せ」

「アハ、ハ、ハ、ハ、蠅螂の斧をふるつて龍車に向ふとは其方の事だ。こちらは武勇絶倫の勇士三人、如何に汝鬼神をひしぐ勇ありとも、到底汝一人の力に及ばむや、左様な無謀な戦ひを挑むよりも、體よく吾軍門に降つたら何うだ」

「馬鹿を申せ、此方を谷底へ投込んだのみならず、最愛の清照姫、初稚姫まで横奪した戀の仇、モウ斯うなる上は片彦が死物狂、命をすてた此方、サア、かかるならかかつてみよ」

「ヤ、片彦、あの美人は妖怪でムつたぞや。拙者もあの美人が虎とも狐とも狼とも譬方ない形相をして、拙者を睨みつけた時は、本當に肝をつぶし、ヨロヨロと

ヨ口めいた途端に、高殿の欄干に三人一時にぶつ倒れ、其はづみに高欄はメキメキとこはれ、泡立つ淵に向つて三人は急轉落下の厄に遇ひ、已に溺死せんとする所、命冥加があつたと見え、吾々三人は岸に泳ぎつき、無我無夢になつて此處まで走り来て見れば、門の傍に一人の行倒れ、救ひやらむと、ガリヤを遣はし調べて見れば片彦將軍と聞き、取るものも取敢ず救助に向つたのだ。最早彼の女が妖怪であり、又拙者が貴殿と同様、高殿より水中におち、雙方無事に命を保ち得たのは、全く大自在天様の御守護の致す所だ。モウ斯うなる上は、今迄の恨をスツパリと水に流し、舊交を温めようぢやないか」

「さうだ、拙者も斯うして命の繋げた限りは、貴殿と別に赤目つり合つて争ふにも及ぶまい。何分宜しく御頼み申す。併しランチ殿、此處は不思議な所で、この門内に高大なる館があり、數多の番卒共が立籠り、拙者を軍法會議に附せむと致しよつた。そこで拙者は後手に縛られた鐵の綱を剛力に任せて切斷し、門の戸を押破り逃來る途中、門の鬨に躓き顛倒して、暫く目をまはしてゐたのでござる。そこを貴殿がお助け下さつたのだから、命の御恩人、最早怨みは少しも御座

らぬ、サ是より浮木の森の方角を尋ね、一時も早く陣營へ歸らうではムらぬか、さぞ軍卒共が心配を致して居りませう」

斯かる所へ、ヒヨロリ ヒヨロリとやつて來たのはお民であつた。

片彦「ヤア其方はお民どのぢやムらぬか、ようマア拙者の後を尋ねて來て下さつた。ヤア感謝致す」

「ハイ、ここは何處でムいますか」

「サア地名がサツパリ分らないのだ。最前も赤い面した奴が一人やつて來よつて、八衢だとか關所だとか威かしよつたが、俺の勢に辟易して、何處ともなく消え失せて了ひよつた。アツハ、ハ、ハ、併しお民、俺を慕ふ心が何處までも離れぬと見えて、こんな名も知れない所まで、よくついて來てくれた。イヤ本當に優しい女だ」

「あの片彦様の自惚様わいのう。私には蝶蠟別さまといふ立派な夫がムいますよ。あなたは人の上に立つ將軍の身でゐながら、主ある女に戀慕するとは餘りぢやありませんか、チツと心得なされませ」

「言はしておけば、女の分際として、聞くに堪へざる雑言無禮、いよいよ軍法會議にまはし、其方を重き刑罰に處してやるから、覺悟を致したが大よからう」

「ホ、ホ、ホ、あなたも餘程常識のない方です。軍人でもないもの、而も軍隊に何一つ関係のない此女一人をつかまへて、軍法會議にまはすなんて、餘り常識がなさ過ぎるぢやありませんか、ねえランチ將軍様、まるで片彦將軍は八衢人足みたやうな方です。ホッホ、ホッホ、」

「サア、どうかア」

「コリヤお民、何といふ無禮な事を申すか、八衢人足とは何だ。畏くも大自在天様の御恩寵を受けた、萬民を天國に救ひ、且つ世界の動亂をしづめる宣傳將軍様だぞ。八衢にさまよふ奴は、其方や蝶蝨別の如き人足だ」

「ホッホ、ホッホ、私が八衢人足なら、あなた方皆さうですワ。現に八衢の關所へ迷つて來てゐるぢやムいませぬか。あれ御覽なさい、あすこに館がムいませう。あこが閻魔さまのお館でムいますよ。何れここで、私もあなた方も取調べられるにきまつてゐます。其時になれば私が天國へ行くか、あなた方が地獄へお落ち遊

ばすか、ハツキリと分りませうから、マア楽しんでお待ちなさいませ」

「コリヤお民、其方は狂氣致したか、死んでるのぢやないぞ。今から亡者氣取りになつて何とする。コレコレ ランチ殿、お民に氣つけを吞ましたと思ひますが、生憎途中にて肝腎の藥を遺失致しました。少しばかり貴方の分を與へてやつて下さい」

「拙者も川へ落込んだ刹那、肝腎の靈藥を川へ落したと見えます、仕方がありません」

「ホ、、、、、私の方から氣付を上げたい位だが、私も生憎持合せがないので、仕方がありません。併しながら今赤鬼さまがお調べ下さるでせうから、其時になつてビツクリなさいますなや、本當にお氣の毒さまですワ。あなたの靈衣は浮木の森の陣營にムつた時とは大變に薄くなつてゐますよ。氣の毒な運命が、あなた方の頭上にふりかかつて來てるやうに思へてなりません」

「氣の違つた女といふものは、どうも仕方がないものだなア」

斯く話す所へ、今度は十人ばかりの赤面の守衛が突棒、刺股などを携へ、いか

めしき装束しやうそくをして、バラバラと五人ごにんの周圍まはりを取巻とりまいた。

『拙者せつしやはバラモンの先鋒軍せんぼうぐん、ランチ將軍しやうぐんでムる。其方そのほうは何者なにものなるや知らねども、其そのいかめしき形相ぎやうしやうは何事なにごとぞ。それがしを護衛ごゑいの爲ためか、但ただしは召捕めしとる考かんがへか、直様返すぐさまへん答たふを致いたせ』

守衛しゆゑいの一『ここは靈界れいかいの八衢やちまただ、其方等そのほうらは已すでに肉體にくたいを離はなれ、ここに生前せいぜんの業ごふの酬むくいによつて、今いまや審判しんぱんを受けねばならぬ身みの上うへとなつてゐるのだ。サア神妙しんめうに冥めい土どの御規則ごきそくに従したがひ、此衡このばかりの上うへに一人々々ひとりひとり乗のつたがよからう、罪つみの輕重けいちゆう大小だいせうによつて、其方そのほうの行ゆくべき所ところを定さだめねばならぬ。サ、キリキリと此衡このばかりにかかれ』

ランチは雙手もろてを組くみ、

『ハーテナア』

(大正一二・一・一二 舊一・一・二六 松村眞澄録)

精靈が肉體を脱離して、精靈界の關所に來つた時、其初の間の容貌は、彼が尚
現界に居た時同様の面貌を有し、其音聲や動作及背の長短など少しも違はない。
此時は尚外分の情態に居つて、其内分が未だ開くるに暇なき故である。稍あつて
其面貌、言語などは追々と轉化して、遂には全く以前の姿と相異なるに至る。何
故斯かる變化があるかと云ふなれば、彼精靈が現界に在つた時、其心の内分に於
て、最も主となりたる愛即ち情動の如何によつて、其面貌は轉化し、其情動に相
應するが故である。蓋し彼の精靈は尚其肉體中に在つた時、此愛即ち情動を以て
唯一の生命としてゐたからである。又人間の精靈の面貌は其肉體の面貌と決して
同一のものではない。肉體の面貌は父母より遺傳さるる所なるを以て、何となく
兩親の面貌や聲調に似て居る所あれども、精靈の面貌は愛の情動の如何に依つて
定まる故に、其面貌は情動の證像といつても可いのである。

精靈が肉體を脱離した後、即ち現界人の見て死と云ふ關門を越えた時、精靈が
現ずる所の面貌其ものは即ち愛の情動の證像である。此時は既に外分は除き去ら
れて内分のみ現はれ出づる時である。併し死して未だ時を経ざる精靈に於ては、

其面貌や音聲にて、知己たり兄弟たり親たり親族たるを一目にて認識し得れども、時を經るに従つて互に相知り能はざる迄に變化するものである。

愛善の情動を有するものは其面貌美はしく且何處ともなく氣品あり、光明に輝けども、惡しき情動に居るものの面貌は實に醜穢にして一見して妖怪ならむかと疑はるるばかりである。凡て人間の精靈は其自性上より見れば、情動其ものに外ならない。そして此面貌は情動なるものが外面に現はれたものである。斯の如く面貌の轉化するの、靈界に在つては吾に非ざる所の惡しき情動を詐り装ふ事を得ない。従つてわが有する所の愛と相反したる面貌を装ふ事も得ないのである。靈界に在る精靈は、皆其思想の儘に現出し、其意思のままを面に現はし、又身體の各部に現はるべき情態に居るが故に、一切の精靈の面貌は、要するに其情動の形態であり又證像である。故に現界に於て互に相知り合うた者は、精靈界に於て之を知るを得るのである。但高天原と根底の國に於ては最早斯の如き事はない。故に其知己なりしや、兄弟なりしや、親子なりしやを自ら知る事は甚だ難いのである、否絶無と云つても可い位である。

精靈は死後漸次に其面貌及音聲の變化を來すと雖も、偽善者の精靈の面貌は他よりも遅れて變化するものである。彼等の内分即ち心は常に善き情動を模する事に慣れて居るからである。故に之等の精靈は久しく本來の醜惡を暴露せないものである。されど其虚偽の鍍金は次第に逐うて取除かれ、又自ら剥げるが故に、その所成の内分は其情動本來の形態に従つて變容せなくては止まないものである。かくなつた時には偽善者は其本値を暴露され、醜陋を極め、實に悲惨なものである。又偽善者は現界に在つても神の如く天人の如く、智者眞人を装ひ、靈界の事を極めて詳細に言説する様であれども、其内分には只々自然界のみ是認して、實際に神格を認めず、従つて高天原の状態や或は神の御教などを否定してゐるものである。故に之を靈界にては偽善者として取扱はれるのである。これに反し、情動益々内的にして、高天原に順適する事益々大ならば、其面貌は實に美を極めたものである。何故ならば、彼等は實に天界の愛其ものを以て吾心となし吾容貌となすが故である。又其情動外的にして、眞理を覺らず、神を愛せず且聖言を信ぜざる者は所謂高天原の情態に反くが故に、其面貌は暗く醜く、現界に在りし時よりも益々

劣つて陋劣醜惡になるものである。大本神諭に……神代になれば顔容の綺麗な者よりも心の綺麗な者が、神の目には立派に見えるぞよ、何程美しき顔をして居りても、偉さうに致して居りても、神の前に参りたら忽ち相好が變るぞよ、身魂相應の肉體が授けてあるぞよ云々……と示されたるは、即ち精靈に對する戒めであつて、靈界に於ける精靈の情態に對して適確な御教示と云ふべきである。故に靈界に在る者は、其内分の度の如何に依つて、圓滿となり善美となり、外分に向ふに従つて缺損し行くものである。故に最高第一の天國及靈國の天人の面貌や姿の美しさは、如何なる畫伯があつて其技術を盡し、靈筆を揮ふとも、其美貌や光明なり活氣凜々たる姿の萬分の一をも描き出す事は出来ない。されども最下層の天國靈國に在る者は、最も熟練せる有名なる畫伯が丹精をこらし、其技神に入り妙に達した時初めて、多少其面貌を描き得て、其真相の一部を現はし得る位なものである。

ランチ將軍、片彦將軍、ガリヤ、ケースの兩副官は關所の門口にて赤面の守衛に一夕身許調べを執り行はれた。先づ第一に調べられたのは到着順として片彦將

軍であつた。片彦將軍は生前より最も頑強にして偽善強く、且バラモン教の宣傳使を兼ねながら、其内分に於て少しも神を認めず、只現代の宗教家の如く、神を利己の爲の手段とするに過ぎなかつた。而して數多の人間を、一方には天界地獄の道を説いて、愚昧な者を或は喜ばせ或は驚かせ、自分の善徳者にして且賢者なる事、又神の代表者なる事を思惟せしめ、一方には武力を以て其言説を信ぜざる者は、或は打殺し、或は苦め、漸くにして其威信を保ち、無理槍に秩序を維持してみたのである。それ故死後直に面貌轉化すべき精靈界に來りながら、容易に其轉化を來さなかつた。

「其方は何年何月何日、何れの所に於て、何々の處女を姦淫致したであらうがな。そして又何年何月何日何時何十分、何處に於て人の妻女を私かに姦し、其女を誑かし、澤山の金をむしつたであらうがな」
と掌を指す如く指示されて、流石の片彦も返答につまり、

「ハイ」

と言つたきり、俯いて了つた。

「間違はないか、間違があるなら、あると申せ」

「ハイ、餘り永い事になりますので、スツカリ忘れて居りましたが、さう承はりますと間違はムいませぬ」

「姦淫に關する事は之ばかりか、まだ外にあるであらう、一々有體に申上げッ」

「ハイ、餘り件數が多いので俄に返答に困ります」

「其方が言はずとも、此帳簿にスツカリつけてある。コレ此通り、隨分厚いもの

だらう、第一號より第九百九十五號まで、姦淫に關する事件ばかりだ。一々讀み

聞かさうか」

「ハイ、決して嘘とは申しませぬ、讀んで頂きましては實に苦しうムいます。ど

うぞ御省略を願ひます」

「馬鹿を申せ、自分が勝手な事を致しておいて、此處で大勢の前に曝されるのが

辛いと云つて、省略せよとは、以ての外の奴だ、片彦、顔をあげて見よ、此通り

汝の審判に就いて、諸天人が縦覽に來てゐるぞ」

「ハイ、是非には及びませぬ、何卒御規則通り願ひます」

赤はあか一々いちいち大聲おほごゑを發はつして、第九百九十五號だいきゅうひやくきゅうじふごがうまで一言も洩もらさず讀よみ上げた。其詳そのしやう細さいなること實じつに驚おどろくばかりで、片彦かたひこが記憶きおくを去さつてゐた事を數多あまた、場所刻限ばしよこくげん相手あひてが方の年齢ねんれい及び自分じぶんの女をんなに對たいして云いつた事こと、又女またをんなが答こたへた事こと、其他その他手足てあしの動うごかし方かたまでテツキリと讀よみ上げられ、暗くらがりの恥はぢを明あかるみにさらされ、頭あたまを抱かかへて冷汗ひやあせをタラタラと流ながし、眞赤まつかな顔かほして慄ふるうてゐる。

「これに間違まちがひはないか、間違まちがひがなければ爪印つめいんを致いたせ」

「ハイ」

と云いひながら、怖おそる怖おそる其帳面そのちやつめんに「拙者せつしやの生前せいぜんの行状ぎやうじやう、此記録このきろくに寸分すんぶん相違さうゐ御座ござなく候さぶらふ、片彦將軍かたひこしやうぐん」と記しるし、拇印ぼいんを捺おした。

「ウン、之これでよし、それから其方そのほうは生前せいぜんに於おいて詐欺さぎを致いたしたであらう。又チヨイチヨイ竊盜せつたうも致いたしたであらう。強盜がうたうも致いたしたであらう。賄賂わいろも取とつたらうがなア。それから殺人傷人さつじんしやうじんは申まをすに及およばず、神かみの道みちを誹そしり、人ひとを誹謗ひぼうし、他人たにんの事業じげふを妨ぼう害がいし、體主靈從たいしゆれいじうの有文ありだけを盡つくしたであらう。サア一々いちいち自白じはくを致いたせ」

「ハイ、モウ何卒どうぞこらへて下くださいませ。餘あんまりでムごいます」

馬鹿を申せ、一分一厘間違のない様に取調べるのが、八衢の關所だ。何程手間がいつても、左様な簡略な事が出来ようか」

「何とマア細かい事まで御存じでムいますな。仰せの通り悪といふ悪は残らず、大なり小なり皆普遍的にやつて参りました。併しながら此お關所は吾々の悪事ばかりを摘發なさつて、善は少しもお認めにならないのですか。随分私も悪い事も致しましたが、又此悪事を償ふ丈の善事やつて来た積でムいます」

「其方は饑餓凍餒の民を助けた事もある。又水中に陥り溺死せむとする人間も少しばかりは助けて居る。荒野を開き耕作を奨め、米麥の收入を社會に殖やし、公益を計つた事もある。併しながら此善はすべて汝の聲名を遠近に現はさむ爲の善にして、所謂自利心より出でたるものである。自愛の爲の善は凡て偽善である。最初から悪人を標榜して悪を働いた人間に比すれば、却て其方の心と行ひは、それより以上悪きものである。汝は生前に於て愛の爲の愛を勵み、善の爲に善を行ひ、信の爲の眞を盡した事は、只の一回もない。徹頭徹尾一生の間、悪事ばかりを致して来たぞよ。之に對して辨解の辭あるか」

と呶鳴りつけた。

「左様に厳しく仰せられましては、現界の人間は此關所で及第する者は一人もないぢやありませんか。神様は何事も至仁至愛の徳を以て、許々太久の罪穢を神直日大直日に見直し聞直して下さると聞きましたが、私よりもモットモット悪い人間は、現界には澤山居ります。現に此ランチ將軍だつて、拙者を高殿の上から、計略を以て谷川へ投込んだ悪人でムいます。大黒主の大棟梁だつて、最前私をお調べになつた諸々の條件以上の悪事がムいます。一體それは何うなるのでムいますか」

「左様な事を申して、人の事迄斯様な所で暴露せむと致す其想念が所謂大悪だ。益々以て許す事罷ならぬ。汝聊かにても良心があれば、假令大黒主、ランチ將軍に悪事ありとも、汝は長上の身の上を思ひ、凡ての悪事を吾身一身に引受けるといふ忠義の心がないか。益々以て極重悪人奴、高天原の全權を掌握し給ふ嚴の御靈、瑞の御靈の大神の御教を極力誹謗し、尚も進んで畏くも瑞の御靈の現はれ給ふ地上の高天原齋苑の館へ攻めよせ、假の宮を毀ち、大神を亡ぼさむと迄考へた

であらう。否現に數多の軍勢を引率れて河鹿峠まで進み、治國別の言靈に打ち碎かれて遁走し、卑怯未練にも浮木ヶ原に陣營を構へ、陣中の規則を破り、若き女に目尻を下げ、涎を垂らかし、肝腎の軍職を忘れむと致したであらうがなア」

「ハイ、それは現に此處に居りまするランチ將軍の方が餘程キツウムいました」

「又、他人の事を誹謗致すか、不届至極の曲者奴、これより先づ豫審が済みたによつて、其方は本調べに着手する。部下の番卒共、片彦を館の中へ拘引めされ」

「オウ」

と答へて四五人の番卒は片彦を引立てて、館の中に伴れて行く。

「サア是からランチの番だ。其方は姦淫に關する罪の件數も、片彦に比しては随分多い様だ。併しながら其方は詐欺竊盜強盜及誹謗等の罪は、感心な事には少しもムらぬ。併しながら、主命とは云ひながら、齋苑の館に進軍せむと致した其罪は問はねばならぬ。それよりも最近に於て犯した、片彦を計略にかけて之なる兩人と共に物見櫓より谷川に投げ込み戀の仇を亡ぼさむと致した此罪は容易でない。併しながら悪人が悪人を虐待致したのだから、之は相見互と云つてもいい位なも

のだ。併し其心の罪は問はなくはならぬ。何うぢや、間違はなからうがなア」

「ハイ、決して間違はムいませぬ、ヤ、もう恐れ入りました」

「其方はハルナの都の大黒主を善人と思ひ、或は神の代表者として尊敬致すか。

但しは神素盞鳴尊を悪神と信じ、極力排斥せむと思つたか、其返答を聞かう」

「ハイ、素盞鳴尊を悪神だと思へばこそ勢込んで征伐に向ひました。そして又大

黒主様は此世の救主否靈界までも救ひ下さる大神様と信じられたればこそ、今日まで

忠實に仕へて参りました」

「成程、比較的正直な奴だ、さうなくては叶はぬ。併し一つ尋ねるが、汝の戀の

仇たる片彦將軍を許さむとすれば、其方が上官の責任を以て代りに地獄へ落ちね

ばならぬ。汝は精靈界に十年許り修業を致し、其上第三天國へ進ましてやりたい

のだ、又進むべき素質はある。併しながら部下の片彦を救ふ真心あれば、片彦と

位置を變じ、彼を精靈界に上げてやらねばならぬ、其方の意見を承はりたい」

「これは六かしい問題でムいますなア、早速に返答は申上げかねます」

「これ程分り切つた問題が、それ程六ヶしいか。矢張其方はまだ偽善者の境域を

脱し得ないとみえる。なぜ片彦の罪によつて御處分下され、拙者は拙者の生前の善惡に準じて御處分下されと、なぜ申さぬか。其方の心は今某の申した通りであらうがな。チヤンと其方の面體に文字によつて現はれてゐるぞ。其方は精靈界へ許すべき所なりしが、只今再び心に罪を作つたによつて、ヤツパリ地獄行だ。番卒共、伊吹戸主のお館へ引立てツ

「ハイ、モウ改心を致します、同じ地獄へ行くのなれば、二人行つても一人行つても同じ事でムいます、何卒片彦を助けてやつて下さいませ、私が身代りになりますます」

「馬鹿を申せ、俄の改心は間に合はぬぞよ。其方の改心は怖さ故の改心だから、到底情状酌量の餘地がない。サ早く番卒共、引立てられよ」

番卒は又もヤランチを館へ引立てて行く。

「サア是からガリヤ、ケースの番だ。其方はバラモン教の大神を信じ、随分熱心に教をやつて来たものだ。そして若い時から比較的善もなさなんだが悪もなさなかつた。只惜しい事には主人に諛ひ、身の出世を致さむとして、片彦將軍を川中

へ投落し、生命を奪はむとした、此罪は中々軽くない、併しながら彼等も悪人で
ある、片彦が斯くなるは、自業自得、天運の盡きたる者なれば、之に對しては罪
とすべきものではないが、その心はヤツパリ善いとは言はれぬ、地獄へ行く價値
は充分にある。併しながらランチ將軍の命令で致したのだから、幾分か罪は軽い
傾きがある。どうぞや、地獄へ之から即決によつて落してやらう、有難く思へ
二人は口を揃へて、

「ハイ、どうぞ許して下さいませ。天國へやつて貰ふのは到底其資格はムリませ
ぬが、せめて精靈界に置いて下さいませ。其間に心を改めて善に立ち歸ります。

どうぞ少時の御猶豫を願ひます」

「然らば今天國の門を開くによつて一寸覗いて見よ、天國がよければ天國へやつ
てやる、併し其方は最高天國へ行く事は出来ない、最下層の天國だ」

ガリヤ「ハイ、有難うムいます」

ケース「思ひもよらぬ御恩情を蒙りまして有難うムいます。死んでも忘れは致し
ませぬ、此高恩は……」

「アハ、ハ、ハ、ハ、其方は死んでゐるのを知らぬのか」

「何時死んだか、テンと記憶がムいませぬ。浮木の森から十里許り来た所に、此お關所があつて、天國地獄行の審判をなさる様に考へてをります」

「さうだろ、そりや其筈だ。人間は假令肉體は腐朽するとも其情動と想念は儼然として永續するものだ。靈界は想念の世界だ、而して情動の變化によつて善惡正邪の分るる所だ」

「ハイ、御教訓有難うムいます」

「サア、此岩の門を開くによつて、其方は直様に第三天國に進み行け、グツグツ致して居ると、天國の門がしまるぞ」

と云ひながら、パツと岩の戸を開いた。二人は矢の様に門内に進み入り、顔をあげて方向を見れば、何もものも見えず、烈しき光明に照され、目は眩み、胸はつまる如くに苦しく、頭はガンガンと痛み出し、手足は力脱け、恐怖心に驅られて、一歩も進む能はず、矢庭に踵を返し、再び八衢に轉げ出た。

「どうだ、天國は結構だらう」

ガリヤ「ヤもう、天國の様な恐ろしい所はムいませぬ、あの様な苦しい所なれば、最早行きたくはありませぬ」

「ハ、ハ、ハ、ハ、汝の善徳未だ足らざる故、神徳に浴する丈の神力が備はつてゐないのだ。何程某が同情心を持つて、天國に助けてやらむとすれども、其方の内分が塞がつて悪に充ちてゐるから、如何とも助けやうがないわい。それだから常平生から神を信じ、神を理解し、善の徳を積んでおかねば、まさかの時になつて、こんな目に遇ふのだ。ヤツパリ雪隠蟲は糞臭の中が極樂だ。汝は中有界におく譯にもゆかず、止むを得ないから、地獄界へおとしてやらう、地獄界の方が汝の身魂に相應してゐるから、結局樂なかも知れぬ」

「イエ滅相な、天國も叶ひませぬが、地獄は尚更叶ひませぬ、どうぞ何時までも中有界において下さいませ、ここが一番マシでムいます、なア、ケース、お前も天國には往生しただらう」

「モシ、どうぞ、私も中有界において下さいませ。そして身魂に神徳がつみましたら、どうぞ天國へやつて下さいませやうに御願ひ致します」

「其方は、ランチ將軍の副官とまでなつたでないか、生死を共にすると誓言致したであらう」

ガリヤ「ハイ、私は副官でムいましたが、片彦將軍の後任者に任命してやらうと仰有いましたので、餘り嬉しさに、あゝこんな明君に仕へるならば、假令どこまでもお供をしたと思ひましたので、つひ申しました。併しながら、まだ實印は捺したのでムいませぬし、誓約書を出したのでムいませぬ、又將軍の辭令も頂戴致して居りませぬから、言はば立消え同様でムいます」

「其方はガータ勳章を頂戴する事になつてゐたであらうがな」

「ハイ、其話もムいましたが、これもまだ未遂行でムいます」

「ケース、其方は久米彦將軍の後任者にして貰ふ約束であつたであらう。そして同じく勳章を頂く事になつて居つたであらう。それに間違はないか」

「ハイ、仰せの通りでムいます、併しながらガリヤの申した通り、私も亦未遂でムいますから、靈界へ來てまで、ランチ將軍さまのお供を致す義務はムいますまい」

「汝兩人は利己一片の代物だ。假令三日でも主人と仰いだならば主人に間違はな
かる。其主人が地獄に落ちて艱難辛苦を致すのを、蚤にかまれた程にも感ぜず、
自分のみ助からうと致す、其水臭いズルイ、ド性念、中々以て容易な代物でない。
其方もヤツパリ地獄行だ、ランチ將軍と共に吊釣地獄へ行つて、無限の苦みを受
けるがよからう」

「それは餘り胴欲でムいます。何卒今回に限り大目に見て下さいませ」

ガリヤ「ランチ將軍様、片彦將軍様は實にお氣の毒でたまりませぬ、私も何處ま
でもお供を致したいが山々でムいます、併し最早地獄へ墜ちられた兩將軍、吾々
が参りました所で何のお助けにもなりませんから、どうぞ私を中有界にお救ひ下
さいませ。御願ひ申します」

「番卒共、此等の兩人をお館へ引立てよ」

「アイ」

と答へて、又四五の番卒は兩人を無理無體に門内深く引立てて行く。

「アーア、大變な悪い奴が來やがつて、随分骨の折れた事だ。ここに一人女が居

るが、マア休息きゅうそくしてゆつくりして查しらべることにしよう、白殿しろどの、拙者せつしやが休息きゅうそくの間あひだ、ここに代かはつて、此帳面このちやうめんを守まもつてゐて下さいくだい」といひすてて、暫しばらく姿すがたを隠かくした。

お民たみはツカツカと白しろの側そばに馴なれなれ々なれなれしく進すすみ寄より、

「モシお役人やくにん様さま、ここはヤツパリ靈界れいかいの八衢やちまたの關所せきしよでこまいますか。何なんだか最前さいぜんからウトリウトリと致いたして居をりましたが、ランチ將軍しやうぐんさまや、其他そのほかの三人さんにんのお方かたは、何處どこへ行ゆかれました」と

「彼等かれら四人よにんは今いまや白洲しらすに於おいて審判しんぱんの最中さいちゆうです。私わたしの考かんがへではどうやら地獄ぢごく落おちと見みえます」と

「それはマア氣きの毒どくな事ことでこまいますなア、何なんとか助たすけて上あげる法はふはこまいますまいか」と

「到底たうてい冥土めいどの法律はふりつを曲まげるわけには行ゆきませぬ。彼等かれらは生前せいぜんより地獄ぢごくに籍せきをおいてゐるのですから、假令たとへ天國てんごくへ何程なにほど吾々われわれが上あげてやらうと思おもつても、智慧ちゑし證しょう覺かくが開ひらけてゐないから、假令たとへ天國てんごくへ送おくつてやつても、苦くるしくなつて歸かへつて來きますよ。

ヤハリ地獄代物です、それだから人は平素からの心掛と行ひが肝腎ですよ」

「私は随分悪い事をして來ましたが、ヤツパリ地獄へ行かねばなりませんまいかな

ア」

白は帳面を繰りながら、

「お前さまはお民さまと言つたね」

「ハイ、左様でムいます」

「お前さまには蠓蠓別と云ふ情夫がありますなア」

お民はパツと顔を赤らめながら細い聲で、

「ハイ、お恥かしうムいます」

「お前さまは、あの蠓蠓別と一生添ふ積ですか」

「ハイ、先方さまさへ捨てて下さらねば、初めての男でムいますから、どこまで

も従つて參る積りでムいます」

「モシ、蠓蠓別が中途にお前さまを捨てて、外の女を拵へたら、其時は何うする

考へですか」

「サア、其時になつてみないと分りませぬ、又蝶嬢別さまの方から厭になつて捨てられるか、或は私の方から蝶嬢別さまに愛想をつかして捨てて逃しますか、其點は自分にも分つて居りませぬ」

「成程、そこは正直な所だ、併しながら、蝶嬢別に暇を貰ふか、或はお前さまの方から暇をくれた其後は、獨身生活をやる考へですか、但は二度目の夫を持ちますか」

「理想の夫があれば、キット持ちます、それでなくては狐獨生活は苦しうムいますからなア、折角人間に生れて来て、人間の交はりも出来ずに一生を了るやうな不幸な事はムいませぬから……」

「成程、イヤ感心だ、其心が所謂無垢だ、随分お寅婆アさまに氣を揉ましたり、魔我彦に戀の焰を燃やさしたりして來ましたねえ、チャンとここの帳面についてぬますよ」

「ハイ何分天稟の美貌に生れたものですから、一人の女に二人の男、本當に迷惑致しましたよ。私の方から惚れさせたのぢやありませんか。蝶嬢別さまだつて魔我彦」

彦さまだつて、勝手に先方の方から秋波を送られたのです。そして私は蝶々別さまの方が餘程理想的だと思つて心をよせたのです。お寅さまが怒るのはチツト無理でせう、お寅さまは六十の尻を作つて、元より愛のない虚偽的の戀に翻弄され、自ら修羅をもやして、私を大變にお憎み遊ばすのですが、私はお寅さまの方が無理だと思ひますワ、どうでせう、私もヤツパリ地獄行の資格は具備して居るでせうか』

「サア、私でもハツキリ分りませぬが、どうせ現界の人間は、惡のない者は一人もありません、微罪を取上げて居らうものなら、サツパリ天國の團體が成立しませぬから、可成くは中有界において修業をさせ、一人でも多く天國へ上げたいといふ冥府の方針ですから、先づあなたは早速に天國へは行けずとも、中有界で修業の結果、早晚天國へ行けるでせう。併しながら、不思議なる事には、ランチ將軍始め、お前さままでが、まだ生死簿には生命が残つてゐる。斯様な所へまだ來る時でないが、五人が五人共不思議な事だ、コリヤ何か、靈界の思召のある事でせう』

「又現界へ歸られませうかなア」

「何とも分りませぬな」

と話して居る所へ、ブラリブラリとやつて來たのは蠓蝮別とエキスの兩人であつた。遙向ふの方から、お寅婆アさまが白髪を振り亂し、

「オーイ オーイ」

と嗔聲を張り上げながらやつて來る。蠓蝮別はお民の姿を見て、驚いたやうな聲で、

「お前はお民ぢやないか、どこへ行つてゐたのだ、エ、ー、俺に酒を吞まして置きやがつて、片彦將軍に細目をつかひ、馬鹿にしたぢやないか。それからこんな處まで、蠓蝮別を馬鹿にして、片彦將軍と驅落をして逃げて來よつたのだなア」

「ソラ何を言はんすのだい、蠓蝮別さま、妾は浮木の森の陣營に於て、お前さまの脱線振をどれ程氣遣ひに思つたか知れないよ。それだから片彦將軍に取入つて、お前さまの身の上を保護しようと思へばこそ、嫌で嫌でならぬ男をうまくあしらつてゐたのよ。私の心も知らずに餘りだワ、ホンに憎らしい男だワ。冥土の八衢

まで、女の尻を追っかけ来り、男らしくもない……サ、早く歸りなさい、私もまだ生死簿には、ここへ来るのは早いと出て居るさうだ」

「コリやお民、其方は氣が違つたのか、ここを何處と心得て居る、浮木の森の少し隣村ぢやないか。貴様は最早冥土氣分になつてゐるのか。餘り片彦將軍に現を吐すものだから、精神までがトボケたのだろ。何だ、こんな所まで来て、氣の多い、俺が知らぬかと思つて、色の白い男と何を云つてゐた。サ、有體に申さぬと、此蠓別、タダではおかぬぞ」

と、まだ酒の酔の醒めぬ纏れた舌を無理にふりまはして、駄々をこねかけた。

「コレ蠓別さま、確りなさい、ここは冥土ですよ、此色の白いお方は伊吹戸主の神様の門を守護なさるお役人様で、お前さま等の罪をお調べなさるお役だよ」
「オイ白、ナ、何だ、俺の女房を誘拐しやがつて、こんな所まで伴れて来よつて、俺が酒に酔うてるかと思つて、冥土だの關所だのと威かしたつて、駄目だぞ。サ、どんなことを約束を致した、キツパリと申せ」

「蠓別さま、確りしなさい、此處は冥府の關所ですよ、餘り大きな聲でグツグ

ツ仰有ると、今に赤さまが見えたら、大變に叱られますよ」

「ナ、何だ、赤さまが見えたら叱られるツ……：貴様白い顔してゐて、女にズル

イ赤さまだろ。蛙は口からと云つて、吾と吾手に白状をしたでねえか、エ、ーン、

糞面白くもねえ、そんな事ぬかすと、バラモン軍のランチ將軍殿に告發を致さう

か。なア エキス、本當に馬鹿にしてるぢやねえか」

白「大分に酒がまはつてゐると見える、マ暫く酔が醒るまで、氷室へでも押込んで

でおかうかな」

「モシモシ白さま、そればかりはどうぞ赦してやつて下さいませ、決して亂暴は

させませぬから……：酔が醒めましたら、トツクリと言ひきかしますから……：」

「それなら、お民さま、お前此帳面の番をしてゐて下さい、拙者は暫く奥で、蝶

蠅別の酔が醒めるまで休息して来るから……：モシも他の精靈がやつて來たら、

此取つ手をグツと押して下さい、さうすりや、スグに出て参りますから……：」

と云ひすて、門内に走り入つた。お民は守衛の代理權を暫く執行する事となつた。

お民以上の善徳の者及智慧證覺のある者の來る時は到底勤まらないが、自分以下

もの者に對しては訊問するだけの能力が備はつて來るのも亦不思議である。お民はスツカリ白の守衛の靈に充され、何時の間にやら自分が女たる事を忘れ、自分が白の氣取りで守衛を忠實に勤める事になつた。

そこへスタスタやつて來たのは、小北山に居つたお寅婆アさまである。之はお寅婆アさまの副守護神が本人の改心によつて遁走し、お寅の容貌を其儘備へて此處へ迷うて來たのである。改心したお寅は其面貌と言ひ、肉付といひ、生々してゐるが、此處へやつて來たお寅は嫉妬と憤怒の眞最中に、神の光に照らされて追ひ出された精靈が、八衢界を彼方此方と踏み迷ひ、艱難苦勞して、やつと此處まで出て來たのであるから、随分厭らしい形相であつた。お寅はお民のそこに居るのには少しも氣がつかず、蠓蠓別とエキスがグタグタになつて倒れてゐるのを打眺め、蠓蠓別を無理にゆすり起した。蠓蠓別は物に魘はれたやうな聲を出して漸く起ち上り、大地に胡坐をかき、

「ア、お民に會うた夢を見てゐたのに、誰だい、俺を揺り起しやがつて……」

と云ひながら目を開いた。さうするとお寅は、化物のやうな顔をして、蠓蠓別を

グツと睨み、

「コレ、蝶蝮別さま、お前さまは九千兩の金をソツと盗み出し、私が目をまかしたのを幸として、金剛杖で頭を二つも叩き、お民の女と一緒に小北山を逐電し、此お寅を馬鹿にしたぢやないか。サ、かうなる上は最早百年目だ、鼻を捻ぢて上げようか」

と云ひながら、グツと力に任して、少し左に曲つた鼻を捻ぢあげた。

「アイタ、、、、、コラお寅、ホンナに亂暴な事をすない、又しても又しても鼻を捻ぢやがつて、エ、ーン、いい年して、いい加減にたしなまぬか。こんな大道の中央で、意茶つき喧嘩をして居ると、誰が見てをるか知らせぬぞ」

「コリヤ蝶蝮別、九千兩の金を早く返せ、そしてお民の女を何處へやつたのだ」

「九千兩の金は、今ここに居るエキスやコー、ワク、エム等のバラモン教の番卒にくれてやつたのだ。そしてお民は今ここに居つた筈だが……俺はモウお前は厭になつた。お民の奴、片彦將軍と驅落したり、又こんな所へ来て色の白い男と意茶ついてやがるのだ。モウ女は厭になつた。俺の趣味はヤツパリ酒だ。アーア、

上げるから、聞いたがよからう」

「ナ―ニ、此お寅はこんな所へ来て、罪を數へられるやうな悪い事はせぬワ、現に此處に居るエキスが、私の金を取りやがったのだ。なぜ之を查べぬのか」

「蠓蠓別が其方の金を取ったのでないか」

「蠓蠓別は取つたにした所で、私の最愛の男だ、お寅の物は蠓蠓別の物、蠓蠓別の物は即ちお寅の物だ、それをうまくチヨロまかして、まき上げた此エキスこそ大悪人だ」

と云ひながら、フと顔を上げればお民であつた。お寅はお民を見るよりクワツと怒り、

「コリヤお民、貴様こそ大悪人だ、蠓蠓別をくはへて金を盗ませ、こんな所まで連れて来よつただぢやないか。サ、いい所で會うた、生首を引抜いてやらう、サア覺悟致せ」

と狼のやうな聲ふりあげてお民に武者ぶりつく。お民は一生懸命にお寅と組んず組まれつ、もみ合うてゐる。蠓蠓別、エキスはヒヨロヒヨロしながら立ち上り、

「マアマア待った、待たんせ、コリヤどうぢや」
と二人の中に割つて入り、顔を引つ搔かれたり、抓られたり、蠚蠚別も焼糞になつて撲る、蹴る、誰彼なしに金切聲をふり上げ、犬の咬み合のやうに喚き立ててゐる。此聲を聞きつけて赤、白の守衛は宙を飛んで此場に現はれ來り、赤は大きな鐵棒を振上げ、

「コラッ」

と一喝した。此聲に驚いて、お民も、お寅も、蠚蠚別、エキスも命カラガラ散り散りバラバラに何處ともなく逃去つて了つた。

「ハ、ハ、ハ、ハ、娑婆亡者奴、たうとう逃げよつた。彼奴アまだ此處へ來る奴ぢやないから、少時木蔭にたたずんで考へてゐたが、随分面白いことをやりよつたものだ、アハ、ハ、ハ、ハ、」

白「本當に面白いものですなア、あゝして娑婆へ追ひ返せば、何れ改心をして、又來るでせう」

「あのお寅と云ふ奴、彼奴ア現界で已に改心してゐるのだが、二重人格者で、副

守しゆの方がやつて來きよつたのだ。彼あいつ奴やつだけは何どうしても番卒ばんそつを派遣はけんして引ひつ捉とらへ、地ぢこ

獄くへ落おとさねばなるまい」

□ 然しからば番卒ばんそつに命めいじ、捕縛ほばくさせませう」

(大正一二・一・一三 舊一・一・二七 松村眞澄録)

第九章 罪人橋ざいにんばし (一二六三)

高たか天原あまはらの靈國れいこく及び天國てんこくは光明くわうみやうの世界せかいである。其その光明くわうみやうは實性じつせいに於あて神眞しんしんである、
即すなはち靈れい的てき神しん的てき證じやう覺かくである。此この神眞しんしんなる光明くわうみやうは諸天しよてんにんの内視ないしと外視ぐわいしとを同どう時じに照破せうは
するものである。さうして内視ないしとは天人てんにん自身じしんの心こころの内うちにあり、外視ぐわいしとは其目そのめにあ
るを云いふ。又また諸天しよてんにんは高天原たかあまはらの愛あいの熱ねつに包つつまれてゐる。即すなはち此熱このねつは實性じつせいに於あて神しん
善ぜん即すなはち神愛しんあいにして、吾々われわれが益々ますます證じやう覺かくに入いらむとする情動じやうどう及び願望ぐわんまうを有いうするものは
此熱このねつより來きたるものである。要えつするに高天原たかあまはらの靈國れいこく、天國てんこくは萬善まんぜんの集しふ合がふ所しよである。

天人の證覺の程度は現界人の口舌のよく盡し得る所でない。人間が一千言を費しても尚盡す能はざる所をも、天人は數言にて之を辨ずる事を能くするのである。其他天人の一言一句の中にも無邊無量の密意の含まれてある事は、到底人間の言語に屬する文字にて表はす事は出来ない。天人は其言語に用ふる所謂語字を以て十分に表はし得ざる所は、幽玄微妙なる音調を以て之を補ふ。そして其音調によつて情動を表はし、情動よりする想念中の諸概念は語字によつて之を表はすのである。大本開祖の神諭も亦其密意の存する所は到底現代人の智慧證覺にては容易に解し難きものである。されども智慧證覺ある天人が之を讀む時は、直に無邊無量の密意の含まれてある事を諒得し得るものである。そして此語字については靈界物語第二輯第三卷（第十五卷）第一天國と云ふ所に其狀況を示しあれば参照されたい。故に人間は其精靈を善と眞とに鍛へ上げ、生きながら高天原の團體に籍を有するに非ざれば、大本の神諭は容易に解釋し得るものでない事を悟らねばならぬ。大本の神諭は、國祖大國常立尊、嚴靈と顯現し、稚姫君命、國武彦命等の精靈に其神格を充し、さうして天人の團體に籍を有する豫言者なる出口開祖の肉

體に來し、大神の直々の御教を傳達されたものである以上は、餘程善徳と智慧證覺の全きものでなければ之を悟る事は出來ない。併しながら神は至仁至愛にましますが故に、此神諭の密意を自然界の外分的人間に容易く悟らしめむが爲に瑞靈の神格を精靈に充し、變性女子の肉體に來らしめ、其手を通し口を通して靈界の眞相を悟らしめ給はむとの御經綸を遊ばしたのである。

大本神諭の各言句の中に、人をして内的證覺に進むべき事項を含蓄せしめある所以は、神格に充されたる天人即ち本守護神の言語は情動と相一致し、一々其言語は概念と一致するものである。又天人の語字は其想念中に包含する事物の直接如何によつて無窮に轉變するものである。尚又内邊の天人は言者の音聲及び云ふ所の僅少なる語字によつて其人の一生を洞察し知悉し得るのである。何となれば、天人は其語字の中に含蓄する諸概念に依つて、音聲の各種各様に變化する状態を察し、これに依つて、其人の主とする所の愛と信及び智慧證覺の如何なるものなるかを知るものである。現界の人間でも少しく智慧あり證覺あり公平無私なる者に至つては、其籍を生きながら天人の團體においてあるものであるから、對者の

一言一句の中に包める意義によつて其人の一生の運命を識別し得るものである。人間の想念及び情動は其聲音に現はれ、皮膚に現はれ、如何にしても靈的智者賢者の前には之を祕する事が出来ないものである。此一言は愛を含むとか、此一句は親なりとか、彼の一句は勇とか、此一句は智とか、凡て一言一句の際にも顯現出沒して、如何なる聖者といへども賢人といへども、心中の思ひを智慧證覺者の前には隠す事は出来ない、之即ち神權の如何にしても掩ふべからざる所以である。心に悪なく欲なく、善の徳に充されたものは従つて智性も發達し情動の變化も非常に活潑なるが故に、對者の腹のドン底まで透見し知悉し得るは容易なれども、若し心に欲あり、惡を包み利己心ある時は其情動は鈍り智性は衰へ、意思是狂ひ、容易に對者の心中を透見する事は出来ない。故に人に欺かるるものは皆其心に惡と欲と自利心が充満してある故である。決して愛善の徳に充され信眞の光に充ちた聖人君子は、自然界の體欲に迷ひ惡人に欺かるるものでない。要するに欲深き吾よしの人間が相應の理によつて貪欲な惡人に欺瞞され、取返しのならぬ失敗を招くものである。

さうして自分の迂愚不明から悪人に欺かれ自ら窮地に陥り、遂には其人間を仇敵の如く怨み且罵り、遂には自分の悪欲心より出でたる事を平然として口角に束ねながら、其竹篋は遂に神の御上にまで及ぼすものである。彼等は茲に至つて天道は是非か、神は果して此世にあるものか、果して神が此世に儼存するものならば、何故斯の如き悪人に苦しめられ居るのも憐れみ給はず傍觀的態度を執らるや、吾々は斯の如き悪事災難を免れ家運長久を朝夕祈り立派にお給仕をして信仰を勵んで居つたのに何の事だ。神には目がないのか、耳がないのか等と云つて、恨言を百萬陀羅竝べ立て、遂には信仰より離れ自暴自棄に陥り、益々深く地獄の底に陥落するものである。凡て此宇宙は至善至眞至愛の神が目的のために萬物を造り、相應の順序によつて人間を神の形體に作り、神業を完全に遂行せしめ給はむとして、萬物の靈長として人間を世に下し給うたものなる以上は、人間は神界の秩序整然たる順序を守り、善の爲に善をなし眞の爲に眞を盡さねばならぬのである。然るに現代は遠き神代の黄金時代は何時しか去り、白銀時代、赤銅時代、黒鐵時代と漸次墮落して、今や混沌たる泥海世界となつて了つたのである。之も

人間に神より自由を與へて、十二分の神的活動を來さしめ給はむとし給うたのを、人間が次第々々に神に背き八岐大蛇や曲神等の捕虜となり、遂に自ら神に反き神の存在をも無視するに至つた爲に、かかる暗黒無明の世界が現出したのである。併しながら物窮すれば達すると云つて至仁至愛にして無限絶對の權力を具備し給ふ大神は何時迄も之を看過し給ふべき。ここに大神は現幽神三界の大革正を遂行せむが爲に豫言者を地上に降し、或一定の猶豫期間を與へて愚昧兇惡なる人間に對し神の愛を悟らしめ、勝手氣儘の行動を改めしめむと劃策し給うたのである。之を思へば吾々人間は大慈大悲の大神の神慮を奉戴し、造次にも顛沛にも精靈を磨き改過遷善の道を擧ぐるに力めねばならぬのである。

扨て偽善者たるランチ、片彦兩人の宣傳將軍は伊吹戸主の神の計らひによつて地獄へ追ひ込めらるる事となつた。ガリヤ、ケースも亦其後につき従ふ。大きな岩の虚隙から無理に番卒に押込まれ眞暗の穴へ落ち込んだ。斜に下方に向つた隧道が屈曲甚しく通つてゐる。兩手で探らなければ何時岩壁に頭を打ちつけ、又足許に注意せなくては何時躓くか分らない暗黒道を、四人は腰を屈めながら後から

何物にか押さるる様な心地して次第々々に下つて行く。少し腰を伸ばさうとすれば頭の上の岩壁に遮られる。丁度海老腰の様になつて、何とも云はれぬ臭い香のする道を際限もなく探り探り深く深く落ち込んで行つた。少しく薄明い處へ四人は漸く着いた。そこには圓い人間の潜るだけの穴が六つばかり覗き眼鏡の様に竝んでゐる。さうして青、赤の顔面をさらした守衛が一々立つて居て、ものをも云はず四人を同じ穴へ無理やりに突込んで了つた。臭氣紛々として嘔吐を催すが如き其邊一面の不愉快さ、彼等四人は却て愉快になり腐肉の臭氣や堆糞の香を鼻蠢かし、嬉しさうに嗅ぎながらヤツと安心したものの如く息をつき又もやドンドンと以前より稍薄明き隧道を右や左に折れながら下りゆくのであつた。四人は漸くにして少しく廣い所に着いた。見れば其處に大きな川が横たはつてゐる。さうして細い長い橋が架けられてある。ここには嚴しい顔をした冥官が武装をして二十人ばかり控へて居た。冥官の一人はツと前に進み寄り、
其方はランチ將軍、片彦將軍と申して、現界に於て非常に體主靈從の行ひを致し、人獸合一の惡業を盛んにやつた人足だから、此橋を渡つて向ふへ行け。此橋

が無事に渡られたならば再び娑婆に歸してやらう。然し之が渡られぬ時は、此橋下に住んでゐる數多の怪物の爲に其方は苛まれ、最も苦しき地獄に落ちるのだ。さあ早く行け」

とせき立て睨みつける。四人は四肢五體の力何時しかスツカリ抜けて了ひ、手足がブルブルと震ひ戦き、満足に歩く事も出来なくなつてゐた。さうして此橋には罪人橋と橋詰に立札が立つてゐる。其長さは目の届かぬばかり殆ど數百町に及んでゐる。さうして橋の幅が僅かに一尺ばかり、一寸體の平均を失つたが最後、眞逆様に百尺以上の川に落ち込まねばならぬ。さうして其水の深さは地球の中心に達して居ると傳へられ、幾千萬丈の深さとも分らない。此橋には欄もなく、加ふるにヒヨヒヨとして上下左右に揺り動く、實に危険な橋である。さうして橋の下には激流が飛沫をとばし赤黒い汚穢の水が流れてゐる。さうして何とも形容の出ぬ怪物が澤山に棲み、橋の上を通行するものが過つて落ちて來るのを、大口を開けて待つて居るその恐ろしさ。一目見ても身慄ひする様である。さうして橋の上には膚を劈く如き寒風吹き、何とも云へぬ厭らしき聲、八方より聞えて來るの

であつた。

ランチは餘りの恐ろしさに身體すくみ、ビリビリ慄うて居ると冥官の一人は、
「サア、ランチ將軍、其方は現界に於ては立派なるバラモンの宣傳將軍ではなかつたか。澤山の敵味方の命をとつたる英雄豪傑でありながら、何故これしきの橋が恐ろしいのか。サア早く向ふへ渡れ」と嚴命した。ランチは震ひ聲を出して、

「イヤ、モシ冥官様、斯様な恐ろしい處は到底渡る事は出来ませぬ。何卒改心しますから、元の處へお歸し下さい。お願でムいます」

「ならぬならぬ、決して靈界に於ては汝等に斯かる責苦を與へ、之を以て快樂としてゐるのではない。大神様を初め、すべてのエンゼルも冥官も、一人なりとも天國へ上り得る身魂の來り得る事を待つてゐるのだ。否唯一の歡喜としてゐるのだ。汝自らの罪業によつて汝自ら此罪人橋を渡るべく準備致し、又汝永久の住家を向ふの地獄に作りおいた以上は、汝の身魂は、其處まで行かねばならぬ。可愛さうなれど吾々は救ふ事が出来ぬ。汝は神の愛を信じて自ら天國を開くべき處を、

自然界の欲に精靈を汚し、斯くも淺猿しき身の上となつたのだから、自繩自縛と諦めて行つてくれ」

と流石の冥官も憐愍の情に堪へかねてか、兩眼より涙をポロポロと流してゐる。

片彦「モシ冥官様、もはや斯うなる上は自ら生んだ鬼が自らを責めるのですから、如何とも致し方がムいませぬ。然しながら其地獄は随分辛い處でムいませうな」

「地獄にも色々あるが先づ大別して十八地獄と分つてゐる。さうして其地獄にも其罪業によつて大小輕重の區別がある。地獄の團體も今日の處にては幾萬を以て數へられるであらう。其中重なる地獄は、吊釣地獄、幽枉地獄、火孔地獄、郭都地獄、拔舌地獄、剥皮地獄、磨摧地獄、碓搗地獄、車崩地獄、寒氷地獄、脱売地獄、抽腸地獄、油鍋地獄、暗黒地獄、刀山地獄、血池地獄、阿鼻地獄、秤杆地獄」と云つて、之が大體の地獄であり、其中で罪業の大小輕重によつてそれぞれの階段が出来てゐる。お前達も確りして、地獄に行つたら随分惡の強い奴だから地獄の統治者となるかも知れない。それを樂みに行つたがよからう」

「如何しても吾々は地獄へ參らねばなりませんか」

「お前達四人の靈衣を見れば尚多少臙氣に圓相が残つてゐる。未だ冥土へ來るべき命數でないが、併しながら伊吹戸主の神様より御命令があつたによつて、如何しても此處を通さにやならぬ。四人が四人ながら、まだ娑婆臭い亡者が來るとは不思議千萬だ」

と首を傾け思案顔をしてゐる。

かかる所へ骨と皮になつた我利々々亡者の一隊、雑魚の骨を打ち開けた様にウヨウヨと幾百千とも數知れず現はれ來り、ランチ、片彦兩將軍に向ひ、得も云はれぬ厭らしき聲を振り搾り、前後左右より武者振りつく其厭らしさ。ガリヤ、ケースも亦相當に厭らしき怪物にとりまかれ、悲鳴をあげて泣き叫んでゐる。

此時何處ともなく天の數歌が幽かに聞えて來た。見る見るうちに我利々々亡者は煙の如く消えて了つた。さうして數多の嚴しき冥官の姿は一人減り二人減り、おひおひと其數を減るのであつた。宣傳歌の聲おひおひ近づいたと見えて、だんだん高く聞えて來た。非常に薄暗かつた四邊は、薄紙を剥いだ様に次第々と明るくなつて來た。

(大正一二・一・一三 舊一・一・二七 北村隆光録)

第三篇 愛善信眞

第一〇章 天國の富(一二六四)

現界げんかいすなは即ち自然界しぜんかいの萬物ばんぶつと靈界れいかいの萬物ばんぶつとの間あひだには、惟神かむながらの順序じゆんじよによりて相應さうおうなるものがある。又人間またにんげんの萬事ばんじと天界てんかいの萬物ばんぶつとの間あひだに動かすべからざる理法りはふがあり、又其連結またそのれんけつによつて相應さうおうなるものがある。そして人間にんげんは又天人またてんにんの有いうする所ところを總すべて有いうすると共に、其有そのいうせざる所ところをも亦有またいうするものである。人間にんげんはその内分ないぶんより見て靈界れいかいに居をるものであるが、それと同時に、外分ぐわいぶんより見て、人間にんげんは自然界しぜんかいに居をるので

ある。人の自然的即ち外的記憶に屬するものを外分と稱し、想念と、これよりする想像とに關する一切の事物を云ふのである。約言すれば、人間の知識や學問等より來る悅樂及び快感の總て世間的趣味を帶ぶるもの、又肉體の感官に屬する諸々の快感及び感覺、言語、動作を合せて之を人間の外分となすのである。是等の外分は何れも大神より來る神的即ち靈的内流が止まる所の終極點に於ける事物である。何故なれば、神的内流なるものは決して中途に止まるものでなく、必ずや其窮極の所まで進行するからである。この神的順序の窮極する所は所謂萬物の靈長、神の生宮、天地經綸の主宰者、天人の養成所たるべき人間なのである。故に人間は總て神様の根底となり、基礎となるべき事を知るべきである。又神格の内流が通過する中間は高天原にして、其窮極する所は即ち人間に存する。故に、又この連結中に入らないものは何物も存在する事を得ないのである。故に天界と人類と和合し連結するや、兩々相倚りて繼續存在するものなる事を明め得るのである。故に天界を離れたる人間は鍵のなき鎖の如く、又人類を離れたる天界は基礎なき家の如くにして、雙方相和合せなくてはならないものである。

斯かくの如ごとき尊たふとき人にんげん間が、其その内ない分ぶんを神かみに背そむけて、高たか天あま原はらとの連れん絡らくを斷だん絶ぜつし、却かへつて之これを自しぜん然かい界がいと自じ己ことに向むけて、自じ己こを愛あいし、世せ間けんを愛あいし、其その外ぐわい分ぶんのみに向むかひたるに
より、從したがつて人にんげん間は其その身みを退しりぞけて再ふたび高たか天あま原はらの根こん底ていとなり、基き礎そとなるを得えざら
しめたるによつて、大おほ神かみは是ぜ非ひなく、茲ここに豫よ言げん者しやなる媒ばい介かい天てん人にんを設まうけて之これを地ち上じやう
に下くだし、其その神しん人じんをもつて天てん界かいの根こん底てい及および基き礎そとなし、又また之これによつて天てん界かいと人にんげん間と
を和わ合がふせしめ、地ち上じやうをして天てん國こく同どう様やうの國こく土どとなさしめ給たまふべく、甚じん深しんなる經けい綸りんを
行おこなはせたまたうたのである。この御ご經けい綸りんが完くわん成せいした曉あかつきを稱しょうして、松まつの代よ、三さん口くの
世よ、又または天てん國こくの世よと云いふのである。そして嚴いづの御み靈たま、瑞みづの御み靈たまの經けい緯ゐの豫よ言げん者しやの
手てを通つうじ口くちを通つうじて聖せい言げんを傳でん達たつし、完くわん全ぜんなる天てん地ち合が體たいの國こく土どを完くわん成せいせしめむとし
たまうたのである。大おほ本もと開かい祖その神しん諭ゆに「天てんも地ちも一ひとつに丸まるめて、神しん國こくの世よに致いたす
ぞよ。三さん千せん世せい界かい一いち度どに開ひらく梅うめの花はな、須しゆ彌み仙せん山ざんに腰こしを掛かけ良うしろの金こん神じん守まもるぞよ。この
大おほ本もとは天てん地ちの大おほ橋はし、世せ界かいの人民じんは此この橋はしを渡わたりて來こねば、誠まことのお蔭かげは分わからぬぞよ」
と平へい易い簡かん明めいに示しめされて居ゐるのである。されど現げん代だいの人にんげん間は却かへつてかかると平へい易い簡かん明めいな
る聖せい言げんには耳みみを藉かさず、不ふ可か解かいなる難なん書しよを漁あさり、是これを半はん可か通つう的てきに誤ご解かいして其その知ち識しき

を誇らむとするのは實に淺ましいものである。

治國別は龍公と共に言靈別命の化相身なる五三公に案内され、珍彦の館を後にして中間天國の各團體を訪問する事となつた。五三公は得も云はれぬ麗しき樹木の秩序よく間隔を隔てて點綴せる、金砂銀砂の布きつめたる如き平坦路をいそいそとして進んで行く。道の兩方には、天國の狹田、長田、高田、窪田が展開し、得も云はれぬ涼風にそよぐ稲葉の音はサヤサヤと心地よく耳に響いて来る。天人の男女は得も云はれぬ麗しき面貌をしながら、瑪瑙の如く透き通つた脛を現はし、水田に入つて草取をしながら勇ましき聲に草取歌を歌つて居る。太陽は餘り高からず頭上に輝きたれども、自然界の如く焦げつくやうな暑さもなく、實に入り心地のよい温泉に入つたやうな陽氣である。さうして此天國には決して冬がない、永久に草木繁茂し、落葉樹の如きは少しも見當らない。田面は金銀色の水にて満たされ、稲葉は青く風に翻る度毎に金銀の波を打たせ、何とも筆舌の盡し難き光景である。五三公は途中に立ち止まり、二人を顧みて微笑みながら、得も云はれぬ喜びの色を湛へて、

「はるくにわけさま、御覽なさいませ、天國にも矢張り農工商の事業が営まれて居ます。さうしてあの通り各人は一團となつて其業を樂しみ、歡喜の生活を送つて居ります。實に見るも愉快な光景ぢやありませんか」

「成程、實に各人己を忘れ一齊に業を樂しむ光景は、到底現界に於て夢想だも出ない有様で△いますな。さうして矢張彼の天人共は各自に土地を所有して居るので△いますか」

「イエイエ、土地は全部團體の公有です。地上の世界の如く大地主、自作農又は小作農などの忌はしき制度は△いませぬ、皆一切平等に何事も御神業と喜んで額に汗をし、神様のために活動して居るのです。さうして事業に興味が出来て、誰ひとり不服を稱ふる者もなく、甲の心は乙の心、乙の心は甲の心、各人皆心を合せ、何事も皆御神業と信じ、あの通り愉快に立ち働いて居るのです」

「さうすれば天國に於ては貧富の區別はなく、所謂社會主義的制度が行はれて居るのですか」

「天國にも貧富の區別があります。同じ團體の中にも富者も貧者もあります。併

しながら、貧富と事業とは別個のものです」

「働きによつて其報酬を得るに非ざれば、貧富の區別がつく筈がないぢやありませんか。同じやうに働き、同じ物を分配して生活を續ける天人に、どうして又貧富の區別がつくのでせうか」

「現界に於ては、總て體主靈從が法則のやうになつて居ます。それ故優れたもの、よく働くものが多く報酬を得るのは自然界のやり方です。天國に於ては總てが神様のものであり、總ての事業は神様にさして頂くと云ふ考へを何れの天人も持つて居ります。それ故天國に於ては貧富の區別があつても、貧者は決して富者を恨みませぬ。何人も神様のお蔭によつて働かして頂くのだ、神様の御神格によつて生かして頂くのだと、日々感謝の生活を送らして頂くのですから、貧富などを天人は念頭に置きませぬ。そして、貧富は皆神様の賜ふ所で、天人が各自の努力によつて獲得したものではありません。何れも現實界にある時に盡した善徳の如何によりて、天國へ來ても矢張り貧富が惟神的につくのです。貧者は富者を見て之を模範とし、善徳を積む事のみを考へて居ります。天國に於ける貧富は一厘一毛

の錯誤もなく、不公平もありません。其徳相應に神から授けらるるものです」

「天國の富者とは、現界に於て如何なる事を致したもので、いませうか」

「天國團體の最も富めるものは、現界にある中によく神を理解し、愛のために愛をなし、善のために善をなし、眞の爲に眞を行ひ、自利心を捨て、さうして神の國の建設の爲に心を盡し身を盡し、忠實なる神の下僕となり、且又現界に於て充分に活動をし、其餘財を教會の爲に捧げ、神の榮と道の擴張にのみ心身を傾注したる善徳者が所謂天國の富者であります。約り現界に於て寶を天國の庫に積んで置いた人達であります。さうして中位の富者は、自分の知己や朋友の危難を救ひ、又社會公共の救済の爲に財を散じ、隱徳を積んだ人間が、天國に來つて大神様より相應の財産を賜はり安樂に生活を續けて居るのです。そして天國で頂いた財産は總て神様から賜はつたものですから、地上の世界の如く自由に之を他の天人に施す事は出来ませぬ。ただ其財産を以て神様の祭典の費用に當てたり、公休日に天人の團體を吾家に招き、自費を投じて馳走を拵へ大勢と共に楽しむので、いませぬ、それ故に天國の富者は衆人尊敬の的となつて居ります」

成程、實に平和なものですな、本當に理想的に社會が造られてありますなア
龍公は「しやしや」り出で、

モシ五三公さま、もしも私が天國へ靈肉脱離の後、上る事を得ましたならば、
定めて貧乏人でせうな」

ア、さうでせう、唯今直に天國の住民となられるやうな事があれば、貴方はや
はり第三天國の極貧者でせう。併し再び現界に歸り、無形の寶と云ふ善の寶を十
分お積みになれば、天國の寶となり、名譽と光榮の生涯を永遠に送る事が出来ま
せう」

それでは聖言に、貧しきものは幸なるかな、富めるものの天國に到るは針の穴
を駱駝の通ふよりも難し、と云ふぢやありませんか」

貧しきものは常に心驕らず、神の教に頼り、神の救ひを求め、尊き聖言が比較
的耳に入り易うムいますが、地上に於て何不自由なく財産のあるものは、知らず
知らずに神の恩寵を忘れ、自己愛に流れ易いものですから、其財産が汚穢となり
暗黒となり或は鬼となつて地獄へ落し行くものです。若しも富者にして神の爲に

盡し、又社會のために隱徳を積むならば、天國に上り得るの便利は貧者よりも多
 いかも知れませぬが、世の中はようしたもので富者の天國に来るものは、聖言に
 示されたる如く稀なものです。其財産を悪用して人の利益を壟斷し、或は邪惡を
 遂行し、淫欲に耽り、身心を汚し損ひ、遂に靈的不具者となつて大抵地獄に落つ
 るものです。假令天國に上り得るにしても、天國に於ける極貧者です。』
 『治國別さまが、今天國の住民となられましたら何んなものでせう、相當の富者
 になられませうかなア』

五三『ハ、ハ、ハ、ハ』
 と笑つて答へず。

『ヤア先生も怪しいぞ、矢張これから天國の寶をお積にならねばなりませんまい』
 五三『サア是から靈陽山の名所に御案内致しませう』

と早くも歩を起した。二人は後に従ひ、麗しき原野を縫うて、樹木點綴せる天國
 街道を歡喜に満たされながら進んで往く。五三公は靈陽山の麓に辿りついた。

『此處が第二天國の有名なる公園地でムいます。今日は公休日でムいませぬから、

餘り天人の姿も見えませぬが、これ御覽なさいませ、あの山の景色と云ひ、岩石の配置、樹木の色、花の香、到底地上の世界では見られない景色でムいませう』

治國『ハイ、何だかぼんやりとして、私の目には入りませぬ』

被面布をお被りなさい、さうすればハツキリと分るでせう』

『ハイ』

と答へて治國別は直に被面布を被つた。龍公も同じく被面布に面を包んだ。

治國『何故、吾々の目には被面布がなくては、此麗しき景色が目に入らないのでせうか』

『失禮ながら、天國の智慧に疎きものは此樹木花卉が目に入らないのです。總て神の智慧に居るもの前には、各種各様の樹木花卉にて満ちたる樂園の現はれるものです。是等の樹木は最も麗しき配列をなし、枝々交叉して得も云はれぬ装ひをなし、薫香を送るものです。總て天國は想念の國土でありますから、貴方に神智の智慧が満つれば、直ちに天國の花園が眼前に展開致します。園亭あり、行門あり、行徑あり、行く道の美麗なる事、言語の盡す所ではありません。故に神の智

慧ゑに居をるものは、斯かくの如ごとき樂園らくえんの中なかを漫歩まんぼしながら、思おもひ思おもひに花はなを摘つみ花鬢はなかつらを作つくりなどして、樂たのしく嬉うれしく暮くらし得うるものです」

成程なるほど、此樂園このらくえんには被面布ひめんぶを透とほして眺ながめますれば、種々雜多しゅじゅざつたの樹木じゅもく、花卉くわきの吾々われわれ地上ちじやうに嘗かつて見みざるものが澤山たくさんございますな」

是等これらの麗うるはしき樹木じゅもくは正ただしき神かみの知識ちしきに居をるものの愛あいの徳とく如何いかんによりて花はなを開ひらき實みを結むすぶものです。嚴いつの御靈みたまの神諭しんゆにも「一度いちどに開ひらく梅うめの花はな、開ひらいて散ちりて實みを

結むすび、スの種たねを養やしなふ」とあるでせう。開ひらく梅うめの花はなとは、智ち慧ゑと證しやう覺かくとに相さう應おうする情態じやうたいの謂いひであります。斯かくなる時は、天國てんこくの園亭えんていや樂園らくえんに實みを結むすぶ樹木じゅもく及び花卉くわき

は神かみの供そなへ物ものとして、又また天人てんにん各自かくじの歡喜くわんきの種たねとして各自かくじの徳とくによつて現前げんぜんするものです。高天原たかあまはらには斯かくの如ごとき樂園らくえんのある事ことは聞きいては居をりますが、唯ただ是これを實じつ際さいに

知しる者ものは、唯ただ神かみよりする愛善あいぜんの徳とくに居をる者もの及び自然界しぜんかいの光ひかりと其偽そのいつはりによつて自じ己この胸中きようちゆうにある所ところの天界てんかいの光ひかりを亡ほろぼさなかつた者ものに限かぎつて居をります。故ゆゑに高天原たかあまはら

に對たいして目未めいまだ見みえざるもの、耳未みいまだ聞きえざるものは、現げんに其場そのばに近ちかづき居をると雖いへども、此光景このくわうけいを見みる事ことも亦また斯かくの如ごとき麗うるはしき音樂おんがくの聲こゑを聞きく事ことも出で來きませぬ」

種々の御教諭、いや有難うございました。これで吾々も大變に神様の御恵を頂き、
どうやら被面布を取つてもこの花園の光景が見えるやうになつて参りました。嗚
呼神様、言靈別命様の御化身なる五三公様の口を通して、天國の福音をお示し下
さつた其御恵を有難く感謝致します。ア、惟神靈幸倍坐世」
(大正一二・一・一三 舊一一・一一・二七 加藤明子録)

第一章 靈陽山(一一二六五)

高天原に發生せる樹木は、佛説にある如く金、銀、瑪瑙、碑磔、瑠璃、玻璃、
水晶等の七寶を以て飾られたるが如く其幹、枝、葉、花、果實に至るまで、實に
美はしきこと口舌の能く盡し得る所ではない。神社や殿堂や其他の住宅に於ても、
内部に入つて見れば、愛善の徳と信眞の光明に相應するによつて、これ亦驚く許
りの壯觀であり美麗である。大神のしろしめす天國團體を組織せる天人は大抵高

い所に住居を占めてゐる。其場所は自然界の地上を抜く山嶽の頂上に相似して居る。又大神の靈國團體を造れる天人は、少し低い所に住居を定めて居る。恰も丘陵の様である。されど高天原の最も低き所に住居する天人は、岩石に似たる絶景の場所に住居を構へてゐる。而して之等の事物は凡て愛と信との相應の理によつて存在するものである。

大神の天國は、凡て想念の國土なるを以て、内邊の事は高き所に、外邊の事はすべて低い所に相應するものである。故に高い所を以て天國的愛善を表明し、低い所を以て靈國的愛善を現はし、岩石を以て信眞を現はすのである。岩石なるものは萬世不易の性質を有し、信眞に相應するが故である。併しながら靈國の團體は低き所に在りとはいへ、矢張地上を抜く丘陵の上に設けられてある。丁度綾の聖地に於ける本宮山の如きはその好適例である。靈國は何故天國の團體よりも稍低き所に居住するかと云へば、凡て靈國の天人は信の徳を主とし、愛の徳を従として居る。所謂信主愛従の情態なるが故に、此國土の天人は智慧と證覺を研き、宇宙の眞理を悟り、次で神の愛を能く其身に體し、天國の宣傳使として各團

體に派遣さるるもの多きを以て、最高ならず最低ならず、殆ど中間の場所に其位
置を占むる事になつてゐるのである。故に世界の先祖たる大國常立尊は海拔二
百フィート内外の綾の聖地に現はれ給ふにも拘はらず、木花咲耶姫命は海拔一萬
三千尺の天教山に其天國的中樞を定め給ふも、此理によるのである。併しながら
木花姫命は靈國の命を受け、天國は云ふに及ばず、中有界、現實界及び地獄界ま
で神の愛を均霑せしむべき其聖職につかはせ給ひ、且神人和合の御役目に當らせ
給ふを以て、假令天國の團體にましますと雖も時々化相を以て精靈を充たし、或
は直接化相して萬民を教へ導き給ふのである。

又天人の中には團體的に生活を營まないのがある。即ち家々別々に住居を構へ
てゐるのは、丁度前に述べた珍彦館の如きは其例である。而して此等の天人は其
團體の中心地點及大なるものに至つては高天原の中央をトして住居を構へてゐる。
何故なれば彼等は天人中に於ても、最も愛と信とによる智慧證覺の他に優れて、
光明赫灼として輝き渡り、惟神的に中心人物たるが故に、大神の攝理によりて、
其徳の厚きと相應の度の高きによるが故である。而して高天原は想念の世界なる

が故に、其延長は善の情態を表はし、其廣さは眞の情態を表はし、其高さは善と眞との兩方面を度合の上より見て區別することを表はすものである。又靈界に於ては先に述べた通り、時間空間などの觀念は少しもない、只情動の變化あるのみである。而して其想念は、時間空間を超越し、無限に其相應の度によつて延長し擴大し且高まるものである。

治國別、龍公二人が浮木の陣營に於て片彦將軍等の奸計に陥り、暗黒なる深き陥穽に墜落し、茲に人事不省となり、其間中有界及最下層の天國より最高の天國、靈國を巡覽したる期間に餘程長い旅行の様であるが、現界の時間にすれば、殆ど二時間以内の閒失神状態に居つたのである。されど想念の延長によりて、現界人の一ヶ月以上もかかつて巡歴した様な長時間の巡覽をなしたのである。而して情動の變化が多ければ多い程、天國に於ては延長さるるものである。

治國別、龍公は言靈別命の化相神なる五三公に導かれ、天國の消息を詳細に教へられながら、靈陽山の殆ど中央まで登りつめた。此時五三公は目も眩き許りの小さき光團となつて、驀地に東を指して、空中に線光を描きながら、何處ともな

く姿を隠して了つた。二人は靈陽山の頂上に立つて、四方の景色を瞰下しながら、天國の莊嚴をうつつになつて褒め稱へてゐた。さうして五三公の此場に姿を隠したことは少しも氣がつかず、

「モシ先生、此處は靈陽山とか聞きました、實にいい所ですなア、最高天國ではありますまいか。四邊の樹木と云ひ、山容と云ひ、如何なる畫伯の手にも到底描くことは出来ずまい。どうかして早く現界の御用を了へ、斯様な所に樂しき生涯を送りたいものですなア」

「いかに結構な所だ。現界人が美術だとか、耽美生活だとか、文化生活だとか、いろいろと騒いでゐるが、此光景に比ぶれば、其質に於て、其量に於て、其美に於て、到底比較にならないやうだ。そして何とも言へぬ吾心靈の爽快さ、ホンに斯様な結構な所があるとは、夢想だにもしえなかつた所だ。此治國別は第一天國ともいふべき齋苑の館に永らく仕へながら、未だ愛信の全からざりし爲、瑞の御靈の大神のまします地上の天國が、さまで立派だとは思はなかつた。矢張り如何なる莊嚴麗美と雖も、心の眼開けざる時は到底駄目だ。恰も豚に眞珠を與へられた

やうなものだ。これを思へば吾々はあく迄も神に賦與されたる吾精靈を研き浄め、大神の神格に和合歸一せなくてはならない。ア、實に五三公様の口を通して、かやうな至喜と至樂の境遇に吾々を導き、無限の歡喜に浴せしめ給ひしことを、有難く大神様の御前に感謝致します。ア、惟神靈幸倍坐世かむながらたまちはへませと云ひながら拍手をうち、天津祝詞を奏上し了つて、天の數歌を歌ひ、あたりを見れば、豈計らむや、五三公の姿は眼界の届く所には其片影だにも認め得なかつた。治國別は驚いて、

「ヤア龍公さま、五三公さまは何處へ行かれたのだらう、今迄月の如く輝いてゐられたあの靈姿を拜めなくなつたぢやないか」

「成程、コリヤ大變だ、何う致しますせう」

「どうしようと云つても、仕方がない、之も神様の御試しだらうよ。四邊の光景に憧憬の餘り、五三公様の御親切な案内振を念頭より取除いてみた。凡て天國は相應と和合の國土だ。愛と信によつて和合し、結合するものである。即ち想念によつて尊き神人と共にゐることを得たのだ。吾々が情動の變轉によつて、吾心

の中より五三公様を逃がして了つたのだ。ア、惟神靈幸倍坐世と又もや合掌する。

成程、さうでムいましたなア、私も餘り嬉しいので、五三公様の御導きによつて未だ中有界に彷徨ふべき身が、かかる尊き天國まで導かれながら、うつかりと自分が勝手に上つて来たやうな氣分になつて、無性矢鱈に天國を吾物のやうに思ひましたのが誤りでムいます。先生、何と嚴の御靈の神諭にあります通り、高天原は結構な所の恐ろしい所でムいますな。油斷をすれば忽ち天國が變じて地獄となり、明は變じて暗となり、神は化して鬼となるとお示しの通り、實に戒慎すべきは心の持方でムいますなア

ハイ左様、吾々は最早斯うなる以上は、再び中有界へ歸り、現界へ復歸すべき道も分らない、又どこをどう歩いたらいいか、方角さへも判然せない、天國の迷兒になつたやうなものだ。ア、心の油斷ほど恐ろしいものはない。只大神様にお詫をなし、救ひをお願いするより道はなからうと話す折しも、足下の土をムクムクと土鼠のやうに膨らせながら、ポカンと

頭をつき出したのは、片彦將軍であつた。二人は驚いて、無言の儘よくよく見れば、擬ふ方なき將軍は泥酔になつて、全身を山上に現はし、

「ワハツハ、」

と山も崩るるばかり高笑ひした。

治國「ヤア其方は河鹿峠にてお目にかかつた片彦將軍ではムらぬか」

「ワハツハ、、、其方は盲宣傳使の治國別であらう。そしてマ一匹の小童武者

は某が奴、暫く秘書を命じておいた龍公であらう。悪虐無道の素盞鳴尊に諛ひへ

つらひ、大自在天大國彦命の宣傳使兼征討將軍の片彦に向つて刃向ひを致した極

重悪人奴、能くもマア惡魔にたばかられ、斯様な處へ彷徨つて來よつたなア。天

下一品の大馬鹿者奴、某が計略によつて、八岐大蛇や金毛九尾の惡狐を使ひ、汝

を、天國とみせかけ、此處まで連れて來たのは此方の計略だ、どうだ、大自在天

の神力には恐れ入つたか、アハツハ、、ハア、何とマア不思議さうな顔を致し

てをるワイ、イヒ、、、オイ龍公、其方も其方だ。主人に反いた大逆無道の癡

者、どうだ、此靈陽山と見せかけたのはバラモン教の靈場、大雲山の頂邊でムる

ぞ。あれ、あの聲を聞け、雲霞の如き大軍を以て、當山を十重二十重に取巻きあれば、いかに拔山蓋世の智勇あるとも、到底逃るることは出来まい、治國別、返答はどうだ」

治國別は、

「ハテ心得ぬ」

と云つたきり、雙手を組んで暫し想念をたぐつてゐる。龍公も亦無言の儘、俯いてゐる。

「アツハ、ハ、ハ、エツへ、ハ、ハ、如何に治國別、モウ斯うなる以上は何程考へても後へは引かぬ。サアどうだ。キツパリと素盞鳴尊の惡神を棄てて、大自在天様に歸順致すか」

「サアそれは……」

「早く返答致せ。返答なきは不承知と申すのか。アイヤ家來の者共、治國別、龍公の兩人をふん縛り、勦り殺しに致せ」

龍公「將軍様、暫くお待ち下さいませ」

「アハ、ハ、ハ、往生致したか。ヨシ、然らば此處に此通り黄金を以て作りたる素盞鳴尊の像がある。治國別、龍公共に命が助かりたくば、此像に向つて小便をひっかけ、其上此岩石を以て木端御塵に打碎き、自在天様に歸順の誠を表はせ。否むに於ては、其方が身體は木端微塵、地獄に突き墜し、無限の責苦を加へるが、どうだ」

治國別は初めて顔をあげ、大口あけて高笑ひ、

「アハ、ハ、ハ、拙者は嚴の御靈、瑞の御靈の大神を信仰致す誠の宣傳使だ、假令汝如き惡神に脅迫され、或は責め殺さるることありとも、吾心靈は萬劫末代、大神に信従するのみだ。治國別はこれ以外に汝に答ふことはない、どうなりと勝手に致したがよからう」

「勝手に致せと申さいでも、此方が制敗を致してくれる。併しながら龍公、其方は憎くき奴なれど、一旦某が部下となつたよしみによつて制敗は許して遣はず。其代りに治國別をこの金剛杖を以て打ちのめせ、さうすれば汝の誠が分るであらう。何うぢや、治國別を打ちのめす勇氣はないか。矢張其方は二心を持つてゐる」

のか。返答致せし

と唖鳴りつけた。其聲に不思議にも、あたりの山嶽はガタガタと震動し始め

た。龍公は少時雙手を組み思案にくれてゐたが、忽ち威丈高になり、

「コリヤ、惡神の張本片彦奴、汝は拙者の一時主人に間違ひはない。其主人に離

れたるのは汝が行動天に背き、善に離れたるが故だ。假令拙者が汝の爲に一寸刻

みか五分だめしに遇はされようとも、恩情深き治國別様の御身に、何うして一指

をそむることが出来ようか。ここを何と心得て居る、第二天國の神聖な場所だ、

大雲山などとは思ひもよらぬ、詐りを申すな。天國には虚偽と迫害と惡はない筈、

其方は要するに天國の魔であらう」

と云ひながら……「嚴の御靈、瑞の御靈、守り給へ幸はへ給へ」と拍手し、音

吐朗々と怖めず臆せず神言を奏上し始めた。治國別も龍公と共に神言をいと落着

いた調子で奏上し始めた。片彦は何時の間にやら數多の部下を集め、金棒をふり

上げ、只一打に兩人を粉碎せんず勢を示してゐる。治國別、龍公兩人は膽力を据

ゑ、聲調ゆるやかに騒がず焦らず、神言を奏上し終り、「惟神靈幸倍坐世」と唱

ふるや否や、今迄ここに立つてみた片彦他一同の姿は煙の如く消え失せ、四邊に芳香薫じ、嚙喰たる音楽さへ頻りに聞え來るのであつた。

「アハ、、、、猪口才千萬な、バラモン教を守護致す八岐大蛇奴、畏くもかかる天國迄化けて來やがつて、尊き神言に面喰ひ、屁のやうに消え散るとは、さてもさても神様の御神力は尊いものだ。ア、有難うムいます。惟神靈幸倍坐世」

龍公さま、ここは第二天國、しかも靈陽山の頂だ。八岐大蛇の來るべき道理がない、大方これは神様の御試しだつたらう。私も一度は惡魔の襲來かと考へてみたが、よくよく思ひ直せば、かかる天國に惡魔の來るべき理由がない。若しも彼果して惡魔なりとせば、吾等は天國と思ひ、慢心して地獄に墜ちてみたのであらう……と考へてみたが、忽ち心中の天海開けて神様の御神格の内流に浴し、矢張第二天國なることを悟り、且片彦と見えしは尊きエンゼルの、吾等が心を試させ給ふ御所爲と信ずるより外に途はない、必ず必ず惡魔などと、夢にも思つてはなりませぬぞや」

「仰せ御尤もでムいます。サア先生、どうでせう、これから靈陽山を下つて、又

天國の團體を修業さして頂きませうか」

かくいふ所へ、忽然として現はれ給うたのは、三十恰好の美はしき容貌をもてる一柱の神人であつた。神人は治國別の側近く寄り、其手を固く握り、

治國別さま、第二天國の團體は無數無邊にありますが、貴方は第二天國の試験に合格致しました。又龍公さまも其通り、餘程證覺を得られたやうです。之から

拙者が最奥第一の天國及び靈國を御案内致しませう。併しながら此第二天國に比べれば、最高天國の光明は殆ど萬倍に匹敵するものです。而して其天國に住む諸

天人は、善と眞とより來る智慧證覺に充ち、容易に面を向くことが出来ませぬ。其團體の天人に會ふ時は忽ち眼くらみ、言句澁り、頭は痛み、胸は塞がり、四肢

五體萎縮して非常な苦痛でムいますが、貴方等兩人は天國の試験に合格されまして、其被面布を以て最奥天國の巡覽的修業をなさいませ。拙者が案内を致し

ませう」

と先に立ち、雲を踏み分けてのぼり行く。二人は一生懸命に神言や天津祝詞を交る交る奏上しながら、フワリフワリと雲の橋を渡つてのぼり行く。此神人は言靈

別命けのみことであつた。あゝ惟神かむながらたま靈ちはへ幸ま倍せ坐せ世せ。

(大正一二・一・一三 舊一一・一一・二七 松村眞澄録)

第一二章 西王母せいわうぼ (一一二六六)

高天原たかあまはらの總統神そうとうしんすなは即ち大主宰神だいしゆさいしんは大國常立尊おほくにとこたちのみことである。又の御名みなは天之御中主大神あめのみなかぬしのおほかみと稱となへ奉たてまつり、其靈德そのれいとくの完全くわんぜんに發揮はつきし給たまふ御狀態ごじやうたいを稱しようして天照皇大神あまてらすすめおほかみと稱となへ奉たてまつるのである。そして此大神このおほかみさま様は嚴靈いつのみたまと申まをし奉たてまつる。嚴いつと云いふ意義いぎは至嚴しげん至貴しき至尊しそんにして過去くわこ、現在げんざい、未來みらいに一貫いつくわんし、無限むげん絶對ぜつたい無始むし無終むしうに坐まします神かみの意義いぎである。さうして愛あいと信しんとの源泉げんせんと現あれます至聖しせい至高しかうの御神格ごしんかくである。さうして或時あるときには瑞靈みづのみたまと現あらはれ現界げんかい、幽界いうかい、神界しんかいの三方面さんほうめんに出没しゆつぽつして一切いっさい萬有ばんいうに永遠えいゑんの生命せいめいを與あたへ歡喜くわんき悅えつ樂らくを下くだし給たまふ神様かみさまである。瑞みづと云いふ意義いぎは水々みづみづしと云いふ事ことであつて至善しぜん至美しび至愛しあい至眞ししんに坐ましまし且圓かつゑん滿まん具足ぐそくの大光明だいくわうみやうと云いふ事ことになる。又靈力體またれいりよくたいの三大元さんだいげんに關聯くわんれんして

守護し給ふ故に三の御魂と稱へ奉り、或は現界、幽界（地獄界）、神界の三界を
守り給ふが故に三の御魂とも稱へ奉るのである。要するに神は宇宙に只一柱坐ま
すのみなれども、其御神格の情動によつて萬神と化現し給ふものである。さうし
て嚴靈は經の御靈と申し上げ神格の本體とならせ給ひ、瑞靈は實地の活動力に在
しまして御神格の目的即ち用を爲し給ふべく現はれ給うたのである。故に言靈學
上之を豐國主尊と申し奉り又神素盞鳴尊とも稱へ奉るのである。さうして嚴靈は
高天原の太陽と現はれ給ひ、瑞靈は高天原の月と現はれ給ふ。故にミロクの大
を月の大神と申上ぐるのである。ミロクと云ふ意味は至仁至愛の意である。さう
して其仁愛と信眞によつて、宇宙の改造に直接當らせ給ふ故に、彌勒と漢字に書
いて彌々革むる力とあるのを見て、此神の御神業の如何なるかを知る事を得ら
るのである。善惡不二、正邪一如と云ふ如きも、自然界の法則を基礎としては
到底其眞相は分るものでない。善惡不二、正邪一如の言葉は自然界の人間が云ふ
べき資格はない、只神の大慈大悲の御目より見給ひて仰せられる言葉であつて、
神は善惡正邪の區別に依つて其大愛に厚き薄きの區別なき意味を善惡不二、正邪

一如と仰せらるるのである。併しながら自然界の事物に就ても亦善惡混淆し美醜互に交はつて一切の萬物が成育し、一切の順序が成立つのである。故に人は靈主體従と云つて自然界に身を置くとともに、凡て何事も神を先にし、愛の善と信の智を主として世に立たねばならないのである。然るに靈的事物の何たるを見る事の出来ない様になつた現代人は、如何しても不可見の靈界を徹底的に信じ得ず、稍靈的觀念を有するものと雖も、要するに暗中摸索の域を脱する事が出来ない。それ故に人は何うしても體を重んじ、靈を輕んじ物質的欲念に驅られ易く地獄に落ち易きものである。かかる現界の不備缺點を補はむが爲に大神は自ら地に降り其人格に依つて精靈を充し、豫言者に向つて地上の蒼生に天界の福音を宣傳し給ふに至つたのである。凡て人間が現實界に生れて來たのは、云はば天人の胞衣の如きものである。さうして又天人の養成器となり苗代となり又靈子の温鳥となり、天人の苗を育つる農夫ともなり得ると共に、人間は天人其ものであり又在天國の天人は人間が善徳の發達したものである。さうして天人は愛善と信眞に依つて永遠の生命を保持し得るものである。故に人間は現界の生を終へ天國に復活し、現界

人と相似せる生涯を永遠に送り、天國の圓滿をして益々圓滿ならしむべく活動せしむる爲に、大神の目的に依つて造りなされたものである。故に高原に於ける天國及び靈國の天人は一人として人間より來らないものはない。大神様を除く外、一個の天人たりとも天國に於て生れたものはないのである。必ず神格の内流は終極點たる人間の肉體に來り、此處に留まつて其靈性を發達せしめ、而して後天國へ復活し、茲に初めて天國各團體を構成するに至るものである。故に人は天地經綸の司宰者と云ひ、又天地の花と云ひ、神の生宮と稱ふる所以である。愚昧なる古今の宗教家や傳教者は概ね此理を辨へず、天人と云へば、元より天國に在つて特別の神の恩恵に依つて天國に生れたるものの如く考へ、又地獄にある惡鬼どもは元より地獄に發生せしものの如く考へ、其地獄の邪鬼が人間の墮落したる靈魂を制御し或は苦しむるものとのみ考へてゐたのである。之は大なる誤解であつて、數多の人間を迷はず事、實に大なりと云ふべしである。茲に於て神は時機を考へ、彌勒を世に降し、全天界の一切を其腹中に胎藏せしめ、之を地上の萬民に諭し、天國の福音を完全に詳細に示させ給ふ仁慈の御代が到來したのである。されど大

神は豫言者の想念中に入り給ひ、其記憶を基礎として傳へ給ふが故に、日本人の肉體に降り給ふ時は即ち日本の言葉を以て現はし給ふものである。科學的頭腦に魅せられたる現代の學者又は小賢しき人間は「神は全智全能なるべきものだ。然るに何故に各國の民に分り易く、地上到る所の言語を用ひて示し給はざるや」と云つて批判を試み、神の遣はしたる豫言者の言を以て怪亂狂妄と罵り、或は無學者の言とか或は不徹底の言説とか何とかケチをつけたがる盲が多いのは、神の豫言者も大に迷惑を感じる所である。

高天原と天界は至大なる一形式を備へたる一個人である。さうして高天原に構成されたる天國の各團體は之に次げる所の大なる形式を備へたる一個人の様なものである。さうして天人は又其至小なる一個人である。人間も亦天界の模型であり、小天地である事は屢述べた所である。神は此一個人なる高天原の頭腦となつて其中に住し給ひ、萬有一切を統御し給ふ故に、又地獄界も統御し給ふは自然の道理である。人間も亦其形體中に天國の小團體たる諸官能を備へ種々の機關を藏し、而して天國地獄を包含してあるものである。

扨て高天原の如き極めて圓滿具足せる形式を有するものには、各分體に全般の面影があり又全般に各分體の面影がある。其理由は高天原は一個の結社の様なものであつて、其一切の所有を衆と共に相分ち、衆は又一切の其所有を結社より受領して生涯を送る故である。かくの如く天界の天人は一切の天的事物の受領者なるによつて、彼は又一個の天界の極めて小なるものとなすのである。現界の人間と雖も、其身の中に高天原の善を攝受する限り、天人の如き受領者ともなり、一個の天界ともなり、又一個の天人ともなるのである。

治國別、龍公兩人は言靈別命の案内によつて第一天國の或個所に漸く着いた。此處には得も云はれぬ莊嚴を極めた宮殿が立つてゐる。これは日の大神の永久に鎮まります都率天の天國紫微宮であつて、神道家の所謂日の若宮である。智慧と證覺と愛の善と信の眞に充されたる數多の天人は此宮殿の前の廣庭に列をなし、言靈別一行の上り來るを歡喜の情を以て迎へて居たのである。言靈別命は遙か此方より此光景を指さし、

治國別様、あの前に金色燦然として輝いてゐるのは、エルサレムでムります。

さうしてあの通り巨大なる石垣を以て造り固められ、數百キューピットの城壁を圍らしてあるのを御覽なさいませ」

「ハイ、有難うムります、如何したものが吾々は圓滿の度が缺けて居りますために、エルサレムは何處だか、石垣は何處にあるか、城壁の高さも分りませぬ。只私の目に映ずるのは赫灼たる光と天人の姿が幽かに見ゆるばかりです。さうしてエルサレムとか仰有りましたが、それは小亞細亞の土耳其にある聖地ではムりませぬか」

「エルサレムの宮とは大神様の御教を傳ふる聖場の意味であります。又高き處の意味であつて即ち最高天界の中心を云ふのです。石垣と申すのは即ち虚偽と罪惡との襲來を防ぐ爲の神眞其ものであります。度と申すのは性相其ものであつて、聖言に云ふ、人とは凡ての眞と善徳とを悉く具有するものの謂であります。即ち人間の内分に天界を有するものを人と云ひ、天界を有せないものを人獸と云ふのです。ここには決して人なる天人はあつても現界の如き人獸は居りませぬ。然し私が今人獸と云つたのは靈的方面から云つたのです。凡て神の坐します聖場及び

其御教を傳ふる聖場を指して貴の都と云ひ、或はエルサレムの宮と云ふのです」

「さう致しますと、現界に於けるウブスナ山の齋苑館を始め、黄金山、靈鷲山、

綾の聖地及び天教山、地教山、萬壽山其他の聖地は凡て天國であり、エルサレム

の宮と云ふのですか」

「さうです、實に神格によつて圓滿なる團體の作られたものは凡てエルサレムと

も云ひ、地上に於ては地の高天原と稱ふべきものです。地上の世界は要するに高

天原の移寫ですから、地上にある中に高天原の團體に籍をおいておかなくては、

靈相應の道理順序に背いては、死後天國の生涯を送る事は出来ませぬ。サア之よ

り最奥天國の中心點、大神の御舎に御案内致しませう」

と先に立つて歩み出した。二人は足の裏がこそばゆい様な氣分に打たれ、いと恥

かし氣に従ひ行く。路傍に堵列せる數多の天人は「ウォーウォー」と手を拍つて

叫び、愛善の意の表示をなしてゐる。二人は言靈別命の背後に従ひ、被面布を冠

りながら心落ち着き、静々と日の若宮の表門を潛り入る。

言靈別命は二人を門内に待たせ置き悠々として奥深く入り給うた。二人は門内

に佇み園内に繁茂せる果樹の美しきを眺めやり、舌うちしながら頭を傾け「アー」と驚きに打たれ吐息を洩らしてゐる。暫くすると庭園の一方より目も眩むばかりの光を放ち悠々と入り来り給ふ妙齡の天女があつた。二人は思はずハツと大地に踞み敬禮を表した。此女神は西王母と云つて伊邪那美尊の御分身、坤の金神であつた。西王母と云ふも同身異名である。女神は二人の手をとりながら言靈別命の奥殿より歸り来る間、庭園を巡覽させむと桃畑に導き給うた。二人は恐る恐る手を曳かれながら芳しき桃樹の園に導かれ行く。此處には三千株の桃の樹が行儀よく繁茂してゐる。さうして前園、中園、後園と區劃され、前園には一千株の桃樹があつて美はしき花が咲き且一方には美はしき實を結んだのも尠なくはない。此前園の桃園は花も小さく又其實も小さい。さうして三千年に一度花咲き熟して、之を食ふものは最高天國の天人の列に加へらるるものである。さうして此桃の實は餘程神の御心に叶つたものでなければ與へられないものである。西王母は二人に「此桃の實の説明をしながら中園に足を踏み入れた。ここにも亦一千株の桃の樹があり、美はしき八重の花が咲き充ち又甘さうな實がなつて居る。之は六千

年に一度花咲き實り、之を食ふものは天地と共に長生し、如何なる場合にも不老不死の生命を續けると云ふ美はしき果物である。西王母は又もや詳細に桃畑の因縁を説き諭し、終つて後園に足を入れ給うた。此處にも亦一千株の桃樹が行儀よく立ち並び、大いなる花が咲き匂ひ、實も非常に大きなのが枝も折れむばかりに實つてゐる。此桃の樹は九千年に一度花咲き實り、之を食ふものは天地日月と共に生命を等しうすると云ふ重寶至極な神果である。西王母は此因縁を最も詳細に治國別に諭し給うた。然し此桃の密意については容易に發表を許されぬ、然しながら桃は三月三日に地上に於ては花咲き、五月五日に完全に熟するものなる事は、此物語に於て示されたる所である。之によつて此桃に如何なる御經綸のあるかは略推知し得らるるであらう。西王母は一度地上に降臨して黄錦の御衣を着し、數多のエンゼルと共に之を地上の神權者に獻げ給ふ時機ある事は、現在流行する謠曲によつても略推知さるるであらう。

却説、西王母は桃園の案内を終り、二人の手を引きながら元の門口に送り來り、治國別殿、龍公殿、之にてお別れ申す

と云ふより早く桃園内に神姿を隠し給うた。二人は其後姿を伏し拜み、王母が説明によつて神界經綸の深遠微妙なる密意を悟り、思はず合掌して感涙に咽びつつあつた。

かかる所へ紫微宮の黄金の中門を開いて現はれ来る美はしき天女、五色の光輝に充ちた羽衣を着しながら出で来る其莊嚴さ、天國の天人は何れも美はしく圓滿の相を具備すれども、未だ嘗て斯の如き圓滿なる妙相を備へたる神人を見るのは二人とも天國巡覽以來初めてであつた。

因に羽衣とは決して謠曲にある如き中空を翔ける空想的のものでない。最も美はしき袖は手より數尺長く、裾は一二丈も後に垂れてゐる神衣の事である。

扨て十二人の天女は、無言の儘二人を指し招き、前に六人、後に六人、二人を守りながら黄金の中門を潛つて迎へ入れるのであつた。此時今まで聞いた事もない様な微妙な音楽四方より起り、芳香馥郁として薫じ、二人は吾身の何處にあるやも忘るるばかり歡喜に充されながら、微の聲にて天津祝詞を奏上しつつ欣々と進み入る。

第一三章 月照山(一二六七)

治國別、龍公兩人は、十二人のエンゼルに導かれ、宮殿の奥深く進み入った。併しこの宮殿は都率天の前殿とも前宮とも稱へられ、最奥の御殿ではなかつた。最奥の御殿は大至聖所と稱へられ、大神の御居間である。此居間は、如何なる徳高きエンゼルと雖も一歩も踏み入れる事は出来ない。日の若宮と稱へられ、大神は高天原の太陽として御姿を現じたまふ所である。故に證覺の最も勝れたる天人のみ、遙に其お姿を八咫の鏡の如く拜するを得るのみである。神は總て圓滿の相にましますが故に、此處にては太陽と現はれ給ひ、其御光は自然界の太陽の幾百倍とも知れない光を放たせたまひ、容易に仰ぎ拜する事は出来ない。併し大神は諸團體の天人の前に太陽として現はれ給ふ時がある。其時は和光同塵的態度をも

つて、第一天國の天人には地上に於ける太陽の七倍の光をもつて現はれたまひ、
第二天國に在りては五倍の光をもつて現はれたまひ、第三天國には二倍の光をも
つて現はれたまふが例のやうに承はる。これはほんの大要であつて、各團體、各
天人個々の善徳の如何によりて、其光に強弱の度があるのである。又時には一個
の天人となつて團體中に現はれ給ふ時もある。さうして最奥の大至聖所に於ける
大神の御經綸と其御準備に至りては、如何なる證覺の勝れたる天人と雖も、明白
に之を意識する事は出来ない。其故は至貴至尊にして至智至聖なる大神の御神慮
は天人の思慮の及ぶ所に非ず、證覺の達せざる所なるが故である。
高天原の天界に於て一切を統合するものは即ち善徳である。此善徳の性相の程
度の如何によつて天界に差別を生ずるに至るものである。さうして斯の如く諸天
人を統合するは、決して天人が自作の功に非ずして善徳の源泉たる大神の御所爲
である。大神は總ての天人を導き、之を和合し、之を鹽梅し又其善徳に住する限
り之をして自由に行動せしめ給ふのである。斯くて大神は天人をして各其所に安
んぜしめ、愛と信と智慧と證覺を得て其生涯を樂しましめ給ふのである。故に大

神の御側へは容易に進む事は出来ない。言靈別命は奥殿深く進み給ひ、治國別、龍公は神界の都合によりて或機會により、天國巡覽修業に上り來りし由を奏上し、大神の許しを受け、茲に盛大なる酒宴を前殿に於て催さるる事となつた。先づ正面には言靈別命正座し、相竝んで西王母其右に座を占め、治國別、龍公は其傍に座席を設けられた。さうして十二人のエンゼルは麗しき葡萄酒の酒を雲脚机に載せ、恭しく目八分に捧げて四人の前に靜に之を据ゑた。次には麗しき桃の實を雲脚机に一つ一つ載せ、一つは治國別の前に、一つは龍公の前にキチンと据ゑられた。西王母は玻璃の杯を先づ言靈別命にさし、葡萄酒をなみなみとつぎ給うた。言靈別命は押頂いて之を飲み、杯洗の水に洗ひ、懷より紙を取り出し、杯をよく拭き清め治國別にさした。治國別は押頂き、西王母より葡萄酒を又八分ばかり注がれ、幾度も押頂いて之を飲み、又もや杯洗に滌ぎ拭き清めて龍公に渡した。龍公は杯を押し、感謝の涙に暮れて居る。西王母は膝をにじり寄せ、龍公の杯に半分ばかりつがせたまうた。之にて杯は終りをつげた。一人の天女は徳利や杯を雲脚机に据ゑた儘目八分に持ち、次の間に運んだ。この葡萄酒は大神の血と肉ともた

とふべき最も貴重なる賜であつた。この酒を飲む時は心の總ての汚れを拂拭し、
廣大なる神力を授かり、且つ永遠の生命をつなぎ得るものである。次に西王母は
天女の運び來りし二個の桃を兩人に與へ、速かに此場に於て食すべき事を命じ給
うた。二人は命の儘に押頂き、其風味に驚喜しつつ靜かに腹中に納めて仕舞つた。
不思議にも種は米粒の如く小さく、いつとはなしに種もろとも咽喉を通つて仕舞
つたのである。この桃實は前園に實りしものにして、三千年の齡を保つと云ふ目
出度き神果である。西王母は一言も言葉を發したまはず、ニコニコとしながら二
人の顔を嬉しげに眺め居たまうた。十二の天女は笛、太鼓、鼓、羯鼓、其外種々
の樂器を吹奏し、面白き歌を爽かな聲にて歌ひ、其中の最も若く見ゆる四人の天
女は長袖淑に胡蝶の舞を舞ひ終り、一同に辭儀をなし、衣摺れの音サヤサヤと次
の間に姿を隠した。さうして龍公は、玉依別と云ふ神名を賜ひ、喜び勇む事一方
ならず、何事か歌を歌つて、感謝の意を表せむとしたが、天國の光に打たれ、是
亦一言も發し得なかつた。

西王母がこの二人に向つて此宴席に於て一言も言葉を發したまはなかつたのは、

畏れ多き大神のお側近き前殿であつたから、遠慮をせられたのである。西王母の如き尊き證覺の神さへ謹慎を表し、一言も發したまはざる位なれば、言靈別命も亦沈黙を守り、治國別、玉依別は、一言を發せむにも發し得なかつたのである。暫くあつて以前の舞姫は、二人の麗しき婦人を先に立て此場に現はれて來た。治國別は其二人の女に何處ともなく見覚えのあるやうな感がしたので、頻りに首を傾げよく見れば、豈計らむや、先に立つた女は紫姫であつた。さうして紫姫は、玉照彦を嬉しげに懷に抱き、何事か玉照彦に向つて顔の表情をもつて囁きつつ西王母の左側に座を占めた。も一人の女をよく見れば、お玉の方であつた。お玉の方は玉照姫を懷に抱き、同じく何事か表情をもつて玉照姫に囁きながら静々と西王母が右側に座をしめた。治國別、玉依別の兩人はハツと驚き思はず知らずア、と云つたが、其後の言葉は繼げなかつた。西王母は紫姫、お玉の方に目配せし給うた。紫姫はスツと立つて治國別の前に座をしめ、得も云はれぬ笑顔を作りながら玉照彦を治國別の懷に抱かせた。又お玉の方はスツと立つて玉依別の前に進みより、嬉しげに笑顔を作り、玉照姫を玉依別に抱かしめ、二人は静々と西王母の

左右にかへつた。暫くすると天女二人、治國別、玉依別の前に現はれ、一人は玉照彦を、一人は玉照姫を大事さうに抱へ、奥殿の大神の御殿をさして足音を忍ばせながら静に進み入つた。言靈別命は西王母に目禮をなし、二人を手招きしながら此御殿を出でて往く。二人は同じく西王母に目禮をなし、言靈別の後に従ひ前殿を出でて往く。それより中門を潛り表門に出た。

因に此前殿に於て、玉照彦、玉照姫を抱かせたまひたるは、深き意味のおはする事ならむも、二人は其何の意たるかを解し得なかつた。併し何れは其意味の判然する時が来るであらう。讀者は楽しんで發表の時機を待たれむ事を希望する次第である。

三人は表門に出た。幾千人とも知れぬ麗しき天人は、各麗しき金色の旗を神風に翻へしなから、言靈別命他二人の前途を祝する如く見えた。二人は夢ではないかと思ひながら、麗しき樹木や花卉の道の兩側に茂れる金砂の敷きつめたる如き坦々たる大道を、天津祝詞を奏上しながら、數多の天人が喜びの聲に送られて、何處ともなく、言靈別命と共に進み往くのであつた。

言靈別命は、とある麗しき山上に二人を伴ひ、四方の風景を眺めながら、此處に腰を下し休息をした。二人も同じく側に腰を下し、天國の莊嚴に打たれて啞然たるばかりであつた。

言靈「治國別さま、玉依別さま、大變な貴方はお蔭を頂きましたなア、お祝ひ申します」

治國「何ともお禮の申し様がムいませぬ。大神様は貴方の御身を通し、吾々如きものに斯かる尊き神庭に導きたまひ、結構な賜物まで頂きました、何とも早や感謝の情に堪へませぬ」

玉依「私も色々御神徳を頂いた上、神名まで賜はりまして、實に何と申してよろしいやら、吾任務の益々重大なるを悟りました。これと申すも全く大神様の御仁慈、貴神様の御取りなし、實に感謝に堪へませぬ」

拙者は大神様の命に依りてお取次を致したばかり、感謝を受けては困ります。總て天國のものは何事も皆神様の御所爲と信じて居りますれば、感謝などせられては實に困ります。貴方等に感謝の言葉を受けるのは、要するに神様の御神徳を

私わたくしする事ことになります。何卒なにとぞ此この後ごは如何いかなる事ことありとも、私わたくしに對たいして感謝かんしゃの言葉ことばを云いつて下くださるな。是こればかりは固かたく願ねがつて置おきます。どうぞ神かみ様に感謝かんしゃして下くださいませ」

治國はるくに「ハイ有難ありがたうございます、キツと今こんご後は心得こころえませう」

と云いひながら兩手りやうてを合あせ、茲ここに兩人りやうにんは紫微宮しびきうの方ほうに向むかつて感謝かんしゃの祝詞のりとを奏上そうじやうした。

「此處ここは第一だいいちてんごく天國らくゑんの樂園らくゑんで、聖陽山せいやうざんと申まします。皆みなさま、被面布ひめんぷをお除とりなさいませ。

最早もはや此處ここ迄まで參まりました以上いじやうは、お除とりになつても能よく分わかります。貴方あなたは前ぜん

殿でんに於おいて生命いのちの酒さけを與あたへられ、加くふるに結構けつこうな桃ももの實み迄までも與あたへられ給たまうたのです

から、もはや最高さいかうてんごく天國てんくにんの諸團體しよだんたいを御巡覽ごじゆんらんになつても目めの眩くらむやうな事こともなく、又また

總すべての天人てんにんの言語げんごも明瞭めいれうに分わかります。私わたくしはこれにて貴方あなた等に對たいする今回こんくわいの使命しめいは

終をはりました。どうぞ自由じいゆに天國團體てんごくだんたいをお廻り遊あそばし、月つきの大神おほかみのまします靈國れいこくの

月宮殿げつきうでんに御參拜ごさんぱいの上うへ、御歸顯ごきけんあらむ事ことを望のぞみます、さらば」

と云いひながら、又またもや大光團だいくわうだんと化くわして、天てんの一方いっぱうに其英姿そのえいしを隱かくさせたまうた。二ふた

人りは其後そのちしうを眺め、暫しばしく伏ふし拜をがみ居あたりしが、治國はるくに別わけは玉依別たまよりわけに向むかひ、

「ヤア玉依別殿、實に結構な事ではムらぬか。言靈別命様は昔の神様と承はつて居たが、現在吾前に現はれて、種々と結構な教訓を垂れたまひ、又もや五三公となつて身を下し、吾等を導きたまひし其尊さ、有難さ、治國別はもはや感謝の言葉さへ出なくなりしましたよ」

「仰せの如く結構な御導きに預かり、こんな嬉しい事は復とムいますまい。ア、神様、この悦びと榮えをして永遠に吾等に臨ませたまへ、惟神靈幸倍坐世」

「惟神靈幸倍坐世」

と手を拍ち感謝の涙に袖を霑して居た。是より二人は天國の諸團體を一々訪問し、各團體の天人より意外の優遇を受け、感謝に満ちた境涯を送りながら、是より靈國の月宮殿に詣でむと聖陽山を乗り越え、靈國の中心を目當に道々祝詞を奏上しながら進み往く。

局面忽ち一變して紫、赤、黄、白さまさまの花咲き匂ふ大野ヶ原に二人は立つて居た。

「モシ治國別さま、見渡す限り際限なき百花爛漫たる大原野、これが所謂靈國で

ムいませうかなア」

「サア、靈國らしうムいますなア。誰人か天人に會つて尋ねたいものです」
と話す折しも、一人の宣傳使、靈光に四邊を輝かせながら後より足早に、オーイ
オーイと聲かけ進み來る。二人は立ち止まり、宣傳使の吾側に近づくを待つて居
た。

「私は大八洲彦命と申す靈國の宣傳使でムいます。貴方は治國別、玉依別のお二
方ではムいませぬか」

二人はハツと大地に踞み、

「ハイ、仰せの通り、治國別、玉依別の兩人でムいます。貴方は吾々が日頃慕ひ
まつる月照彦様の前身、大八洲彦命様でムいましたか、存ぜぬ事とて甚い失禮を
致しました。何卒不都合の段お赦しを願ひます」

と嬉し涙に暮れながら答へた。大八洲彦命は兩人を従へ、スタスタと東を指して
進み往くその足の早さ。二人は後れじと一生懸命にチヨコチヨコ走りになつて従
いて行く。何時の間にやら小高き丘陵の上に着いて居た。大八洲彦命は二人に向

ひ、

「此處は靈國一の名山、月照山と申します。此山は御存じの通り實に平坦な場所
でムいます。是より私と奥へお進みになれば、月の大神様の宮殿なる月宮殿と云
ふ立派な御殿がムいます。サア、も一足です、急ぎませう」
と又もや急ぎ歩み出した。二人は漸くにして七寶をもつて飾られたる門の前に辿
りついた。數多の麗しき天人は大八洲彦命の歸館を出で迎へ、音樂や歌をもつて
歡迎の意を表するのであつた。大八洲彦命は諸天人に「一々挨拶を返しながら、七
つの門を潜つて邸内深く進み入る。二人は後に従ひ勢よく數多の天人に會釋しな
がら、月宮殿さして急ぎ行く。

大八洲彦命は二人を導き、殿内深く進み、數多の天女に命じ、珍らしき果實や
酒などを響應し、歌舞音曲を諸天人に奏せしめ、其旅情を慰めた。二人は感謝の
涙に咽びつつ、大八洲彦命の命のまにまに珍らしき飲食を喫しつつ、口中に天津
祝詞の奏上を怠らなかつた。奥殿より金色燦爛たる御衣を着し、麗しき容貌に得
も云はれぬ笑を湛へ、此場に現はれ給うた大神は、最前紫微宮に於て、桃園の案

内ないをされた西王母せいわうぼであつた。西王母せいわうぼのうしろ後には巨大なる月光げつくわうが影かげの如ごとくつき従したがひ輝かがやいて居た。大八洲彦命おほやしまひこのみことは恭うやうやしく頭あたまを下さげ、王母わうぼに向むかひ、

「お蔭かげによりまして、治國はるくにわけ別りやうにん、玉依別たまよりわけの兩人りやうにんは漸やうやく天國てんごくの修業しうげふを果はたしました。これ全く大神様おほかみさまの御惠みめぐみと、兩人りやうにんにかはり、厚あつく御禮おんれい申まを上げます」

と恭うやうやしく奏上そうじやうした。二人ふたりはハツとばかり頭あたまを下さげ、畏かしこまり居る。西王母せいわうぼは兩人りやうにんの側そば近く進すすみ給たまひ、左手ゆんでに治國はるくにわけ別りやうにん、右手めでに玉依別たまよりわけの手てを固かたく握にぎり、涙なみだを落おとさせ給たまひ、

「汝等なんぢらりやうにん兩人ふたり、能よくも神命しんめいを重おもんじ天國てんごく靈國れいごくの巡見じゆんけんを全まうせしよ。其熱誠そのねつせいは感賞かんじやうす

るに餘あまりあり。汝等なんぢら二人ふたりは是これより天あめの八衢やちまたに向むかつて歸かへり往ゆけ、汝なんぢが教をしへ子こ、アーク、タールの兩人りやうにんが、キツと迎むかへに來くるであらう。さすれば汝等なんぢらりやうにん兩人ふたりは元もとの肉體にくたい

に歸かへり、素盞すさのをのみこと鳴尊しんげふの神業しんげふに參加さんかし得うるであらう。名殘なごりは盡つきざれど、これにて訣けつ別べつするであらう」

と御聲おんこゑまでも打うち濕しめり、振返ふりかへり振返ふりかへり奥殿おくでん指さして歸かへり給たまふ。二人ふたりはハツと後姿うしろすがたを伏拜ふしをがみ、感慨かんがい無量むりやうの態ていであつた。大八洲彦命おほやしまひこのみことは兩人りやうにんに向むかひ、

「サラバ、拙者せつしやはこれにてお別わかれ申まをさむ。神業しんげふのため隨分ずいぶん御精勵ごせいれいあれ」

と云ひ捨て、又もや鮮麗なる光となつて、其姿を東天に隠した。これより二人は祝詞を奏上しながら、中間天國を越え、下層天國をも乗り越え、神業に参加すべく天の八衢を指して歸り往く。

(大正一二・一・一三 舊一一・一一・二七 加藤明子録)

第一四章 至愛(一二六八)

治國別、玉依別は最高の靈國を後にして、歸途中間靈國を横斷し、最下層の天國に降つて來た。往がけは其證覺、兩人共今の如くならざりし故、非常にまばゆく感じたりしが、日の若宮に於て神徳を攝受したる二人は、最早第三天國の旅行は何の苦痛もなかつた。併しながら第一、第二、第三と下降し來るにつれて、吾ながら其神力の減退する如く思はれ、また明確なる想念も甚しく劣りし如く思はるるのは、實に不思議であつた。漸くにして二人は、八衢の關所に着いた。伊吹

戸主の神は數多の守衛を率ゐて二人を歓迎した。二人は館の奥の間に導かれ、茶菓の饗應を受け、靈界に關する種々の談話を交換した。

伊吹「治國別様、首尾克く最奥天國、靈國がきはめられましてお目出度うございます。さぞ面白きお話がムいませうねえ」

「何分徳が足りないものですから、何れの天國に於ても荷が重すぎて、非常に屁古たれました。併しながら諸エンゼルの導きによつて、辛うじて最奥天國まで導かれ、其團體の一部を巡拜し、漸く此處まで歸つて参りました。併しながら不思議な事には、下層天國より順を追つて最奥天國へ上る時の苦さは譬へられませぬ。丁度三才の童子に重き黄金の棒を負はせたやうなもので、餘り結構過ぎて、それに相應する神力なき爲、到る所で恥を搔いて参りました」

「お下りの時はお樂でムいましたらうなア」

「ハイ、歸りは歸りで又苦しうムいました。何だかダンダンと神徳が脱ける様でムいましたよ」

「すべて靈界は想念の世界でムいます、それ故情動の變移によつて、國土相應の

證覺しよつかくに住ぢゆうするのですから、先まづそれで順序じゆんじよをお踏ふみになつたのです。高天原たかあまはらの規きそ則くは大變たいへん嚴格げんかくなもので、互たがひに其範圍そのはんゐを犯をかす事は出來できない様やうになつて居をります。最さい高天國かうてんこく、中間天國ちうかんでんこく、下層天國かそうてんこく及び三層さんそうの靈國れいこくは、嚴肅げんしゆくな區別くべつを立てたられ、各天界かくてんがいの諸天人しよてんにんは互たがひに往來わうらいする事ことさへも出來できないのです。下層天國かそうてんこくの天人てんにんは中間天國ちうかんでんこくへ上のぼる事ことは出來できず、又上天國またじやうてんこくの者ものは以下いかの天國てんこくに下くだる事ことも出來できないのが規則きそくです。もしも下したの天國てんこくより上うへの天國てんこくに上のぼり行く天人てんにんがあれば必かならず痛いたく其心そのこころを惱なやませ、苦くるしみ悶もだえ、自分じぶんの身邊しんべんに在ある物ものさへ見みえない様やうに、眼まなこが眩くらむものです。ましてや上天國てんこくの天人てんにんと言げんご語ごを交まじゆる事ことなどは到底たうてい出來できませぬ。又上天國またじやうてんこくから下天國かてんこくへ下くだり來きたる天人てんにんは忽たちまち其證覺そのしよつかくを失うしなひますから、言語げんごを交まじへむとすれば、辨舌べんぜつ澁しぶりて重おもく、其意氣そのいきは全まったく沮喪そさうするものです。故ゆゑに下層天國かそうてんこくの天人てんにんが中間天國ちうかんでんこくに至いたるとも、亦また中間天國ちうかんでんこくの天人てんにんが最奧天國さいあうてんこくに至いたるとも、決けつして其身そのみに對たいして幸福かうふくを味あぢはふ事は出で來きませぬ。吾居住わがきよぢゆうの天國てんこく以上いじやうの天人てんにんは、其光明輝そのくわうみやうがやき、其威勢そのゐせいに打うたるるが故ゆゑに、目めもくらみ、只一人ただひとりの天人てんにんをも見みる事ことが出來できませぬ。つまり内分ないぶんなるもの、上天じやうてん國こく天人てんにんの如ごとく開ひらけないが爲ためであります。故ゆゑに目めの視覺しかくりよく力ちからも明あきらかならず、心中しんちゆうに非ひじ

常な苦痛を覚え、自分の生命の有無さへも覺えない様な苦しみに遇ふものです。併しながら貴方等は大神様の特別のお許しを受け、媒介天人即ち靈國の宣傳使に伴はれて、お上りになりましたから、各段及び各團體に交通の道が開かれ、其爲巡覽が首尾よく出来たのです。而して大神様は上天と下天の連絡を通じ給ふに、二種の内流によつて之を成就し給ふのです。而して二種の内流とは、一は直接内流、一は間接内流であります。』

玉依 『直接内流、間接内流とは如何なる方法を言ふのでムいますか』

『大神様は上中下三段の天界をして、打つて一丸となし、一切の事物をして、其元始より終局點に至るまで悉く連絡あらしめ、一物と雖も洩らさせ給ふ事はありません。而して直接内流とは大神様から直に天界全般に御神格の流入するものであり、間接内流とは各天界と天界との間に、神格の流れ通ずるのを言ふのです。』

治國 『如何にも、それにて一切の疑問が氷解致しました。私は之よりお暇を申し、現界へ歸らねばなりません。併しながらどちらへ歸つてよいか、サツパリ分らなくなりました。最高天國から下るに就いて、折角戴いた吾證覺が鈍り、今では元

の空阿彌、サツパリ現界の方角さへも見えなくなつて了ひました。之でも現界へ
歸りましたら、神様に賜はつた神力が依然として保たれるでせうか
□ 現界に於て最奥天國に於けるが如き智慧證覺は必要がありませぬ。只必要なる
は愛と信のみです。其故は最高天國の天人の證覺は第二天國人の知覺に入らず、
第二天國人の證覺は第三天國人の能く受け入る所とならない様に、中有界なる
現界に於て、餘り最高至上の眞理を説いた所で有害無益ですから、只貴方が大神
様に授かりなかつた其神徳を、腹の中に納めておけば可いのです。大神様でさへ
も地上に降り、世界の萬民を導かむとなし給ふ時は、或精靈に其神格を充し、化
相の法によつて豫言者に現はれ、豫言者を通じて現界に傳へ給ふのであります。
それ故神様は和光同塵の相を現じ、人見て法説け、郷に入つては郷に従へとの、
國土相應の活動を遊ばすのです。貴方が今最高天國より、段々お下りになるにつ
け、證覺が衰へたやうに感じられたのは、之は自然の攝理です。之から現界へ出
て、譯の分らぬ人間へ最高天國の消息をお傳へになつた所で、恰も猫に小判を與
ふると同様です。先づ貴方が現界へ御歸りになれば、中有界の消息を程度として

萬民を導きなさるが宜しい。其中に於て少しく身魂の研けた人間に對しては、第三天國の門口位の程度でお諭しになるが宜しい。それ以上御説きになれば、却て人を慢心させ害毒を流すやうなものです。人三化七の社會の人民に對して、餘り高遠なる道理を聞かすのは、却て疑惑の種を蒔き、遂には靈界の存在を否認する様な不心得者が現はれるものです。故に現界に於て數多の學者共が首を集め頭を悩ませ、靈界の消息を探らむとして靈的研究會などを設立して居りますが、之も靈相應の道理により、中有界の一部分より外は一步も踏み入るる事を靈界に於て許してありません。それ故貴方は現界へ歸り學者にお會ひになつた時は、其説をよく聞き取り、對者の證覺の程度の上をホンの針の先程説けば可いのです。それ以上お説きになれば彼等は忽ち吾癡狂癡呆たるを忘れ、却て高遠なる眞理を反對的に癡狂者の言となし、癡呆の語となし、精神病者扱をするのみで少しも受入れませぬ。故に現界の博士、學士連には、靈相應の理によつて肉體のある野天狗や狐狸、蛇などの動物靈に關する現象を説示し、卓子傾斜運動、空中拍手音、自動書記、幽靈寫眞、空中浮上り、物品引寄せ、超物質化、天眼通、天言通、精神印

象鑑識、讀心術、靈的療法等の地獄界及び精靈界の劣等なる靈的現象を示し、靈界の何ものたるをお説きになれば、それが現代人に對する身魂相應です。それでも神界と連絡の切れた人獸合一的人間は非常に頭を悩ませ、學界の大問題として騒ぎ立ってますよ。アツハ、、、」

玉依「モウシ、伊吹戸主神様、私は日の若宮に於て、王母様より玉依別といふ名を賜はりましたが、これは最高天國で名乗る名でムいませうか、現界に於ても用ひて差支ありませんまいか」

「現界へお歸りになれば、現界の法則があります。貴方は治國別様の徒弟たる以上は、現界へ歸ればヤハリ龍公さまでお働きなされ。治國別様がお許しになれば、如何なる名をおつけになつても宜しいが、貴方が現界の業務を了へ、靈界へ來られた時始めて名乗る稱號です。靈界で賜はつた事は靈界にのみ用ふるものです。併しまア復活後は、結構な玉依別様と云ふ稱號が既に既に頂けたのですから、お目出度うムいます。決して靈界の稱號を用ひてはなりませんぞや」

「ハイ、畏まりました、然らば只今より龍公と呼んで下さいませ」

□ モウ暫く玉依別さまと申上げねばなりません

□ アーア、玉依別さまもモウ少時の間かなア、折角最高天國まで上つて、結構な神力を頂いたが、現界へ歸れば又元の空阿彌かなア。お蔭をサツパリ落して歸るのかと思へば、何だか心細くなりました

□ 決してさうではありませぬ。貴方の精靈が頂いた神徳は、火にも焼けず、水にも溺れず、人も盗みませぬ。三五教の神諭にも……御魂に貰うた神徳は、何者も

盗む事は能う致さぬぞよ……と現はれてありませう。貴方の天國に於て戴かれた

神徳は、潜在意識となつて否潜在人格となつて、どこ迄も廢りませぬ。此神徳を内包しあれば、マサカの時にはそれ相當の神徳が現はれます。併しながら油斷を

したり慢心をなさると、其神徳は何時の間にも脱出し元の神の御手に歸りますから、御注意なさるが宜しい。而して假りにも現界の人間に對し、最奥天國の神

祕を洩らしてはなりません。却て神の御人格を冒瀆するやうになります。靈界の祕密は妄りに語るものではありません。愚昧なる人間に向つて分不相應なる教

を説くは、所謂豚に眞珠を與ふるやうなものです。忽ち貴重なる眞珠をかみ碎か

れ、一旦其汚穢なる腹中を潛り、糞尿の中へおとされて了ふやうなものですよ」

「治國別さま、駄目ですよ、私は天國の消息を實見さして戴き、之から現界へ歸つて、先生と共に現界に於ける靈感者の雙璧となり、大に敏腕を揮つてみよう、今の今まで楽しんで居りましたが、最早伊吹戸主様のお説を聞いてガツカリ致しました。さうするとヤツパリ身魂の因縁だけの事より出来ぬのですかなア。寶の持腐れになるやうな氣がして聊か惜しうムいますワ」

「アツハ、ハ、ハ、ハ」

「私は伊邪那岐尊の御禊によつて生れました四人の兄弟です。されど其身魂の因縁性來によつて祓戸の神となり、最高天國より此八衢に下り、斯様なつまらぬ役を勤めて居りますが、之も神様の御心の儘によりならないのですから、喜んで日々此役目を感謝し忠實に勤めて居るのです。まだまだ私所か妹の瀨織津姫、速佐須良姫、速秋津姫などは實にみじめな役を勤めて居ります。言はば靈界の掃除番です。蛆のわいた塵芥や痰唾や膿、糞小便など所在汚き物を取除き浄める職掌ですから、貴方の神聖なる宣傳使の職掌に比ぶれば、實に吾々兄弟は日の大神の貴の

子でありながら、つまらぬ役をさして頂いて居ります。併し之は決して吾々兄弟が此役目を不足だと思つて申したのではありません。貴方等の御心得の爲一例を擧げたままでムいます」

玉依「ハイ、大神様の御仁慈、實に感じ入りました」と感涙にむせぶ。治國別は憮然として、

「ア、實に大神様の御恵、感謝に堪へませぬ。嚴の御靈の神諭にも……我子にはつまらぬ御用がさしてあるぞよ。人の子には傷はつけられぬから……とお示しになつてありますが、實に大神様の御心は測り知られぬ有難きものでムいますなア」と云つたきり、吐息を洩らして差俯いてゐる。

「私ばかりぢやありません、月照彦神様、弘子彦神様、少彦名神様、純世姫様、眞澄姫様、龍世姫様、其他結構な神々様は皆、嚴の御靈や瑞の御靈の大神の直々の御子でありながら、何れも他の神々の忌み嫌ふ地底の國へお廻りになつて、辛い御守護をしてゐられます。之を思へば貴方等は實に結構なものですよ。嚴の御靈の御神諭にも……人民位結構な者はないぞよ……と示されてありますうがなア」

はるくに なるほど じつ おほかみさま みこころ ほど は、 われわれにんげん はか し ところ 治國 成程、 實に 大神様の御心の程は、 吾々人間の測り知る所ではありませぬ。

あゝ 惟神靈幸はへませ、 五六七の大神様………

と涙を瀧の如く流し、 神恩の甚深なるに感じ、 龍公と共に合掌して其場に打伏し

た。 伊吹戸主神は目をしばたたきながら、

「御兩人様、 其心で、 どうぞ現界に於て神の爲、 道の爲、 世人の爲に御活動を願

ひます。 左様ならば之にてお別れ致しませう」

と云ふより早く忙しげに奥の間に姿を隠した。 二人は後姿を見送り、 恭しく拜禮

しながら館を立出で、 赤門をくぐり、 白赤の守衛に厚く禮を述べ、 八衢街道を想

念の向ふ所に任せて歩み出した。 ア、 惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・一・一四 舊一一・一一・二八 松村眞澄録)

第一五章 金玉の辻（一二六九）

治國別、玉依別は八衢をブラリブラリと逍遙しながら或四辻の辻堂の前に差掛つた。

治國別さま、どうやら玉依別の稱號も斷末魔が近付いたやうです。ここは浮木の森の十町許り手前の破れ堂ぢやありませんか、どうも記憶に残つてゐるやうです。

成程、川の水音迄聞えて來た。何とはなしに娑婆近くなつた様だ。

伊吹戸主の神様にキツウ釘をさされて來ました。本當に吾々も何時の間にやら、鼻ばかり高くなつて居つたと見えますな。柔かく嚴しくカツンとやられた時の恥かしさ、苦しさ、今思ひ出しても冷汗が出ますワ。

餘りお喋りが過ぎたからだ。三五教の御神諭にも……何にも知らずに途中の鼻高が、鼻ばかり高うして偉さうに申して居るが、餘り鼻が高うて上も見えず、鼻が目の邪魔を致して、足許は尚見え、先も見えず、氣の毒なものであるぞよ。

神が鼻を捻折りて改心さした上、誠の事を聞かしてやるぞよ……とお示しになつてゐるが、今伊吹戸主神様に御説教を聞かされて、實に御神諭の尊い事を、今更の如く悟つたよ」

「ハ、さうですな。之から現界へ歸つたら、科學的靈學研究などと偉さうにホラを吹いてゐる途中の鼻高の鼻つパチを捻折つてやらぬ事には、到底靈界の片鱗も宇宙の真相もヨウ分けず、亡者然と威張つて居る始末に了へぬ奴を、鼻を捻折つて助けてやりませうかな」

「アハ、々、自分の顔は見えませぬか、玉依別さま、お前さまの鼻は随分高うなりましたよ」

「ヤア、知らぬ間に靈界ぢやと見えて、想念の延長を來し、鼻迄延長してゐました、治國別様に折つて貰つて、これで満足な顔になりました。ア、惟神靈幸倍坐世」

「伊吹戸主神様のお諭しを忘れぢやなりませんよ」
「モシ忘れたら、貴方氣をつけて下さいや。又潜在意識とか、潜在神格となつて、

心内深く潜伏致しました時にや、副守が跋扈して、又脱線をするかも知れませぬから、どうぞ其都度々々、御忠告を願ひます」

「ハツハ、玉依別さま、私も何時忘れるか知れないから、互に氣をつけ合ふ事に致しませう」

「貴方も私も一時に忘れて了つたら何うなりますか」

「今から忘れる事ばかり考へなくても宜しい。忘れてよい事は忘れ、忘れてならない事は忘れない様に努めるのですな」

かく話す所へ、ツブ六に酔うてヒヨロリヒヨロリとやつて来たのは蝶螭別、エキス兩人の精靈であつた。肉體のある精靈は、肉體のなき精靈に言葉をかけられる時は、直に煙の如く消失するものだが、四人共肉體に歸り得べき精靈の事とて、どちらも元氣がよい。蝶螭別は辻堂に休んでゐる二人の前に現はれ來り、

「モシ、何れの方が知りませぬが、一寸御尋ね申します、二十歳許りの妙齡の美人が、ここを通過致しませなんだかな」

玉依「ウン、ねつから女らしい方には、牝猫一匹會ひませぬよ」

「ナ、何だ、會はぬと申すか、大方其方が誘拐して隠して居るのだろ。此街道は男も女も通る所だ。エ、ン、ゴテゴテぬかさずに白状せぬか。なア、エキス、お前の鑑定は何う思ふ」

「何だか知らぬが、女はモウ懲々だ、お民の事を言ふものぢやない。お民の事を聞くと、すぐにお寅婆を聯想する。あんな鬼婆が又もや、やつて来て鼻でも捻ぢよつたら、今度はモウ、サツパリだ。言ふな言ふな、女の一疋やそこら、何だい」
「貴様にや情交上の關係がないから、そんな平氣な顔して居らりようが、當の御亭主たる俺には又特別の悲痛があるのだ。戀知らずの木狂漢に英雄の心事が分つてたまらうかい、エ、ーン、大切なる情婦を片彦將軍の色魔にチヨ口まかされ、其上色白の靑瓢箪男に自由にされ、どうしてこれが黙つて居らりようか。お民の奴、とうと途中で逃げて了ひよつた。キツと喋し合せて、どつかで會うて【けつ】かるに違ない、俺はどこまでも彼奴の所在を突き止め、思ふ存分やらなくちや蟲がいえねえのだ。……ヤア貴様は治國別ぢやないか。こんな所へお民の後を追うて來よつたのかな。貴様もヤツパリ同穴の貉だらう、サア所在を白状致せ」

と臭い息を吹きかけながら、治國別の手をグツと握り、目を縦にして睨みつけた。
治國別は迷惑さうな顔をしながら、

「蠓蝮別さま、見當違も程がありますよ」

「ナ―ニ、見當違だと、馬鹿を申せ、俺の天眼通で、貴様がお民をそそのかして居ることを遠隔透視したのだ。そして囁いて居った事をも天耳通でチャンと調べてある。サア何處へかくした、白状致せ」

「アハ、ハ、ハ、それ程よく天眼通が利くならば、お民さまの所在は一目で分りさうなものですなア」

蠓蝮別は言葉につまり、酒の酔機嫌で、拳を固めて治國別の横面を續けざまに三つ四つなぐつた。治國別は頭をかかへて抵抗もせず、「惟神靈幸倍坐世」を奏上しながら、しゃがんでゐる。玉依別はグツと癢に障り、蠓蝮別の後に廻り、鞞玉をグツと握つて、後へ引いた。此體を見て、エキスは又もや玉依別の鞞丸をグツと握り、後へ引いた途端に足が前に迂り、ドンと握つたまま仰向けに倒れた。將棋倒しにズルズルと玉依別、蠓蝮別といふ順に三つ重ねとなつた。エキスは玉依

別の大きな尻に鞆丸をグツと押へられ、三人共鞆丸を痛めて、舌をかみ出し、目を眩して了ひ、三人揃うて三「きん」交替の鞆丸の江戸登城をやつて了つた。

治國別は驚いて三人の手を無理に放し、一人々々地上に横臥させ、一生懸命に數歌を歌ひ上げ、鎮魂を以て神靈注射を試みた。玉依別は第一着に息を吹返し、

「アイタ、ア、アー偉い目に遇はしよつた。ヤ、先生、よう助けて下さいました。

私は又第一天國へただ一人上りかけて居りましたら、貴方のお聲で天の數歌が聞え出しましたので、後ふり返り見れば、貴方の身體より靈光が發射し、其光に包まれたと思へば氣がつかまりました。精靈界へ來てもヤツパリ目をまかしたり、靈體脱離したりするものと見えますなア」

「ア、さうと見えるなア、不思議なものだ。併し蝶螈別さまとエキスさまが、鞆丸を損ねてまだ氣がつかない。早く助けてやらねばならぬ。玉依別さま、一つ貴方、神様に願つて復活さしてやつて下さい」

「成程、揃ひも揃うて鞆丸病者ばかりですな。一つ願つて見ませうか。併し先生、此奴ア、貴方の横つ面を擲つた悪人ですから、放つといてやりませうかい」

「神の道は人を救ふのが勤めだ。靈界へ来てそんな心では可くませぬぞ。天國には恨もなければ憎みもない、只愛あるのみですよ」

「そらさうです、併しここは天國ぢやありません。中有界ですから、善も居れば悪も居ります。悪人は悪人で懲してやるが社會の爲ですよ」

「ソリヤいけませぬ。貴方は假令身は中有界に居るとも、其内分には最高天國が開けてあるぢやありません。其心を以て御助けなさい」

「伊吹戸主神様が中有界は中有界、現界は現界相應の理を守れ、妄りに天界の秘密を、譯の分らぬ人間に示すと、却て神を冒瀆する……と仰有つたぢやありませんか」

「ハツハ、益々分らぬやうになりますねえ」

「さうでせうとも、すでに龍公に還元の間際ですからなア。大に愛善と證覺が衰へました。否内分が塞がりましたやうです」

かく言ふ折しも、蝶螈別、エキスはムクムクと起上り、二人の顔を睨みながら、怖さうに後向けに歩き出し、五六間の距離を保つた時、何を思うたか、一生懸命

に雲を霞と逃げ出してしまった。

「ハツハ、とうとう吾々の靈光に打たれ、雲を霞と消え失せよつたな、ヤツパリ吾々はどことはなしに御神力が備はつたとみえるワイ、あゝ愉快々々」

「玉依別さま、先方の方から何だか、人聲がするぢやないか」
玉依別は耳をすませ、

「いかにも、あれはアーク、タールの聲ですよ、こんな所へ彼奴も亦迷つて來よつたのですかなア」

二人の聲は益々高く聞えて來た。俄にパツと際立つて明くなつたと思へば、治國別、龍公の身は浮木の森の陣營のランチ將軍が居間に横たはつてゐた。さうして枕許にはアーク、タールの兩人が心配さうな顔をして坐つてゐた。

治國「あゝ、アークさま、タールさま、此處はどこだなア」

アーク「治國別様、確りなさいませ。貴方は片彦將軍等の企みの罠に陥り、暗い井戸の底で、一旦亡くなつてゐられたのですよ。吾々兩人がランチ將軍、片彦將軍の出で行つたのを幸ひ、漸く繩梯子を吊りおろし、此處までお二人の肉體を持

ち運び、いろいろと介抱を致しましたら、漸くお氣がついたのです」

龍公「ヤア有難い、何時の間に鞆丸握の喧嘩から、こんな所へ歸つたのだらうな、アイタ、ヤツパリ鞆丸が痛いワイ」

と顔をしかめてゐる。

さて四人は互に無事を祝し、大神の前に端坐して、例の如く祝詞を奏上し、終つて治國別は、蠓蝮別の身の上が氣に掛り、四人一度に陣内を隈なく探り、漸く酒房の前に行つた。雪は一尺以上も降り積もり、二人の寝てゐる所は際立つて高くなつてゐる。アーク、タールの兩人は態とに治國別に知らさなかつた。治國別はこの場に現はれ、人間の形に雪が高くなくなつてゐるのを見て、

「アークさま、あの雪はチツと變ぢやありませんか、丁度人間が寝てゐるやうに高く積つてゐるでせう」

「彼奴あ、ユキ倒れかも知れませぬよ」

龍公「こんな所に行き倒れがあつてたまるかい。行き倒れといふ奴ア、道端で乞食が野倒死したのを言ふのだ」

アーク「それでも、あこに蝶鰈別が倒れて其上へ雪が積もつたら、ヤツパリヘユキ」倒れた……ウソと思ふなら、お前行つて調べて来い。彼奴アな、食ひしん坊だから、酒盗みに行きよつて、酒房の外で酔ひつづれてるのかも知れないよ」
龍公「今幽界で蝶鰈別、エキスの兩人に面會し、鞆丸の掴み合ひをして来た所だ。大方それから考へると、最早肉體は冷たくなつて、現界の人ではないかも知れないよ」

「いよ」
「タール」ナニ、俺達と今一緒に倒れた所だ、彼奴ア酒の量が多いのでよく寝てるのだ。俄にブチャケるやうな雪が降つて、瞬間に一尺も積つたのだ。本當に不思議な雪だつたよ。何はともあれ、龍公さま、お前は冥土の知己だから、一つ氣をつけてやり給へ。亡者卒業生だからなア、亡者が亡者に對するのは、身魂相應の理によるものだからなア、アツハツハ、」
龍公は足で雪を掻き分けて見ると、蝶鰈別はムクムクと起上り、雪の中に胡坐をかき目をつぶつてゐる。エキスも亦龍公に足で雪を取除かれ、頭を蹴られた途端に氣がつき、目を塞いだまま、雪の中に坐つて、口をムシヤムシヤ動かして

ゐる。蠓蝮別は夢中になつて奴拍子の抜けた聲で、

「片彦將軍、お民を返せ、コラ色白の小童、俺の女を何うしよつた。早く此場へ

出さぬか、……やお寅が來よつたな、痛い痛い……… 蠓丸を引張りよつて、

イ、痛い、息が切れる、エキス、コラ、龍公の蠓丸を引張つてくれ！」

などと千切れ千切れに喋り立ててゐる。エキスはエキスで又拍子抜けのした聲で、

「ア、ア、痛い痛い痛い、蠓丸がツ、潰れる潰れる」

と喚いてゐる。アークは首を傾けながら、

「何とマア不思議な事があるものだな。龍公さまが氣がつくが早いか、蠓丸が痛

いといふかと思へば、蠓蝮別が又蠓丸々々といひ出す、エキスの奴までお附合に

蠓丸々々とほざいてゐる。此奴ア面白い。エへ、コラ蠓丸の大將、早う

起きぬかい、確りせい」

と蠓蝮別の鼻を力に任して捻ぢた。

「イ、痛い痛い、又してもお寅の奴、俺の鼻を摘みやがつて……許せ許せ」

「ハツハ、オイ、蠓蝮別、俺だ俺だ、目をあげぬかい。どこだと思つてゐる

のだ」

「何處でもないワイ、辻堂の前だ。早く俺を浮木の陣營へ連れて行つてくれ」

「ここが浮木の森の陣營だ、餘り酒を喰ふものだから、目を眩しよつたのだる」

と頬を平手でピシャピシャと擲る。蠓蝮別はハツと氣が付き四邊を見れば、エキ

スが側に眞白氣になつて坐つてゐる。そして治國別、龍公の其處に立つてゐるの

を見て、不思議さうに手を組み、

「ハテ ハテ」

と云ひながら、穴のあく程二人の顔を覗き込んだ。

治國「蠓蝮別さま、エキさま、此處は浮木の森の陣營ですよ。私も暫く魂が肉

體を放れ、八衢旅行をやつて來ました。お前さまも八衢で會ひましたね。併しモ

ウ現界へ歸つたのですから、安心なさいませ。それよりもランチ將軍、片彦將軍

初めお民さまの身の上が、どうも氣にかかります。物見櫓の方に何か變事が突發

してゐるかも知れませぬ。サア参りませう」

蠓蝮別はお民の危急と聞いて、酔も醒め、本氣に立歸り、陣營の駒に打ち乗り、

はるくにわけ、龍公他四人は馬首を揃へてカツカツカツと蹄の音も勇ましく、物見櫓を指して雪に馬足を印しながら走り行く。

(大正一二・一・一四 舊一一・一一・二八 松村眞澄録)

第一六章 途上の變〔一二七〇〕

神が表に現はれて 善と惡とを立て別る

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

只何事も人の世は 直日に見直せ聞き直せ

身の過ちは宣り直せ 三五教の宣傳使

治國別に従ひて 野中の森に来て見れば

怪しの影の現はれて 心を揉みし折もあれ

兄の命は何時の間か 龍公さまと諸共に

吾等を見捨てて出で給ふ 冷淡至極のお人だと

一度は怨んで居たけれど 一寸先の見え分かぬ

曇りし身魂の吾々が 深甚微妙の神界の

其お仕組は如何にして 悟り得らるる事あらむ

只何事も神様の 心の儘と宣り直し

小北の山に現はれて ウラナイ教の松姫に

思はず知らず巡り會ひ 思ひも寄らぬ吾娘

優しき顔に名乗り合ひ 親子の名残惜しみつつ

五三公さまを初めとし 萬代祝ふ萬公さま

お寅婆さまの女武者 アク、タク、テクと諸共に

一本橋を打渡り 怪しの森を打過ぎて

漸く此處に着きにけり 木枯荒ぶ冬の日の

四邊も淋しき旅の空 俄に降り積む銀世界

見渡す限りキラキラと 塵もとめざる眺めなり
 此光景を見るにつけ 思ひ出すは世の中の
 詐り多き有様よ 百千萬の罪科や
 穢れを腹に包みつつ 表面を飾る白雪の
 愛もなければ熱もなき 冷酷無残の世の様を
 暴露せるこそ慨てけれ 浮木の森に屯せる
 ランチ將軍、片彦や 其外百の軍人等
 體主靈従の惡念に 驅られて魔神の部下となり
 至聖至上の天國と 世に響きたる齋苑館
 神の聖場を屠らむと 百の軍を率つれて
 進み行くこそ慨てけれ 吾も片彦將軍の
 一度は祕書となりつれど 誠の道に眼覺め
 仁慈無限の大神の 心に復活せし上は
 如何でか枉に交はらむ いざ之よりは松彦が

心の限り身の極み

真心獻げて片彦や

ランチ將軍其他の

枉に曇りし身魂をば

大慈大悲の大神の

其光明に照らしつつ

天國淨土に導きて

神の教の司たる

其本分を盡すべし

あゝ惟神々々

嚴の御靈の大御神

瑞の御靈の御前に

真心こめて願ぎ奉る

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

山裂け海はあすると

神に捧げし此身體

如何でか命を惜しまむや

道理知らぬ世の人は

猪武者と云はば云へ

假令癡呆と誹るとも

吾真心は何處までも

貫き通す桑の弓

ひきて歸らぬ此意氣地

此世に男子と生れ來て

現在敵を目の前に

眺めて看過し得べけむや

昨日きのふに變かはる今日けふの空そら 心こころにかかると村雲むらくもは

まだ晴はれやらぬ師しの君きみの 今いまは何處いづくに在おはすらむ

又また龍公たつこうは如何いかにして 吾師わがしの君きみの御爲おんために

盡つくし居をらむか、それさへも 心こころもとなき冬ふゆの空そら

尋たづぬる由よしもなき暮くれて 行ゆく手てに迷まよふ吾わが一行いっかう

導みちびき給たまへ天津神あまつかみ 國津神くにつかみ等たち八百萬やほよろづ

吾師わがしの君きみの御前おんまへに 一時いちじも早はやく片時かたときも

進すすませ給たまへ惟神かむながら 神かみの御前みまへに願ねぎ奉まつる

と歌うたひつつ進すすみ來きたるのは松彦まつひこである。五三公いそこうは又また歌うたふ。

人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや 神靈界しんれいかいは云いふも更さら

現實界げんじつがいの天地あめつちの 其經綸そのけいりんの司宰者しさいしやと

選えらまれ出いでしものなれば 人ひとは此世このよの元もとの祖おや

國治立大神の 神言の儘に畏みて

愛と善との徳に居り 眞の信仰勵みつつ

天津御神の賜ひてし 一靈四魂をよく磨き

忍耐力を養成し 人と親しみ又人を

恵み助けつ神のため 世界のために眞心を

盡して此世の生神と 堅磐常磐に仕へ行く

貴の身魂と悟るべし 假令天地は覆るとも

誠一つの大道は 天地開けし初めより

億兆年の末までも 堅磐常磐の巖の如

決して動くものでなし 吾等は神をよく愛し

神の恵みに浸りつつ 只惟神々々

神より來る智を磨き 宇宙の道理をよく悟り

此世に人と生れたる 其天職を盡さずば

此世を去りて靈界に 到りし時の精靈は

伊吹戸主に審かれて

忽ち下る地獄道

實に恐ろしき暗界に

顛落するは必定ぞ

かくも身魂を穢しなば

吾等を造りし祖神に

對して何の辭あるべき

日毎夜毎に村肝の

心を鍛へ肝を錬り

善と惡とを省みて

神の賜ひし恩恵を

うつかり捨つる事勿れ

かかる境遇に陥らば

天地を造り給ひたる

神に對して孝ならず

吾身を初め子孫まで

曲津の群に墜ち込みて

塵や芥と同様に

自ら世界に遠ざかり

百千萬の罪業を

集むる身とぞなりぬべし

省み給へ諸人よ

吾は言靈別の神

天教山に現はれし

木花姫の生魂

此處に二神は相議り

心も清き精靈を

充して五三公の體に入り

心曇れる人々に 神靈界の光明を

照らし救はむそのために 此處まで従ひ來りけり

あゝ惟神々々 神の任さしの神業も

一段落なりぬれば 吾は之より身を變じ

火光となりて齋苑館 皇大神の御舎に

歸りて尊の御前に 心を平に安らかに

大神業に仕へなむ いざいざさらば、いざさらば

治國別や龍公に 程なく面會するならむ

其時汝松彦よ 五三公が今の有様を

完全に委曲に傳へてよ 汝が傳言を聞くならば

治國別も龍公も さもありなむと首かたげ

さこそあらむと喜んで 皇大神の神徳を

忽ち感謝するならむ 松彦始め萬公や

其他百の信徒よ 随分健で潔く

尊たふとき神かみの神業しんげふに 心こころを清きよめて仕つかへませ
愈いよいよ之されにて別わかれなむ あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々
御靈みたま幸さちはへましませよ』

と歌うたひ終をはると共ともに五三公いそこうの姿すがたは煙けむりの如ごとく消きえて了しまつた。松彦まつひこ始はじめ一いち同どうは此この不ふ思し議ぎ
なる出でき來ごと事とにアあフンととして、五三公いそこうが大だ光くわう團だんとななつて歸かへり行ゆく大おほ空ぞらを打うち眺ながめ、途とじ
上やうに立たち止どまり拍はく手しゆして其その英えい姿いしを涙なみだながらに拜をがみつつああつた。

萬公まんこうは又また歌うたふ。

不ふ思し議ぎな事ことが出で來きて來きた 此またりや又また何なんとしした事ことだ
吾友わがとも達たちと思おもうてゐた 五三公いそこうさまは魔まか神かみか
俄にはかに煙けむりと變へん化くわして 齋い苑その館やかたへ歸かへるとて
イソイソ逃にげて去いによつた さはさりながら五三公いそこうは
變かはつた奴やつと思おもうて居ゐた 折角せつかく此處ここまでつついて來きて

拍子の抜けた吾々を 途中に見捨てて歸るとは

合點の往かぬ人だなア 浮木の森の敵軍が

恐うてマサカ逃げたとは 思はれぬけれど肝腎の

戰場に乘込み來ながらも 逃げて去ぬとは情ない

之を思へば師の君の 治國別の司まで

何だか怪しうなつて來た バラモン教を諦めて

三五教に鞍替へを 遊ばしました松さまも

さぞや本意ない事だらう 晴公さまも山口の

森で親子の巡り會ひ 祠の森の玉國の

別の命の御前に スタスタ歸り行つた後

五三公さまを力とし 此處まで進み來たものを

こんな處で逃げられちゃ 如何やら心細うなつた

松彦さまはバラモンの 軍に仕へし祕書の役

アク、タク、テクも亦矢張り バラモン教の殘黨よ

お寅婆さまはウラナイの 教の道で覇を利かし

ヤツと改心した上で 此處迄ついては来たものの

何時變るか分らない 之をば思ひ彼思ひ

深く思案を廻らせば ほんに危険な身の上だ

コレコレ松彦宣傳使 貴方に限つて別條は

あるまいけれどヒヨツと又 片彦さまに巡り會ひ

三五熱が冷却し もとの鞘へと逆戻り

なさつちや神に濟まないぞ 天を欺き吾魂を

欺く様になつたなら 其時や貴方の身の果てぞ

決して變心せぬ様に 萬公が忠告仕る

こんな事をば云つたとて 決して怒つて下さるな

お道を思ひお前をば 大切に思ふばかりと

老婆心かは知らねども 一寸苦言を呈します

序にお寅婆アさまよ お前も確りなさいませ

蠓いもり別りわけやお民たみさま　もしも途中とちうで會あうたなら

又またも持病ぢびやうが再發さいはつし　口くちの車くるまに乗のせられて

燒木やけぼく杭くひに火ひがついた　様な不都合ふつがふのない様やうに

一言ひとこと注意ちゆういを加くはへます　それにつづいてアク、テクヤ

タクの三人みたりも氣きをつけよ　一旦いつたん男をとこが口くちに出だし

三五あななひ教けつの御教みをしへを　信仰しんかうしますと云いつた上うへは

何處どこ々々どこまでも眞心まごころを　立たて貫つらぬいて大神おほかみの

清きよき尊たふとき神業しんげふに　仕つかへまつれよ惟神かむながら

神かみに誓ちかひて萬公まんこうが　五人ごにんの方かたに氣きをつける

あゝ惟神かむながらかむながら々々　御靈みたま幸さちはへましませよ㊦

斯かく歌うたひ來きたる折をりしも、浮木うききの森もりの陣營ぢんえいの入口いりぐちに俄造にはかくりの物見櫓ものみやぐらが目めについた。

よくよく見みれば物見櫓ものみやぐらの近傍きんばうはバラモン軍ぐんの兵卒へいそつ蟻ありの山やまを築きづいた如ごとく、右往左往うわうさわう

に驅かけ巡めぐりながら喚わめき叫さけぶ其聲そのこゑは、一行いつかうの耳みみに何なんとなく嚴きびしく應こたへた。松彦まつひこ一行いつかう

は敵軍の中とは云ひながら、只事ならじ、或は治國別の遭難に非ずやと心も心ならず、敵の陣中を物ともせず、物見櫓の麓を指して足に任せて驅り行く。
(大正一二・一・一四 舊一一・一一・二八 北村隆光録)

第一七章 甦生(一七二七)

ランチ將軍、片彦、ガリヤ、ケースの四人は罪人橋の傍に佇み、肌を斷る許りの寒風に曝されながら、幽かに聞ゆる宣傳歌の聲をせめてもの力として、慄ひながら待つて居た。四方を見れば、今まで吾身邊を包みたる冥官は一人も居らず、又我利我利亡者の姿は残らず消え失せたれども、再び潛り來りし小孔は塞がりて分らず、此橋を向ふへ渡らむか、實に危険にして百中の百まで顛落しさうな光景である。宣傳歌の聲は追々高くなつた。それに次いで、ワイワイと喚く數百人の聲、前後左右より響き來る。四人は心も心ならず、如何なり往くならむと、絶望

の淵に沈んで居た。かかる所へ忽然として現はれ給うたのは容貌端麗なる一人の女神、二人の侍女を伴ひながら、四人の前に鳩の如く下り給ひ、女神は優しき聲にて、

「貴方は大自在天様の教を奉ずるランチ將軍の一行ぢやムいませぬか」

四人は蘇生の思ひをしながら、俄に嬉し氣に聲まで元氣よく、

「ハイ、仰せの如く、ランチ將軍主從でムいます。誠に罪惡のため斯様な所へ落

され、二進も三進もなりませぬ。今日迄の罪惡はすっかり悔い改めまして、生れ

赤兒の心に立ち歸りますれば、どうぞ此の急場をお救ひ下さいませ」

「それは嘸お困りでせう。貴方が誓つて體主靈從の行ひを改むるとならばお助け

申しませう。妾は都率天に坐ます日の大神のお傍に仕ふるもの、妾が申す事御合

點が参りましたらキツと救うて上げませう、實の所は貴方等の危難を大神様が御

照覽遊ばし「一時も早く彼が前に往き、誠を説き明し救ひやれ、時後れなば一大

事」との仰せに、取るものも取り敢ず、都率天を下り此處に來ました。あれお聞

きなさいませ。あの宣傳歌は、貴方等を救ふための宣傳歌の聲でムいます」

片彦「ハイ、有難うムいます。歌は聞えますが、其歌がボンヤリとして少しも意味が分りませぬ」

「あの歌は、三五教の宣傳使が、貴方等を救ふべく神への祈り歌でムいます、サア篤りとお聞きなされ」

と懐中より大幣を取り出し左右左に打ち振れば、不思議や四人の耳はパツと開けて、歌の意味は益々明瞭になつて來た。四人は兩手を合せ、大地に跪いて其歌を一語も洩らさじと聞き入つた。其歌、

高天原の最奥の日の若宮に現れませる

至仁至愛の大神は 八岐大蛇や醜狐

曲鬼共に取りつかれ 善の道をば取り違へ

智慧證覺をくらまして 體主靈從の小欲に

浮身を竄すバラモンの 大黒主の部下となり

ミロクの神の化身たる 神素蓋鳴の大神の

常磐堅磐に現れませる

産土山の靈國の

貴の館を屠らむと

大黒主の命をうけ

ラン子將軍、片彦が

數多の部下を引率れて

浮木の森に陣營を

構へて作戰計畫の

眞最中に入り來る

治國別の宣傳使

忽ち惡心勃發し

神の尊き御使を

千尋の暗き穴の底

落とし入れたる曲業は

忽ち其身に報い來て

眼はくらみ變化神

此上なき美人と過りて

互に修羅を燃やしつつ

反間苦肉の策を立て

互に命を奪ひ合ひ

忽ち精靈肉體を

離れて地獄に踏み迷ひ

進退茲に谷まれる

其窮状を變はし

妾に向つて詔らすやう

汝紫姫の神

二人の天女と諸共に

根底の國に降臨し

彼等四人が心底を
調べたる上眞心の

聊かなりと照るあらば
誠の道を説き聞かせ

再び娑婆に追ひかへし
遷善改過の其實を

あげさせよやと嚴かに
詔らせたまひし神勅を

愼み畏み今茲に
降り來りしものなるぞ

軍の君よ汝は今
吾言靈を聞き分けて

尊き神の愛に觸れ
再び現世に立ち歸り

大神業に奉仕する
赤心あらば吾は今

汝を安きに救ふべし
あゝ惟神々々

尊き神の勅もて
汝等四人に詔り傳ふ

と言葉淑かに聞え來る。よくよく見れば宣傳歌の聲は外には非ず、女神の口から歌はれて居たのである。されど神格に満ちたる天人は、現代人の如く口を用ひたまはず、一種の語字を用ひ四邊より語を發し、其意を述べ給ふにより、四人の亡

者の氣づかなかつたのも道理である。

ランチ將軍は漸くにして力を得、歌をもつてエンゼルに答へた。

高天原の最奥の日の若宮に現れませる

尊き神の勅もて天降りましたる紫の

姫の命の御前に慎み敬ひ願ぎ申す

吾はバラモン大御神大國彦を祭りたる

大雲山の聖場に朝な夕なに身を清め

難行苦行の功をへて漸く道の奥處をば

悟りて茲に神柱大黒主に選まれて

教司となり居たり時しもあれやウラル教

三五教の神柱數多の軍を引率れて

空照り渡る月の國ハルナの都に攻め來る

尊は強く聞えけり茲に大黒主の神

大に怒らせ給ひつつ 善か悪かは知らねども

軍を起し産土の館を指して進むべく

鬼春別に依さしまし 數多の兵士任けたまふ

鬼春別の部下なりし 吾等は命に従ひて

浮木の森に来る折 怪しき女に村肝の

心を汚し同僚を 戀の敵と恨みつつ

惡逆無道の行動を 敢てなしたる悔しさよ

斯くなる上は吾とても 如何でか惡を盡さむや

唯今限り惡を悔い 誠の道に立ち歸り

皇大神の御教に 厚く服ひ仕ふべし

尊き神の御使よ 此有様を憫れみて

何卒救はせたまへかし もし許されて現界に

再び歸り得るなれば 神素盞鳴の大神に

刃向ひまつりし罪咎を 償ふ爲に一身を

捧^{ささ}げて誠^{まこと}の大道^{おほみち}に
進^{すす}み奉^{まつ}らむ吾^{わが}心^{こころ}

尊^{たふと}き神^{かみ}の御使^{みつかひ}の
御前^{みまへ}に心固^{こころかた}めつつ

委^{つばら}曲^{まが}に願^{ねが}ひ奉^{たてまつ}る
朝日^{あさひ}は照^てるとも曇^{くも}るとも

月^{つき}は盈^みつとも虧^かくるとも
假令^{たとへ}大地^{だいち}は沈^{しづ}むとも

一旦^{いつたん}誓^{ちか}ひし吾^{わが}魂^{たま}は
皇大神^{すめおほかみ}の御爲^{おんため}に

假令^{たとへ}命^{いのち}は捨^すつるとも
のどには捨^すてじ一^{ひと}歩^{あし}も

顧^{かへり}みせざる誠^{まごころ}心を
清^{きよ}くみすかし給^{たま}ひつつ

愍^{あはれ}み給^{たま}へ紫^{むらさき}の
姫^{ひめ}の命^{みこと}の御前^{おんまへ}に

慎^{つつし}み敬^{あやま}ひ願^ねぎ申^{まを}す
□

と細^{ほそ}き聲^{こゑ}にて詔^のり上^あげた。
片彦^{かたひこ}も亦^{また}歌^{うた}をもつて罪^{つみ}を謝^{しや}した。

□
ここたくの罪^{つみ}や汚^{けが}れになづみたる
わが身^み魂^{たま}をば清^{きよ}めて救^{すく}へ。

惟かむなが神誠のの道みちに踏ふみ迷まよひ

根底ねそこの國くにに落おちにけるかな。

何事なにごとも神かみの御爲おんため世よのためと

知しらず知しらずに曲まがになりぬる。

ここたくの罪つみを許ゆるして現世うつしよに

救すくはせ給たまへと乞こひのみ奉まつる』

ガリヤガ吾われも亦また汚きたき欲よくに包つつまれて

黑白あやめも分わかぬ暗やみに落おちぬる。

いと深ふかき神かみの惠めぐみに包つつまれて

根底ねそこの國くにを去さるぞ嬉うれしき。

皇神すめかみの此この御惠みめぐみを如いかかにして

報むくはぬものと危あやぶまれぬる。

さりながら元は尊き大神の
身魂なりせば清く歸らむ

ケース 身の欲に心曇りて根の國の

川邊に迷ふ吾ぞ果敢なき。

如何にして此苦しみを逃れむと

千々に心を痛めたりしよ。

有難き神の恵の霑ひて

紫姫は降りましけり

ランチ 有難し勿體なしと申すより
外に言の葉なかりけるかも。

大神おほかみの惠めぐみの露つゆは根ねの國くにや
底そこの國くにまで霑ぬひにけり

紫姫むらさきひめ「村肝むらきもの心こころの闇やみの晴はれし身みは

安やすく歸かへらむ顯御國うつしみくにへ。

さりながら再びふたたび現世げんせに歸かへりなば

曲まがの仕業しわざは夢ゆめにな思おもひそ。

皆みなさま、結構けつこうでムごいました。どうやら現世げんせへお歸かへり遊あそばす道みちが開ひらけたやうです。

妾わらはも大慶たいけいに存ぞんじます。併しかしながら此國このこくの守護神しゅごじん様さまは金勝きんかつ要かねの大神おほかみ様さま、一いち度どお許ゆるしを蒙かうむらねばなりません。お願ねがひを致いたして参まゐります

と云いふより早はやく、麗うつくしき雲くもを起おこし、罪人橋ざいにんばしの上うへを北きたへ北きたへと其神姿そのしんしを隠かくし給たまうた。
四人よにんは互たがひに顔かほを見合みあはせ、ホツと息いきをつきながら、

ランチ「あゝ片彦殿、眞に濟まない事を致しました。悪魔に取りつかれ、俄にあのやうな悪心を起し、こんな所へ閉ぢ込まれるとは、どうも恥かしい事でゐる。どうか現界へ歸るとも、今迄の恨は川へ流し、層一層御親交を願ひます」

と心の底より片彦に詫びた。片彦は之に答へて、さも嬉し氣に云ふやう、

「將軍様、勿體ない事を仰せられますな。皆私が悪いのでゝいます。數多の軍勢を指揮する身分で居ながら、陣中の規律を紊し、女に心を奪はれ、遂には思はぬ葛藤を起しました其罪は、私が大部分負擔すべきものです。何卒今までの罪をお許し下さいまして、従前よりも層一層の御親交を願ひます」

と心の底より打ち解けて云つた。

ガリヤ、ケースの兩人は兩將軍の物語を聞き、身を縮め、感歎の息を洩らして居る。斯かる所へ治國別、松彦、龍公、萬公、アク、タク、テクの一行、宙を飛んで走り來り、四人の前に整列し、

治國「片彦さま、貴方の改心が國魂の神、金勝要大神様に通じました。拙者は要の神の命により、貴方を現界に救ふべくお迎へに参りました」

「ハイ、有難うムいます」

と落涙に及ぶ。松彦はランチ將軍に向ひ、

「將軍殿、貴方の悔悟の願が大地の金神金勝要神様の御前に達しました。拙者は神命に依り、貴方を現界へお送り申しませう、次にガリヤ、ケースの兩人も同様現界へお歸りなさい」

三人は、

「ハイ有難う」

と頭を下げる途端、ザワザワと聞ゆる人聲に目を醒ませば、浮木の森の物見櫓の下座敷に四人は横たはり、數多の人々に介抱されて居た。さうしてお民はお寅に救はれて居た。ランチ將軍、片彦は枕許をよく見れば、豈圖らむや、今夢ともなしに罪人橋の麓にて救はれたる治國別、松彦を初め、龍公、萬公、アク、タク、テクの面々であつた。彼等四人は治國別、松彦の一隊に死體を河中より救ひ上げられ、宣傳歌を聞かされ、且つ天津祝詞と天の數歌の功力に救はれ蘇へつたのであつた。又お民は蠓蠓別の聲にハツと氣がつき四邊を見れば、其枕許には蠓蠓別、

エキス、アーク、タール、お寅婆アさまの面々が親切に介抱をして居た。是よりランチ將軍を初め幽冥旅行の面々は心の底より前非を悔い、初めて神素盞鳴大神の御前に両手を合せ、反逆の罪を陳謝し、遂に三五の道に歸順する事となつた。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・一・一四 舊一一・一一・二八 加藤明子録)

第一八章 冥歌(一二七二)

浮木の森の陣營には主客打ち解けて、幽冥旅行無事終了の祝宴が開かれた。而して又敵味方和睦の宴を兼ねられたのは云ふまでもない。ランチ、片彦兩將軍を初め、治國別は正座に直り、アーク、タール、エキス、蝶蜷別、お民、お寅、龍公、萬公、松彦、アク、タク、テク、ガリヤ、ケースの面々、可なり廣き居間に圓陣を作り、山海の珍味を集めて、土手を切らして歌ひ舞うた。勿論それ以前に、

あななひけう
三五教の大神を祭り、感謝祈願の祝詞を奏上し了つた事は斷つておく。
はるくにわけ
治國別は聲調ゆるやかに歌ふ。

高天原は何處なる
清き尊き神の國
榮えの花の永久に
咲きみち匂ふ神の國

龍公 高天原は何處なる
八重棚雲をかき分けて
清き尊き神人の
常磐堅磐にのぼりゆき
無限の歡喜に打たれつつ
喜びゑらぎ遊ぶ國

治國 高天原の神國は
愛の善徳充ち充ちて
住む天人は悉く
神の恵に包まれつ

にちにち 日々の業務を謹みて
こころ 心を一つに固めつつ
ますます 清く麗しく
よろこ 喜び勇み住まふ國

かみ 神の御國の御爲に
まんぐそく 圓満具足の團體を
ひら 開き進むる天人の

たつこう 龍公 高天原の靈國は

つき 月の御神の永久に

しづ 鎮まりいます瑞の國

やまかはぎよ 山川清く野は茂り

はる 春と夏とのうららかな

けしき 景色に充てる珍の國

もも 百の木の實はよく實り

な 名さへ分らぬ百鳥は

とこよ 常世の春を祝ひつつ

よろこ 喜びゑらぎ遊ぶ國

かんばせ 顔面清く照りわたる

すがたやさ 姿優しくニコニコと

うれ 憂ひを知らぬ神の國

ひと 人と生れし吾々は

このよ 此世に生きて大神の

みち 道の御爲世の爲に

心こころを研みがき身みを盡つくし

靈れい肉にく分ぶん離りの其その後のちは

天あめの八やち衢また關せき所しよをば

越こえずに直すくに天てん國こくへ

上のほる御み靈たまに進すすむべく

今いまより心こころを研みがくべし

神かみは吾われ等らと俱ともにあり

人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや

いかでか神かみに歸かへらざらむ

あゝ惟かむ神な々ながら々ながら

御み靈たま幸さちはへましませよ

ランチコ根ね底そこの國くには醜しこの國くに

ウヨウヨ群むらがり住すまふ國くに塵ちりや芥あくたに汚けがされて

鼻はなつくばかり臭くさい國くに常とこ世よの暗やみのまへ後うしろ

足あし元もとさへも見みえぬ國くに暗くらきすみ隧だう道くだ下りゆき

頭あたまを岩いはに打うちつけて血ち潮しほは流ながれた瀧たきの如ごと

苦くるみ痛いたむ醜しこの國くに危あやふき橋はしの細ほそ長ながく

深谷川に架けられて 身を切る計りの寒風が

いや永久に吹きまくる 冷たき寒き醜の國

ガリガリ亡者の此處彼處 秋の夕の蟲の如

悲しみ歎き聞え來る 胸の塞がる暗の國

あゝ惟神々々 吾等は神の御光に

照らされここに救はれて 再び此世の人となり

月日の光を委曲に 拜する身とはなりにけり

思へば思へば天地の 神の恵は何時の世か

かよわき人の身を以て 酬いまつらむ時やある

心を盡し身を盡し 如何なる悩みに遇ふとて

神の尊き御恵に 比べまつれば吾々が

盡す誠は九牛の 一毛だにも及ぶまじ

許させ給へ惟神 神の御前にわびまつる

片彦かたひこ 中有界ちゆうかいの八衢やちまたに 知らず知らずに迷まよひ込こみ

此世このよに生うまれて今日けふまでも 體主たいしゅ靈從れいじゆうの惡業あくごふを

盡つくせし事ことを一いち々に 伊吹戸主いぶきどぬしの門番もんばんに

スツパぬかれた其時そのときは 身みも世よもあらぬ思おもひして

穴あながあるなら逸いち早く 消きえたきやうな心持こころもち

何なんとも云いへぬ苦くるしさに 根底ねそこの國くにに墜おとされて

汚穢をえの臭氣しうきに充みたされし 暗くらき岩穴腰いはあなこしかが屈かがめ

足あしを傷きずつけ頭打あたまうち 漸やつやく橋はしの袂たもとまで

來きたりて見みれば澤山たくさんの 冥官達めいくわんたちが立たち並び

コハイ顔かほして睨にらみつけ 叱しかり飛とばした恐おそろしさ

それさへあるに四方しほうより 骨ほねと皮かはとに竄やつれたる

ガリガリ亡者まうじやが蜂はちの巢すを つついた如ごとく現あらはれて

吾等われらの體からだに喰くらひつき 手足てあしにまとひし厭いやらしさ

吹ふき來くる風かぜは腥なまくさ 自然しぜんに鼻はなのゆがむよな

臭氣しうきは四邊あたりにを吹ふきまくる 如何いかなる深ふかき罪つみあるも

かやうな所ところにおとすとは 大國彦おほくにひこの神様かみさまも

聞きこえませぬと心中しんちゆうに 恨うらみし事ことも幾度いくたびか

呼よべど叫さけべど祈いのれども 何なんの證しるしも荒淚あらなみだ

苦くるしみ悶もたゆる折をりもあれ 幽かすかに聞きこゆる宣傳歌せんでんか

聞きくより我利がりがり々々亡者まうじやたち 煙けむりの如ごとく消きえ失うせぬ

鬼おにのやうなる面つらさげた 冥官めいぐわんども共とももチクチクと

姿すがたを隠かくし漸やうやくに 四邊あたりは少すこしく明あかくなり

あゝ嬉うれしやと思おもふ折をり 許ゆるしの雲くもに打うち乗りて

悠々いういう下くだる女神めがみあり 女神めがみは二人ふたりの侍女じぢよを連つれ

吾等われらが前まへに現あらはれて いとやさも優やさしき御聲おんこゑに

汝なんぢはランチ將軍しやうぐんか お前まへは片彦將軍かたひこしやうぐんか

高天原たかあまはらの最奥さいあくの 日ひの若宮わかみやに現あれませる

皇大神すめおほかみの御言みこともて 汝なんぢが苦念くねんを助たすけむと

くだり来たれる紫の 姫の命のエンゼルと
 宣らせ給ひし嬉しさよ 地獄に佛といふ事は
 かかる事をや云ふならむ 甦りたる心地して
 ハツと頭をさぐる折 紫姫は淑に
 神の御言を宣り給ひ 金勝要大神の
 御心伺ひ奉らむと 侍女を伴ひ雲に乗り
 北方の空をいういうと 渡りて姿を隠しまし
 間もなく来る宣傳使 治國別や龍公や
 松彦司其他の 眞人たちに救はれて
 再び此世の明りをば 拜みし時の嬉しさよ
 此大恩に酬うべく 吾は之より眞心を
 神の御爲道の爲 世人の爲に捧げつつ
 常世の暗の現界を 一日も早く大神の
 珍の光に照らすべく 治國別に従ひて

月の御國はまだ愚か
百八十國の果までも

お道の爲に雨露を
冒して仕へ奉るべし

あゝ惟神々々
神の御前に眞心を

捧げて祈り奉る

松彦「バラモン軍の祕書官と
仕へまつりて河鹿山

數多の軍勢と諸共に
進む折しも三五の

神徳無限の宣傳使
治國別の一行に

珍の言靈打出され
總隊崩れ逃出す

其みじめさに憤慨し
吾は龍公と諸共に

懷谷に身を隠し
善後の策を講じつつ

逃げ遅れたる馬ともに
トボトボ坂を降りつつ

祠の森に来てみれば
三五教の宣傳使

二人の家來が頑張つて

見張りしてゐる恐ろしさ

漸く此場のゴミにござ

不思議の縁で兄弟の

目出度く對面相濟ませ

治國別に從ひて

野中の森に來て見れば

忽ちドロンと消え給ふ

後に残りし吾々は

數人連れにて小北山

ユラリの彦の神殿に

進みて蠨螋別さまや

お寅婆さまに出會し

妻と娘に巡り會ひ

漸くここに來て見れば

前後左右に人の聲

小山の如く集まりて

ウヨウヨウヨと騒ぎある

われを忘れて陣中に

一行と共に走り入り

河邊に立ちて眺むれば

ここに四人の川はまり

コリヤ大變と進みより

數多の軍兵にかつがせて

物見櫓の下の間に

四人を運び惟神

神の授けし言靈を

聲淑かに宣りつれば

神かみの恵めぐみは目まのあたり
四人よにんいちど一度よみがへに甦よみがへり

目めを開ひらきたる嬉うれしさよ
今いままで搜さがし索もとめたる

治はる國くに別の師しの君きみも
龍たつ公こうも此こ處こに現あらはれて

互たがひに手てに手てを握にぎり合あひ
無ぶ事じを祝しゆくせし嬉うれしさは

天あまの岩いはと戸との開ひらきたる
百もも神がみたちのゑらぎ聲こゑ

それにも勝まさる思おもひなり
あゝ惟かむ神ながら々々かむながら

神かみの光ひかりの現あらはれて
バラモン教けうの宣せんでん傳し

軍いくさの思おもひも今いまは早はや
矛ほこ逆さかしまに立たて直なほし

劍つるぎを扇せんす子すに持もちかへて
神かみの御み前まへを伏ふし拜をがむ

目め出で度たき仕し儀ぎとなりけり
これぞ全まく素す蓋さ鳴の

神かみの尊みことの御ご威ゐ徳とくが
表あらはれ給たまひし證しるしなり

謹つとみ敬おやまひ皇すめ神かみの
御み稜いづ威を感かん謝しやし奉たてまつる

あゝ惟かむ神ながら々々かむながら
御み靈たま幸さちはへましませよ

お寅とら 小北こぎたの山やまに現あらはれし 其名そのなも高たかきウラナイの

教主けうしゆの君きみの蝶いもり蝶りわけ別べつ 其そのお身み分ぶんに似にもやらず

信者しんじやの娘むすめを唆そのか 臍へそ繰くり金がねをまき上げて

おまけにお寅とらの頭あたままで 叩たたいて逃にげる強がうの者もの

憎にくき奴やつと思おもひつめ 一いち度どは腹はらが立たつたれど

金剛こんがう杖づゑに叩たたかれた 其その爲ため私わたしは神しん徳とくを

腕うでもたわわに頂いたいて スツカリ迷まよひの夢ゆめも醒さめ

三あ五な教ひけつの御み教をしへを 此こ上よなく信しんじ奉たてまつり

松彦まつひこ司つかさに從したがひて 浮木うききの森もりに來きてみれば

右う往わう左さ往わうと人ひとの影かげ 只ただ事ことならじと近ちか寄よりて

よくよく見みればお民たみさま 大地だいちに蛙かはづを投なげたよに

早はや緯こ切きれてゐなさつた コリヤ大たい變へんと萬まん公こうや

アク、テク、タク、タクの一いち同どうは 人工じんこう呼こ吸きふを施ほして

天津あまつ祝のり詞とを奏そう上じやうし 祈いのり奉まつればアラ不ふ思し議ぎ

神徳しんとく忽たちち現あらはれて 息いきふき返かへした嬉うれしさよ

之これも全まつたく神かみ様のさまの 吾われ等らを導みちびき給たまふべく

計はかり給たまひし御み業わざぞと 尊たふとみ敬みやまひ今いまここに

無ぶ事のじ對たい面めん遂とげながら 以い前ぜんの恨うらみを打うち忘れ

一い切つ萬まい事じ神かみ様に 御おま任かせ申まをした氣き樂らくさよ

いざ之これよりは吾われ々れも 心こころの腹はら帶おび締しめ直なほし

魔ま神がみの猛たけぶ荒あ野らの原はら よぎりて神かみの御おん爲ために

力ちから限かぎりに仕つかふべし あゝ惟かむ神ながら々かむ々ながら

天てん地ちを造つくり給たまひたる 皇すめ大おほ神かみよ大おほ神かみよ

お寅とらが微び衷ちゆうを愍あはれみて 此この大たい業げふを詳まつ細ぶさに

遂とげさせ給たまへと願ねぎまつる』

萬まん公こう『ヤア皆みなさま、幽いう冥めい組ぐみも元げん氣き恢くわ復いふくし、言こと靈たま車ぐるまの運うん轉てんも隨ずい分ぶん盛さかんなものでした。

之これから一ひとつお民たみ如に來よらさまに、何なにか面おも白しろい歌うたを歌うたつて頂いたきませうか、ナアお民たみさま、

あなたも随分ずいぶんの道みちにかけては、剛がうの者ものだからなア□

「ホ、ホ、私わたしは餘あまり慢心まんしんして高たかい所ところまで上あがり、神罰しんばつを被かうむつて、階段かいだんから顛落てんらくし、サツパリ幽冥旅行いいうめいりよかうを致いたしました。其時そのとき後頭部こうとうぶをシタタ力打うつたと見え、何なんだか頭あたまが變へんになつて、到底たうていうた歌うたなんか出でませぬ、何卒どうぞ御免ごめん下さいませ□

「コレコレお民たみさま、吾々われわれはお前まへさまの命いのちの救すくひ主ぬしだ。チツとは恩おんにきせるぢやないけれど、歌位うたくらゐ歌うたつてくれたつて、餘あまり罰ばちが當あたりもせまいぞや。螻蛄いもりわけ別わけさまの前まへだつて、さうテラすものぢやないワ。歌うたつたり歌うたつたり□

「エ、さういはれちや仕方しかたがありません、何いづれ死しにぞこなひですから、生命いのちのあるやうな歌うたは歌うたへませぬ、何なんでも宜よろしいか□

「何でも宜よろしい、お前まへさまの聲こゑさへ聞きけばそれで満まん足ぞくだ。チツとは幽靈いうれいきぶん氣分きぶんが交まじつても差支さしつかへありません。現界げんかいの歌うたは随分ずいぶん聞きいてるが、幽界いっかいの歌うたはまだ聞きいた事ことがないから、チト位くちゐ、いやらしてもいいから、幽界いっかいで覺おぼえて來きた事ことを歌うたつて下くださいな□

「ハイ、お恥はづかしうじきいます、それなら歌うたはして貰もらひませう□

と云ひながら、両手をニユツと突き出し、掌をベロリとさげ、舌を出したり入れたりしながら、一口言つては踊る其可笑しさ、一同は思はず吹出し、俄に興を添へた。

『あゝ恨めしや恨めしや
私は蠓螋別さまの

悪性男に騙されて
浮木の森まではるばると

心ならずもついて来たワイな
ヒューヒュードロドロ ヒュー、ドロドロ

恨めしや………
恨めしわいな足の裏に

おまんまがひつついてウラ飯い
こんな所につくよりも

なぜに表の鼻の先
天晴つては下されぬ

そしたら私と蠓螋別さまは
誰憚らずママになる

と思つてゐたのは今までだ
冥土の旅をやつてから

白鬼さまに頼まれて
審判の役となつたわいな

ホツホツホツ ホゝゝゝ
あた厭らしい聲がする

此こいつ奴ア不ふ思し議ぎとよく見みれば 蝶いもり蛸り別わけの副ふく守しゆさま

化物ばけものみたよをんなな女をば 澤たくさん山せな背おに負おひながら

工あチ工あチ工あチと走はしりゆく 後うしろ姿すがたを眺ながむれば

青あ赤あ白しろや萌も黄えぎなす さも厭いやらしい鬼おにの顔かほ

アーアをこんな男をとことは 私わたしは夢ゆめにも知しらなんだ

お寅とら婆ばさまはさぞやさぞ これ程ほど澤たくさん山まが曲おに鬼の

憑ついた男をとこをさらはれて ホンしあはに仕しあは合せなお方かただと

天あめの八やち衢またの關せき所しょから 打うち驚おどろいてみてあましたよ

ヒューヒュー ドロドロ ヒュー、ドロドロ ホ、ホッホ、ホーホーホー

ハテ恨うらめしやアな、恨うらめしや 私わたしはこれから蝶いもり蛸り別わけの

後あとには従ついて行ゆきませぬ 石せき塔たふの横よこから細ほそい手てを

ニユツと前まへの方ほうへ突つき出だして 萬まん公こうさまの首くび筋すぢを

冷つめたい手て々てにてグツと掴つかみ キヤツといはさにやおきませぬ

ホ、ホ、ホッホ恨うらめしや ヒ、ヒ、ヒッヒ氣き味みがよいや

こんな女子をなごに睨にらまれたが最後さいごの錠ぢやう

觀念くわんねんなされや萬公まんこうさま

メツタに助たすかりつこはない程ほどに

イヒ、ヒツヒ、イヒ、ヒツヒ、

「コリヤお民たみ……ドン、やめてくれ、何を云いふのだ、アタ厭いやらしい」

「それだつて、冥土めいど土産みやげに唄うたへと云いつたぢやありませんか、私が修業しうげふして來たのは、こんなものですよ、ホツホ、

「エ、氣味きみの悪いわる、首筋くびすぢがゾクゾク出した。コレお寅とらさま、一杯いっぱいついでくれ、そしてお民たみさまを暫しばらく、あつちの方ほうへ送おくつて行いつて下ください……本當ほんたうに飲のんだ酒さけがしゆんで了しまつたやうだ」

松彦まつひこ 「萬公まんこうさまお民幽靈たみいうれいにおどされて

ブルブル震ふるひ汗あせをかくなり」

萬公まんこう 「われとてもお民位たみくらゐは恐れおそねど

あの言靈ことたまが氣きにくはぬなり」

お民たみ 「萬公まんこうさま恐ろおそしいないとは云いはれまい

其顔色そのかほいろはホヽヽヽヽヽヽ」

萬公まんこう 「またしても厭いやらし聲こゑを出だしよるな

早はやく此場このばを立たつてゆけかし」

お民たみ 「立ちたくは山々やまやまなれど肝腎かんじんの

蠓いもり蛸わけ別べつがおもひ切きられず」

萬公まんこう 何吐なにぬかす貴様きさまは口くちと心こころとが

裏表うらおもて故ゆゑうらめしといふ……のだらう

お民たみ 本當ほんたうに恨うらめし人ひとは蝶いもり蝮わけ別

表おもてにめすは萬公まんこうさまなり

萬公まんこう 氣きにくはぬお民たみの奴やつよ一時いっときも

頼たのみぢや程ほどに退のいてくれかし

お民たみ 幽靈いうれいに一旦いったんなつた私わしぢやもの

お前まへの首くびを拔ぬかには離はなれぬ

お寅とら 『萬公まんこうさま、コレお民たみさま、お互たがひに
心得こころえなされ、ここは陣中ぢんちゆう』

蝶いもり 『お民たみといひお寅とらといつて騒さわぐとも
高姫たかひめ司つかさにまさる者ものなし』

お寅とら 『さうだらう高姫たかひめさまは若い故ゆゑ

お民たみさままで厭いやになるのだ。

なアお民たみ、お前まへの年としはまだ二十はたち

五十ごじふ婆ばさまを若わかう見みるとは。

それ故ゆゑに夢ゆめの蝶いもり別わけさまと

人ひとが言いふのも無理むりであるまい』

ランチ「ヤア皆さま、面白く祝はして頂きました。最早夜も更けましたなれば、御寝み下さいませ。又明日ゆつくりと尊き御話を伺はして頂きませう」

此挨拶に一同は上機嫌で各居間に歸り、寢に就いた。

(大正一二・一・一四 舊一一・一一・二八 松村眞澄録)

第十九章 兵舎の囁(一二七三)

コー、ワク、エム三人の守衛連は陣營の一室に集まつて、ランチ將軍以下蘇生の祝酒に舌鼓をうちながら雑談に耽つて居る。

コー「オイ、チツと怪體ぢやないか。エ、ーン、本當に馬鹿にしてゐよる。俺やモウこんな事と知つたら、こんな處までついて來るのぢやなかつたに、えらい番狂はせだ」

ワク「オイ、コー、何が何と云ふのぢやい。テンと貴様の仰有ることは耳に疎通

せぬぢやないか』

『きまつた事だ。テンと意味が疎通せぬ事が出来たのだ。よう考へて見よ。ランチ、片彦兩將軍は女の取り合ひをして、終ひにや生命のとりあひ迄やつたぢやないか。さうして其女と云ふのはドテライお化さまだ。しようもない、生きたり死んだりしよつて、亡者ばかり澤山にモジヤモジヤと本營に集まり、亡者會を開き其祝ぢやと云つて……糞面白くもない。俺達に味なくもない酒を滅多矢鱈に強ひよるぢやないか。俺やむかつくの、むかつかないのつて、亡者の酒と思へや、此「サケ」如何なるかと思つて、氣が揉めて仕方がないのぢや。よく考へて見よ、あの金を呉れやつた蝶蝮別やお民や治國別、龍公、其他將軍に副官、めて八人も天の八衢とか幽冥界とかへ行つて來て俄に弱氣になり、モウ明日から劍は持つ事ならぬとか、戦はやめだとか、戦するよりも三五教の神様を一生懸命に拜めとか、幽霊みた様な事を吐すぢやないか。俺やモウ、それがムカムカするのだ。齋苑の館へ行つて天晴功名手柄を現はし、一國の宰相にでもならうと思つて居つたのに、サツパリ源助だ。ワク、貴様は之でも何ともないか、エ、ーン』

「智勇兼備のランチ將軍さまだ。それに片彦さまの様な豪傑がついてゐるのだから、吾々の燕雀は、そんな事に口嘴を容れるものぢやない。それよりも結構なお酒を頂戴したのだから、おとなしう呑んで寝たがよからうぞ」

「これが如何して寝られるかい。武装撤廢だとか軍備廢止だとか、餘り胸のよくない話を聞くぢやないか。吾々一兵卒と雖も之が默許せられるか。貴様も餘程腰抜けだな」

「さうぢやないよ、淨海入道の法衣みた様なものだ。表面に法衣を着て裏面に甲冑を装うて居る様な有様だ。あゝ云ふ三五教の治國別を陷穽を入れて殺し損ねたり、却て自分が死ぬ様な目にあひ給ひ、治國別や其他の者に油斷させるために、軍隊一般にあの様な事をお觸れになつたのだよ。貴様は馬鹿正直だからな」

「それなら氣が利いてる。如何やら、それらしくないぞ。最前もテルンスが云つて居たが、兩將軍竝に副官迄が一生懸命に三五のお經を唱へ、之から軍隊を解散するか、但し一般を三五教の信者にするかと云ふ了簡らしいぞ」

「そんな事があつたら俺だつて此儘にや濟ますものか。忽ちハルナの都に注進し

て、お褒めを頂き、マア將軍の後釜にでもなるのだな。其時や貴様も秘書官位にしてやるわ。さうして月の國の相當の、二三萬の人口ある刹帝利に使つてやるから、マア楽しんで待つたがよからう」

「馬鹿云ふな。果してランチ將軍が三五教に恍けよつたなら、俺が全軍の指揮官となり齋苑の館を蹂躪し、七千餘ヶ國の月の國を少くも五分の一位頂戴し、貴様を其中の一番小さい國の刹帝利に使はぬ事もない。それも貴様の心の持ち様一つだ。ア、斯んな事を思ふと腹立も何處かへ消滅して了つた。ランチ將軍や片彦將軍が三五教に沈没すれば、却て吾々の榮進の道が開くと云ふものだ。かう思へば腹立處か、雙手を擧げて賛成すべきものだ」

エム「何と俄に御機嫌が直つたぢやないか。然しさう世の中は思惑通りに行くものぢやないよ。あれだけ武名高き片彦將軍だつて、あの通り治國別に敗北したのだからな。マア、そんな空想は止めにして、もう少しばかりお神酒を頂き、果して將軍様が三五教になられるか、但は治國別一行を征伐なさる御計略か、トツクリと二三日待つて調べた上でなけりや、ウツカリした事云つて將軍の耳にでも這

入つたら大變だぞ」

かかる所へ見廻りに來たのは、陣中にも稍相當の位置を持つてるテルンスであつた。テルンスはツカツカと入り來り、

「オイ、お前達は今何を云つてゐたか」

コー「ハイ、いえ別に何にも云つた覚えはムいませぬ。治國別を一つ計略にかけ、亡き者にすれば結構だと云つたのです。それより外は何も云ひませぬ。のうワク、エムさうだろ」

「馬鹿云ふな。貴様はハルナの都へ注進するとか、全軍の指揮官になるとか、大それた事を申したぢやないか」

「ウン、そりや申しました。然し酒の上で一寸法螺を吹いてみたのですよ。よう考へて御覽なさいませ。テルンスと云ふ上官があるのに、貴方を差措いてそんな事が出來ますかな。何卒冷靜にお考へ下さい」

「おい、ワク、エム、コーが今云つてる事は本當か、嘘か、如何だ」
ワク「へー、嘘らしうもあり、本當らしうもムいます。十分に酩酊して居つたも

のですから、何を云つたか満足に聞えませず、私だつて酒が云つたのだから、肝腎の御本人は何も知りや知りませぬ。何卒大目に見てやつて下さい」

「コリヤ其方は詐りを申しぢやならないぞ。本當の事を云はないか」

「酒に酔うて居ましたから、酔うて居つて何の覺えもないと云ふのです。それが事實ですもの」

「ヨシ、知らぬなら知らぬでよい。明日は締木にかけてでも白状致さす。何程辨解致しても此方はシツカリ證據が押へてあるのだ」

と云ひながら戸をピシャツと荒く閉め、又次の兵舎に足音を忍ばせ進み行く。

後に三人は小聲になり、

ワク「それ見よ、コーの奴め、仕様もない事を吐かすから俺迄も疑はれて了ふのだ。俺とエムとが貴様の云つてる事を本當に證明しようものなら、お前の生命はないのだぞ。なあエム、俺だとして、隠されるだけは隠してやるけど、痛い目や辛い目に遇ふのなら、本當の事を云つてやらう。それが自利上、否吾身保全の上にあつて最も利巧のやり方だ」

「さうとも、俺だとて、痛い目や苦しい目までしてコーの保護してやつた所で別に喜ぶでもなし、何時も組頭顔をしやがって俺達を頭抑へに抑へやがるから、いい敵討ちの時が到来したのだよ。こらコー、恐れ入ったか」

と稍巻舌になりながら後前を見ずに喋り出した。コーは二人に素破抜かれちや大變だと思ひ、傍の劍を執るより早く二人に向つて斬りつけた。二人は手早く身を躲し、コーの兩足をグツとさらへて仰向けにドタンと倒した。コーは大いに怒り、己れ、兩人、もはや了簡はならぬ。もう斯うなる上は死物狂ひだ、覺悟をせよ」と大刀を提げ斬つてかかる。ワク、エムの兩人は表にバラバラと驅け出し、雪道を轉け惑ふ。コーは狂氣になつて追驅け廻る。忽ちコーは雪に包まれた捨石に膝頭を打ち、

「アイタツタ」

と云つたきり目を廻し、抜刀の儘雪の上に倒れて了つた。エム、ワクの兩人は狼狽へてテルンスの營舎へ走り行き、息を喘ませながら、ワク「テ、テ、テ、テルンス様、何卒夕々、助けて下さいませ」

と云ひながらエムと共に轉げ込んだ。テルンスは二人の慌しき勢に不審を抱き、
「其方はワク、エムの兩人ぢやないか。何を騒々しく夜中にやつて来るのだ。何か變事が突發したのか」

ワク「タ、タ、大變が出来ました。コーの奴、喋った事を貴方に素破ぬくと申したら、怒つて大刀を振上げ、ソレ：そこに追驅けて來ます。いつもなら私はあんな奴の三人や五人恐れはしませぬが、何分足も充分運べぬやうに酩酊してるものですから、如何する事も出来ませぬ。何卒彼奴を掴まへて下さい」

「アー、さうか、コーは何と申して居った」

エム「へー、ハルナの都へランチ將軍、片彦將軍の三五教に惚けた事を早馬に乗つて注進し、自分が全軍の指揮官になり、月の國の刹帝利になるとか云つて居りましたよ。私とワクとは、もしもそんな事になつたら、テルンスさまを將軍に仰ぐと云ひましたら、大變に怒つて大刀を引き抜き私を殺しにかつたのです。あんな悪人はお爲になりませぬ。何卒捕手を出して捕へて下さい」
と虚實交々ませせて述べ立てた。

「何、コーが左様の事を申して居つたか。中々以て氣骨のある奴だ。大に見込みがある。其方は之からコーを拙者の命令だと云つて呼んで来い。相談し度い事があるから」

ワク「オ、オイ、エム、お前行つて来い。俺や足がチツとも動かないわ」

「俺だつて酒に足を取られてゐるのだから、一足も歩けぬぢやないか」

「一足も歩けぬと申すか、此處まで如何して来たのだ」

エム「ハイ、雪の中を轉げて来ました」

「然らば轉げて呼んで来い。それで結構だ」

「へー、それだけは何卒御免下さいませな」

「イヤ、ならぬ。上官の命令だ」

「上官の命令と仰有つても、あんな危険の奴の所へ行かうものなら、私の首がなくなりませぬ」

「首がなくなつた所で別に俺の損害になるでもなし、構はぬぢやないか。貴様等の小童武者の一人位死んでも何かい。武士は戦場に屍を曝すが名譽だ」

「オイ、ワク、貴様御苦勞だが御用に行つて呉れないか」

「アイタ、俄に腰が痛くなつた。オイ、エム、一つ撫でてくれ。息がつまりさうだ。アー、痛い痛い痛い」

「アハ、ハ、ハ、ナマクラの奴ばかりだな、卑怯者奴が。何のために貴様の様な奴を飼うてあるのだ。マサカの時に生命を捨てさす爲に、高いパンを食はしておいてあるぢやないか」

エム「まるで鶏か豚を飼ふ様に仰有いますな。そりやあまりです。チツとは情と云ふ事を考へて下さいませ」

「馬鹿申せ。慈悲や情に構つて居つて、こんな人殺し商賣が出来るか。残忍の上にも残忍性を發揮するために、毎日毎日劍術をやつたり柔術を稽古してるぢやないか」

「それは吾身を保護する爲の稽古ぢやありませんか」

「馬鹿申せ、吾身を保護する爲なら、こんなに澤山の軍隊がかたまる必要がないぢやないか。かく迄大部隊を引率して將軍がお出でたのは敵を塵しにするためだ。」

その爲に槍や劍を持たしてあるのだ。槍や劍は決して猪や狸を斬るためぢやないぞ。人斬り庖丁と云つて人を斬るためだ。そんな事が分らずに武士の本分が盡せるものか」

「それでも、軍人は平和の守り神と云ふぢやありませんか」

「或時は平和の守り神となり、或時は天下の攪亂者となり、血河屍山を築き、以て敵國を占領し、戦利品を澤山に收納するのが武士の本領だ」

「まるで強盗みた様なものですか」

「貴様は餘程よい頓馬だな。軍隊の必要とならば人家も焼かねばならず、人命もとらねばならず、米麥、金錢は申すに及ばず、豚鶏、大根蕪、凡て必需品は無斷徴集するのだ。それでなくては、何で軍隊の維持が保たれるか」

「おい、ワク、テルンスさまの仰有る事あ、チツと道理に叶はぬぢやないか。二つ目には、斬るの、盗むのと、そんな武士があるものだらうかな」

「そら、さうだな」

テルンスは抜く手も見せず雪にひらめく氷の刃、忽ちエムの首を薙ぎ落とし、返

す刀かたなにワクの頭かづへを無殘むざんにも斬きり落おとし、雪ゆきの庭にはは忽たちまち紅くれなゐに化くわした。

(大正一二・一・一四 舊一一・一一・二八 北村隆光録)

第二〇章 心の鬼こゝろのおに (一二七四)

テルンスは、エム、ワクの兩人りやうにんを祕密ひみつの暴露ばくろせむ事ことを恐おそれて無殘むざんにも切きり捨すて、心地こころちよげに打うち笑わらひ獨言ひとりごと、

「此奴等こいつら兩人ふたりはランチ、片彦兩將軍かたひこりやうしやうぐんの間者かんじゃだと云いふ事は豫かねて承知しやうちし居をつた。吾々われわれが軍隊ぐんたいの指揮權しきけんを握にぎる時節じせつがいよいよ到來たうらい致いたしたと云いふものだ。兩將軍りやうしやうぐんはいよいよ三五教あななひけうの宣傳使せんてんしにチヨロまかされ、骨ほねのない蛸たこか蒟蒻こんじやくの化物ばけものの様やうになつて了しまた。いつ迄までも上うへに大將たいしやうがあると、吾々われわれの向上かうじやうの道みちを硬塞かうそくし、金槌かなづちの川流かはながれ、出世しゆつせする道みちがない、然しかるに都合つがふよく兩將軍りやうしやうぐん初め兩副官りやうふくくわんエキス迄までがすつかり軍職ぐんしやくを止やめて了しまひよつた。かうなる上うへは、階級順かいきふじゆんによつて全軍ぜんぐんの指揮官しきくわんとなるのはトランス、

バルクの兩人だ。俺達は折角榮進の道が開けても矢張り人の頭使に甘んぜなくてはならぬ。此時こそは時刻を移さずハルナの都に急使を馳せ、大黒主様に「治國別のため、ランチ、片彦兩將軍及びガリヤ、ケーヌ兩人は、バラモン教を捨てて却て職權を利用し、反對にハルナの都に攻め寄せむとす。故にテルンス、コーの兩人は此計略を知り注進仕る。何卒臨時にても差支へなくば、全軍指揮官をテルンス、コーの兩人にお任せ下さい」と云はうものなら、いよいよ願望成就だ。然るに此等二人が居ては秘密が洩れると思つて、コーに喋し合せ、酒によせて泥を吐かせ置いたのだ」

かかる所へコーは劍を杖につきながらヒヨロリヒヨロリとやつて來た。

「ヤア、其方はコーではないか」

「ハイ左様でムいます。此奴等兩人を切つて捨てむと追ひまくる中、少々酩酊致して居りましたせいか、庭石に躓き一時氣も遠くなりましたが、やうやう起き直り、劍を杖に痛い膝を押へながら此處迄參りました。何と心地よく斃つたものですなア」

「アハ、ハ、ハ、拙者の深謀奇策はマア、ざつと此通りだ。斯うなる上は一刻も早く手紙を認め、早馬使を部下より選抜してハルナの都に遣はさう。さうすれば、このテルンスはランチ將軍の後釜、其方は片彦將軍の後釜だ。グツグツして居て他の奴に先を越されては詰らない、サア早く、コー、用意をせよ」

「ハイ、直様用意を致しますが、何だか首筋がゾクゾク致しまして、思ふやうに身體が動きませぬわ。手足の筋も骨も固くなつて仕舞ふやうです。あれ御覽なさいませ。二人の死骸から青い火がボヤボヤと燃え出したぢやありませんか」

テルンスの目には何も見えなかつたが、コーには二人の死骸から青い光が頻りと燃え出した。そして青い火から青い人の顔が見え出した。よく見ればエム、ワクの兩人であつた。コーは手足をブルブルさせながら、

「コ、コ、コレ、ワ、ワ、ソ、ソ、そんな怖い顔をして俺を睨んだつて、俺が殺したのぢやない、恨があるなら、テルンス様に云ふがよい。私は酒の上で只剣を抜いただけだ。コリヤ、ソ、そんな怖い顔をするな、ユ、幽霊め、もしもしテルンス様、どうかして下さいな。火の中から怖い顔をして、今にも噛みつき

さうにして居ります」

「オイ、コー、確りせぬか。火が出るの幽霊が出るのと、そりや貴様の神経だ。二人の死骸は前に首と胴とになつて斃つて居るが、そんな青い火だの幽霊だのと、そんなものがあつて耐るか」

「ア、、、此奴は耐らぬ。オイ、ワク、エム、見當違しちや困る、俺ぢやない、下手人はテルンスさまだ。恨みるのならテルンスさまを恨みて呉れ。コ、、コレヤ、そんな怖い顔をすな」

青い火は段々と大きくなり、遂にはテルンスの目にも入るやうになつて来た。

テルンスは初めて驚き、「ちりげ」もとがザクザクし出した。されど氣が弱くは叶はじと戦く胸をじつと抑へ空氣焰を吐いて居る。されど手も足もワクワクと地震の孫のやうに慄うて居る。今、斬り捨てられたワク、エムの兩人は厭らしき形相となり、口より火焰を吐き、眞青の頬となり、血走つた眼を剥き出しながら、両手を前に垂れ、身體一面慄はせながら、細き蚊の鳴くやうな聲で、ワク「恨めしやな、残念至極、口惜しやな、汝テルンスの惡人輩、假令此肉體は

汝の手にかかつて果つとも、魂魄此世に留まつて、汝が素首を引きぬき、地獄のどん底に連れ行き、無念を晴らさねば置かぬぞ。ヤア恨めしや」
と死體に足をくつつけながら、前によつたり後に引いたりして居る。

一方エムの體よりは、又もや怪しき幽霊立ち出で、青い火に包まれながら、
「ヤア恨めしや、テルンスの悪人奴。よくも某を無残にも手にかけたな、此恨み晴らさで置かうか」

と二人の幽霊は交る交るにテルンスの左右より進んだり退いたりして睨め付けて居る。テルンスは恐怖心から、手足は慄ひ戦き逃げる事も得せず、遂にはキヤツキヤツと聲張り上げて救ひを叫び出した。其聲は何とも云へぬ、凄味を帯びた嫌らしいものであつた。コーは此體を見て雪の上を轉げながら、十間ばかり此方に逃げ來り、肝を潰してパタリとふん伸びて了つた。

折から進み來る夜警の二人は此有様を見て、腰を抜かさむばかりに打ち驚き、片彦將軍の居間をさして韋駄天走りに駆けつけ、
夜警の一「モシモシ將軍様、夕、大變でムいます。ユ、幽霊が二體も現はれまし

た。そしてテルンスが兩方から幽霊に責惱まされ困つて居ります。如何致してよろしきや、餘りの怖ろしさに一寸御報告申します」

「何、幽霊が出たと、そいつは妙な事を聞くものだ。拙者も幽界旅行より歸つてまだ間もなきに、幽霊が出たとは思議千萬だ。ドレ、是から治國別様に夜中ながら申上げ、實地檢分に往つて見よう」

夜警の二「將軍様、どうぞ貴方來て下さいませ、私は恐ろしくて體が縮みます」

「アハ、何と氣のチヨロイ男だな。俺も何だか首元が、ゾクゾクと致しはせぬでもないワイ」

かかる所へ、お寅は小便に出で、人聲がするので不思議と思ひ門口を覗けば、片彦將軍と二人の夜警が幽霊の出た話をして居る。お寅はこれを聞くより氣丈な女とて、夜警を促し其場に到り見れば、果して夜警の云つた通り、テルンスは門口に立ち、怪しき幽霊が兩方より蠅螂のやうな手つきで互交に苦しめて居る。お寅は傍に走り寄り、泰然自若として天津祝詞を奏上した上に、天の數歌を聲緩やかに歌ひ終つた。不思議や二人の幽霊は、數歌を歌ひ終ると共に煙の如く消えて

仕舞つた。

よくよく見れば、エム、ワクの兩人は雪の上に酒に酔つて打つ倒れ、怪我一つして居なかつた。テルンスは大に驚き、自分の悪しき企みを、包まず隠さず、ランチ、片彦兩將軍の前に自白して其罪を謝した。併しながら此陣營には二千人ばかりの軍卒が、ランチ將軍指揮の下に駐屯して居たが、將軍が三五教に歸順せし事を發表すると共に、武器を捨てて各地に自由に出で往くもあり、中には鬼舂別將軍に早馬に乗つて報告するものもあり、遙々とハルナの都へ忠義だてに駆け往くものもあつた。

そして浮木の森の陣營は支離滅裂に解體され、殺風景のこの地も、軍人の片影をも認めない以前の平和なる村落となつた。

治國別、ランチ將軍、其他一同の今後の行動は後日述ぶる事とする。嗚呼惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・一・一四 舊一一・一一・二八 加藤明子録)

靈界物語 第四八卷 舍身活躍 亥の卷
終り